

諫早市文化財調査報告書 第6集

は じ の お
土師野尾古窯跡群

1985. 3

諫 早 市 教 育 委 員 会

発刊のことば

諫早市土師野尾町に古い窯跡が発見されてからかなりの年月がたち、いろんな論議がなされてまいりました。また土師野尾焼については陶片も多数出ており、肥前古陶のなかでどのように位置づけるかということも研究されていたようです。しかしこれらの解明は浅く、学問的に深く研究されるということはありませんでした。従って土師野尾焼について窯跡を中心に調査を実施することは教育委員会にとりましても当面の課題であったわけです。

こうしたなか、文化庁、県教育委員会のご指導とご援助により、また一方地権者の方々のご理解を得て昭和59年7月窯跡の発掘にあたりました。

経過につきましては本論の中に述べていますが、土師野尾焼は私達諫早の先人たちの偉大な文化遺産であったと思っております。近世の始め諫早にも立派な陶工達がいたという確信も得ました。恐らく土師野尾の地名と共に、ずっとそれ以前から焼物と取り組んでいた先人たちがいたのではないかという思いも強くなって参りました。

文化遺産について解明を行い、それを後世に残すことは、現在を生きる私達に課せられた務めでもありましょう。このような意味で風評と憶測の土師野尾焼に少しでも科学のメスを加え得たことは、良かったという評価をしております。

終わりにこの調査にあたり、種々のご指導と御助言をいただきました文化庁、県教育委員会、調査員、土師野尾焼検討会委員並びに地権者の方や作業に従事していただきました皆さん方に、心から感謝申し上げます。発刊のことばといたします。

昭和60年3月31日

諫早市教育長 西原 英麿

例 言

1. 本書は、昭和59年度、国・県の補助金を受けて実施した土師野尾古窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は諫早市教育委員会が実施した。なお、調査に対して、長崎県文化課、長崎県立美術博物館の指導・協力を賜わった。
3. 残留磁気測定に関しては、島根大学理学部の全面的な協力を得、またその測定結果については伊藤晴明教授、時枝克安助教授に玉稿を賜わった。
4. 出土遺物等については、諫早市教育委員会が諫早市郷土館において、公開・保存している。
5. 本書の執筆者は次のとおりである。
I～IV・VI・VII—3……秀島貞康
V……………伊藤晴明・時枝克安
VII……………下川達彌
6. 遺構の実測・写真撮影は下川・秀島・古賀佐徳が行い、副島邦弘・村川逸朗両氏の協力を得た。また、本書掲載の図面、図版等の作成は秀島が行った。
7. 本書に使用した高度値は海拔高であり、方位は磁北を示している。
8. 本書の編集は秀島が行った。

本文目次

発刊のことば

例言

I	調査にいたる経緯	1
II	遺跡の立地と環境	3
III	ハラタラ古窯跡の調査	7
	1. 調査の経過	7
	2. 遺構	9
	3. 出土遺物	10
	4. 小結	19
IV	中道古窯跡の調査	20
	1. 調査の経過	20
	2. 遺構	21
	3. 出土遺物	26
	4. 小結	42
V	土師野尾古窯跡の残留磁気測定	43
VI	結論	47
VII	唐津系陶器の中における土師野尾窯について	51
	1. 唐津系陶器の流れ	51
	2. 唐津系陶器における土師野尾窯の位置	52
	3. 土師野尾窯の伝世品について	54

挿 図 目 次

第1図	諫早市位置図 (1/1,600,000).....	3
第2図	遺跡分布図 (1/40,000)	4
第3図	ハラタラ古窯跡地形図 (1/300).....	8
第4図	ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	13
第5図	ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	14
第6図	ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	15
第7図	ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	16
第8図	ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	17
第9図	ハラタラ古窯跡出土遺物及び表採資料実測図 (1/2)	18
第10図	中道古窯跡地形図 (1/300)	21
第11図	各室計測図.....	24
第12図	物原土層断面図 (1/30)	25
第13図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	33
第14図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	34
第15図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	35
第16図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	36
第17図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	37
第18図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	38
第19図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	39
第20図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	40
第21図	中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)	41
第22図	中道古窯跡試料採取場所.....	43
第23図	中道古窯跡残留磁気方向.....	44
第24図	ハラタラ古窯跡残留磁気方向.....	45
第25図	地磁気永年変化図 (広岡, 1977) と中道古窯跡の測定値 (+印)	46
第26図	土師野尾焼伝世品 (1/3)	57
第27図	土師野尾焼伝世品 (1/3)	58

表 目 次

第1表	遺跡地名表	5
第2表	各室計測表	24
第3表	出土遺物一覧表	30
第4表	出土遺物一覧表	31
第5表	出土遺物一覧表	32

別 図 目 次

別図第1	ハラタラ古窯跡実測図 (1/30)
別図第2	中道古窯跡実測図 (1/30)

図 版 目 次

図版1	ハラタラ古窯跡全景 (西より) 窯跡全景 (西より)	図版10	第2室左隅の状況 第2室全景
図版2	第3室の状況 第3室遺物出土状況 第3室遺物出土状況	図版11	第3室奥壁状況 第3室左隅の状況 第4室奥壁状況
図版3	第1室から煙出し 第1室から煙出し 第1室東壁残存状況	図版12	第3室火床状況 第3室火床状況 第3室焚口部状況
図版4	第1室焚口状況 調査風景 調査風景	図版13	第3室火床状況 第4室・第5室全景 第4室焚口部及び第5室右側壁状況
図版5	出土遺物	図版14	遺物出土状況 (第3室) 遺物出土状況 (物原) 土層断面 (側溝)
図版6	出土遺物	図版15	土層断面 (物原) 調査風景 残留磁気測定試料採取風景
図版7	中道古窯跡全景 (西より) 窯跡全景 落ち込み部全景	図版16	出土遺物
図版8	煙出し状況 煙出し状況 煙出し細部	図版17	出土遺物
図版9	第1室から第2室の状況 第1室奥壁状況 第1室焚口部状況	図版18	出土遺物
		図版19	土師野尾窯伝世品

I 調査にいたる経緯

土師野尾古窯跡は、昭和2年陶芸研究家金原陶片（京一）氏によって発見され、諫早系の焼き物窯として昭和10年、水町和三郎氏と共に編纂を行った『肥前古窯址めぐり^{註1}』の中で紹介され世人の目の触れるところとなった。同書によれば、土師野尾窯としては、中道古窯跡1ヶ所を挙げているのみである。

この土師野尾焼について地元には、諫早家始祖・龍造寺家晴公が文禄・慶長の役の折に、帯同された朝鮮陶工が窯煙を昇らせた、という伝えがある。又、帯同された朝鮮陶工がその後唐津に移り、唐津焼を焼造したとも伝え聞いているとのことであつた。この帯同された朝鮮陶工はその名を道珍（どうちん）と言ひ、その焼き物を道珍焼きと言つたそうである。また、中道古窯跡の立地する南側の浅い谷を道珍谷と呼称するとのことであつた。いずれにしても、土師野尾焼は、豊臣秀吉の文禄・慶長の役以降に開窯されたという伝えであるところは、他の窯跡の場合と同様である。

この土師野尾古窯跡に関する文献史料は現在のところ皆無であり、多くの疑問点を内包している。そこで、この疑問点を少しでも解決する手掛かりは存在しないのか、ということが今回の発掘調査の端緒であつた。事業計画に先立つての疑問点と問題点は

1. 窯跡がどのような構造を示しているのか、またその規模はどの程度のものか。
2. 焼造された製品にはどのような物があるのか。
3. 2の製品はどのような系統に属するのか。
4. 焼造年代は何時頃か。
5. 窯跡の基数は何基位か。

という学術的な観点と

6. 現在、窯跡の立地点が植林地となっていること、また古く道路敷設の折窯体の一部が破壊されそのまま放置されており、遠からず消滅する可能性が高いため、その保存策の勘案。
7. 現時点で唐津焼系統の窯跡として最南に位置しており、調査結果を踏まえた上で、保護・顕彰のための指定の措置ができないか。

という行政的な観点の二相が存在したのである。

そこで、昭和59年1月に事業計画を作製し、国庫・県費補助事業として実施したい旨の計画書を提出したのである。

その結果、同年4月、国庫・県費補助事業として発掘調査を実施することが決定した。

発掘調査は、7月下旬より実施し、その後事務の都合により調査を一時中断し、10月中旬に終了した。

調査終了後、土師野尾焼に関する検討会を実施し、意見交換を行った。

土師野尾古窯跡発掘調査関係者は次の通りである。

西原 英麿	諫早市教育委員会教育長
山口 隆昭	教育次長
松尾 誠	社会教育課長
鶴田 勲	課長補佐兼指導係長
山口 勝実	課長補佐 (昭和59年7月1日移動)
芦塚 信正	庶務係長
木原 保夫	事務職員
平古場 豊	〃
草野マスエ	〃
秀島 貞康	〃 調査担当

調査に際し、ご指導頂いた調査員は次の通りである。

古賀 佐徳	
下川 達彌	長崎県立美術博物館主任学芸員
伊藤 晴明	島根大学理学部教授
時枝 克安	〃 助教授

土師野尾焼検討会委員

植村富士男	諫早市文化財保護審議会委員
山部 淳	〃
古賀 力	〃
古賀 佐徳	
下川 達彌	前出
西川 武則	陶芸家
松本 春雄	諫早市経済部商工観光課長

調査外業・内業に従事して頂いた方々は次の通りである。

今里シヨ、田中クサエ、中路正之、中路フミエ、百武玲子、山口トシエ、山本やす子、平古場久美子

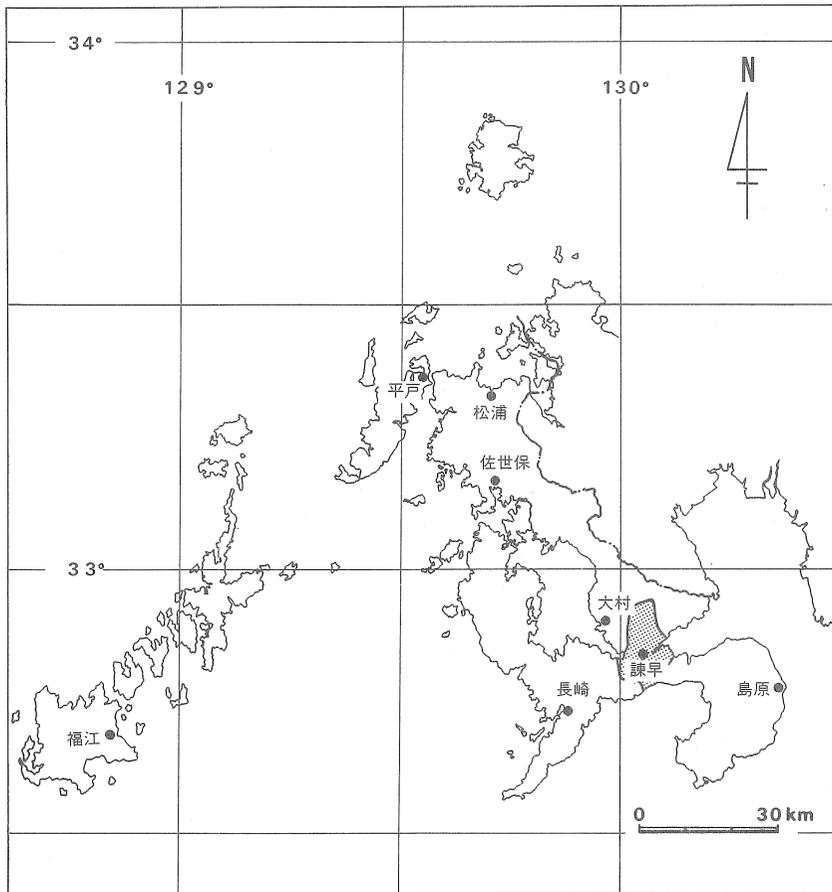
発掘調査及び整理作業に際して、下記の方々、関係機関にご指導とご助言を賜わった。ご芳名を記し深甚の謝意を表するものである。(敬称略、五十音順)

青木龍山、麻生優、有田町教育委員会、諫早市郷土館(野中素、吉田碩男、山口玲子)、稲田三千年、稲富裕和、江口勝美、大橋康二、織田武人、唐津市教育委員会、川内知子、北波多村教育委員会、九州陶磁文化館、副島邦弘、立平進、田中重秋、田中時雄、田中豊喜、田中幸男、沈寿官、塚原優季、土井正吉、富永忠久、長崎県文化課、長崎県立美術博物館、中野章子、永松実、夏秋隆一、西有田町教育委員会、波佐見町教育委員会、久村貞男、福田良之、村川逸朗、森内敏和、山崎猛夫

II 遺跡の立地と環境

土師野尾古窯跡群は、北緯32°49′、東経130°02′の諫早市土師野尾町に所在する。国鉄諫早駅より南へ約6 km、県道江ノ浦諫早線の西側に位置する。この県道より分枝する市道を大鳥居を潜って西行すると約500m程で左に折れる道がある。この道を地元では中道と呼んでいる。この道を進むと左手にハラタラ古窯跡、右手に中道古窯跡があり、再び県道と繋っている。

さて、本書では従来土師野尾窯と呼称されていたものを土師野尾古窯跡群と改めた。それは窯跡が2基或いはそれ以上存在する可能性があることによる。古窯跡名については、字地名を取って付した。今次の調査ではハラタラ古窯跡と中道古窯跡の2地点2基を発掘調査している。また分布調査を実施したが、時期が夏季であったことと、雑木が繁茂していることにより他の窯跡の確認はなし得なかった。



第1図 諫早市位置図 (1/1,600,000)



第2図 遺跡分布図 (1/40,000)

第1表 遺跡地名表

	遺跡名	所在地	立地	出土遺物等	時代
1	ハラタラ古窯跡	土師野尾町2118	標高55m丘陵	瓦・陶器	近世
2	中道古窯跡	土師野尾町	65m丘陵下部		近世
3	船蔵石遺跡	土師野尾町	90m丘陵		不明
4	下後古場遺跡	土師野尾町	55m丘陵		縄文
5	土師野尾遺跡	土師野尾町1596	10m丘陵先端	黒曜石剥片・石鏃	縄文
6	駄森横石塚	栗面町駄森	40m丘陵		不明
7	久山古墳	久山町	14m平野		古墳
8	笹原遺跡	久山町1609他	43m丘陵	黒曜石剥片・碎片	縄文
9	長牟田遺跡	津久葉町長牟田	35m丘陵	石鏃・剥片・碎片	縄・中世
10	西輪久道遺跡	津久葉町	20m丘陵	縄文式土器	先・縄
11	久山城	久山町	85m丘陵		中世
12	赤島遺跡	久山町	10m丘陵	黒曜石剥片・碎片・削器・他多量	縄文
13	滑川遺跡	久山町滑川	2~7m独立丘陵	土器片・石碑・箱式石棺・須恵器・土師器	縄・弥・古
14	貝津横島A遺跡	貝津町横島	10m丘陵先端		弥・古
15	東大久保遺跡	貝津町東大久保881他	5m丘陵先端	マイクロコア・剥片・石鏃	先・縄
16	柿崎遺跡	貝津町大久保	15m丘陵	ナイフ・剥片	先・縄
17	平山A遺跡	平山町	20m丘陵上先端	黒曜石剥片	縄文
18	貝津横島B遺跡	貝津町横島	2~6m丘陵		不明
19	西佐竹遺跡	貝津町西佐竹	11m丘陵	石斧	縄文
20	高城址	高城町	50m丘陵		中世
21	真崎西遺跡	真崎町102	10m丘陵	ナイフ・黒曜石剥片	先土器
22	真崎城	真崎町城山	65m丘陵		中世
23	永昌遺跡	永昌町	40m丘陵尾根	黒曜石剥片	縄文
24	上打越遺跡	柴田町上打越	52m丘陵斜面	ナイフ・黒曜石剥片	先土器
25	八天下遺跡	柴田町八天下	55m丘陵上斜面	ナイフ・石鏃・スクレーパー・土器片(弥生)・土師質土器	先・縄・弥
26	折山頭遺跡	日の出町折山頭	55m丘陵	黒曜石剥片	縄文?
27	上横址遺跡	日の出町	85m丘陵		縄文?

註 先……先土器時代
 縄……縄文時代
 弥……弥生時代
 古……古墳時代

ハラタラ古窯跡は、諫早市土師野尾町2119—1番地に所在し、現況は植林地である。八天岳（標高296.7m）から北東方へ延びる丘陵の裾部に立地しており、窯尻部で標高62.3mほどを測る。窯跡は黄白色を呈する地山を掘り下げて等高線に直交するように築造されている。胴木間と2～3室は造成によって既に消滅している。現在、3室が残存しており、窯尻部と第3室床面との比高は3.8m、残存長7.6mを測る。よって窯本体は約26.5°の勾配で登っていることとなる。これは現地表面にほぼ沿っており、往古も地表を僅かに掘り下げて築窯されていたことを窺せる。

中道古窯跡は諫早市土師野尾町1998—1番地に所在する。八天岳山麓に立地しており、ハラタラ古窯跡同様胴木間を含めて4～5室が消滅している。八天岳は標高100mあたりから、その傾斜を弛め裾野を形成している。その末端は標高50m位で、狭少な水田を形成する。中道古窯跡は、この水田面に入る僅かに高い標高より作られている。窯尻部の標高で約62mほどを測る。窯跡は等高線に直交するように構築され、地表面にほぼ沿っており、床面の勾配で約10°～15°を測る。

中道古窯跡の床面の勾配はハラタラ古窯跡に比較して約 $\frac{1}{2}$ をとり、また窯の構造についても大きな違いが指摘される。窯の形態差、床面勾配の違いは、立地に大きく影響を及ぼし、また窯構築の進歩をも窺わせている。

水系はハラタラ古窯跡北側と中道古窯跡東側に各々東大川及びその支流が地形を縫うように北走し、大村湾へと注いでいる。両水系とも水量は豊富で、両岸に狭少な水田面を形成させるにいたっている。

さて、土師野尾の地名については判然としていない。例えば『地名用語語源辞典』^{註2}の「はじ」の項には「②古代において製陶に従事した部民・土師部、およびそれを率いた土師氏にちなむ地名」とある。またその解説には「②のハジ（土師）とはハニ（土、粘土）・シ（師）の転」としている。いずれにしても、製陶或いは製陶のための粘土の取れる地ということであろう。何時の頃より土師野尾（ハジノオ）と呼称するようになったかは不明であるが、築窯・廃窯後付けられた地名であろうと考えられる。

また、市内には高麗小路（コウラシュウジ）、唐人廟（トウジンビョウ）などの地名・字名が残っていることも共に興味のあるところである。

Ⅲ ハラタラ古窯跡の調査

1. 調査の経過

ハラタラ古窯跡の調査の経過を日誌を基にその概略を記す。

・ 7月30日

本日より発掘調査に着手。休憩用のテントを設営し、器材の搬入を行う。その後調査地及びテント周辺の除草を行う。

・ 7月31日～8月1日

現状での遺跡写真撮影を行う。その後トレンチを等高線に平行して上・下2本設定し、窯の規模、物原の有無を調査する。上段のトレンチによって標高62.5mの位置までは窯が延びていないことが判明する。また下段のトレンチより焼土塊、窯壁片、陶器片が僅かに出土し、窯本体部に当たっていることが分かる。8月1日から県立美術博物館の下川氏が調査に参加される。

・ 8月2日～8月3日

下段のトレンチにより、ほぼ窯本体部分が捉えられたため、上・下位の調査に移る。この結果、窯室は僅か3室しか残存していないこと、またその遺存度も極めて低いことが判る。また床面の勾配が急であり、そのため窯壁の残存も殆んど認められない。この残存率の低さは、後世の営力も十分に考えられる。物原及び排水溝の確認を行うが、物原存在せず。窯の内部から陶器片が僅かに検出されるのみで、遺物量も極めて少ない。最下室の床面上に瓦や陶器片を含む一段高い部分が認められる。この部分は窯崩壊時のものと思われ、掘るとザクザクとした感じである。これを取り除くと容易に床面は確認されたが、砂床という感じには程遠い。

・ 8月4日～8月6日

窯本体及び周辺部の清掃を行い、写真撮影を実施。実測用の割り付けを行い、平面図の作製に取り掛かる。6日に古高取焼の古窯跡を調査された福岡県文化課の副島邦弘氏来跡。種々のご指導を頂く。

・ 8月12日～9月5日

事務事業の都合により作業を中止する。この間、8月21日、台風10号の影響により国指定の天然記念物「女夫木の大スギ」(諫早市小川町所在)の第一枝が枝折れする。その前後より、風雨が一段と激しさを増したため、ハラタラ・中道両古窯跡のテント張りを再度行う。この不測の事態により、その事後処理のため中止を延長せざるを得なくなる。

・ 9月17日

窯尻部の補足調査を行い、断面図及び見通し図を作製する。

・ 9月29日

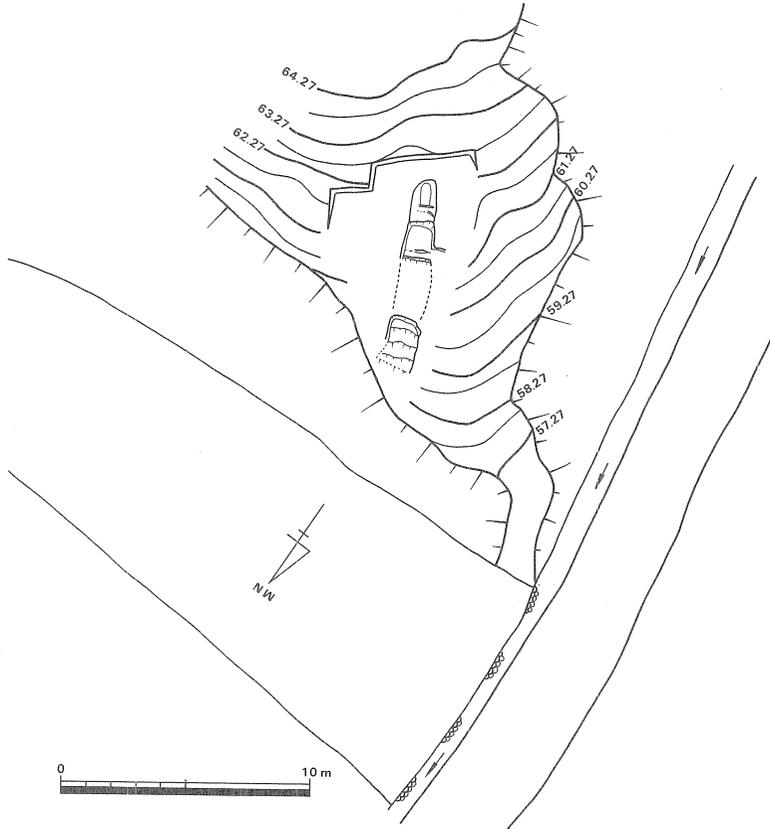
島根大学理学部の伊藤晴明教授，時枝克安助教授，残留磁気測定 of サンプル採取のため来諫される。雨の中での試料採取を夜の7時頃まで実施される。

・10月8日～10月13日

地形測量を行うが，レベル差があることと，雑木繁茂によりなかなか進捗せず。

・10月17日

埋め戻しを行う。急傾斜であるため，2～4段の土のうを6列ほど積んで終了する。本日をもってハラタラ古窯跡の調査を終了する。



第3図 ハラタラ古窯跡地形図 (1/300)

2. 遺構（別図第1，第3図，図版1～4）

検出された遺構は窯本体のみで，物原，柱穴等は確認されなかった。

窯体は煙出しと焼成室3室がある。胴木間から数室にかけて，造成によって既に存在しないため，窯尻方から室数番号を付している。窯体は胴木間方を北側に，焼出しを南側に向けており，主軸はN-27°-Eである。現存長7.6m，比高3.8mを測り，約26.5°前後の勾配で築窯されている。このように窯が急傾斜地に築かれているため，その保存度が極めて悪く，その形態等を僅かに看取し得たにすぎなかった。

しかし，窯の形態は従来の管見に明らかにされたものとは異なり，新知見を与えるものであった。床面はその斜度を変化させながら漸次高さを増し，更に急角度或いは段を付けて奥壁とし，次の焼成室へ繋がることを示し，また焼成室前面には明確な温座の巢が存在しない。これは従来呼称された階段状連房式とは大いに異なるところである。半地下式の割竹型登窯と称すべき形態を示している。

(1) 第3室

本窯跡最下位に位置するもので，奥行210cm，幅80～130cmを測り，窯室自体が僅かに「ノ」の字状に曲がっている。

床面は3ヶ所でその傾斜を変化させており，最上位の急傾斜で立ち上がる部分が次室とを繋ぐ奥壁である。しかし，側壁のような熱で溶解した窯壁は存在していない。これは急傾斜で登っていることにより，後世何らかの営力で遊離したと考えられる。ただ，奥壁部分であるということは被熱によって地山の土が固化していることによって窺われた。

窯室内には，崩壊土がブロックで残っていた。この層はガラガラとした瓦礫の層で，地山の小土塊が固化したもの（径5mm程度）と瓦の小片及び窯壁の小塊が混在しており，窯廃絶期の所産である。このブロックを取り除くと，明確な床面が検出された。この床面に続くべき火床及び火床境の検出はなされなかった。床面は約30°の勾配で登り，左側に傾いている。窯壁は両側壁に僅かに存在するのみで，その多くは剝落・遊離してしまっていた。

(2) 第2室

奥行240cm，幅100cm前後とみられるが，窯壁及び焼成面が把握できなかった。確認し得たのは，第1室に繋がる奥壁部の上位のみであった。この奥壁にひっかかるようにして陶器（第4図3）が出土した。また崩壊土中より陶器片等の出土が見られた。

(3) 第1室

奥行約180cm、幅90～100cmを測る。床面の形状は煙出しに向って漸次登っていくのではなく、火床境から約100cmの所でゆるい段を有し、更に30cmの所で段を持つという具合に、段をつけながら床面を少しずつ上げている。床面は川砂を敷いた形跡は全く無く、築窯時の掘り下げた地山面をそのまま床面として利用している。

火床は奥行25cm、幅100cmを測る。焼成室床面との比高は10cmほどである。焚口は右側に位置しており、粘土塊（窯道具と推される）を利用して一段高く作っている。また火床境には窯壁片の利用が認められ、この部位は後補されたのであらうと思われる。焚口右側は桧植樹の際破損しており不分明である。

側壁部の残存は僅かで、右側壁で約20cm、左側壁で約100cm程度であった。窯壁は地山面に粘土を塗り込めて構築しており、斜位の塗りバケの様子が看取された。室内からは瓦、播鉢などが僅かに出土した。

(4) 煙出し

第1室より約15cmほど上って連続する。窯尻との比高約15cmを測る。奥行105cm、最大幅100cmで、左・右2本の煙出孔を持つ構造である。右側の煙出孔は幅20～25cm、左側の煙出孔が30～35cm程度である。孔の断面は現状で半円形を呈しており、左側の孔底が右側の孔より約5cm下がっている。右側の煙出孔の直右には、小振りの長方形の石材を横位に据えて壁としている。元来は数個を4列ほど並べて煙道を形成したものであらうと推定される。煙出孔中央部の高まりは煙出しの天井部を支えるもので、赤変している。奥行95cm、幅40cmほどを測る。

この煙出しから第1室にかけての周縁は約30cmほどの幅で赤変しており、高温での焼成を如実に物語っている。この部位からの遺物の出土は瓦片が数片出土したに過ぎない。

3. 出土遺物（第4～9図、図版5・6）

・壺（1・2・4～6・10・11）

1は復元胴径183mmほどの胴部片である。胴上位に2本のへら描き沈線を有つ。体部は薄く水挽きされており、胎土は緻密で精良である。焼成は良好である。肩部には焼成時の火ぶくれが認められ、器表は剝落している。灰釉を掛けており、酸化炎焼成により淡黒色に発色している。2は肩部から口縁部にかけての資料である。若干焼け歪みが認められる。口縁部は外方に突出させ、端面に段を有す。頸部には3本のへら描き沈線と、上位に僅かに段を付けるようにへらで調整している。また肩部には貼付の把手が付いていたもので、その剝落痕が認められる。元来3～4個貼付されたものであらう。口唇部には重ね焼き、或いは伏せて焼いたと見られる痕跡が認められる。胎土は緻密で精良。焼成は良好である。色調は黄白～茶色を呈している。4は復元口径170mm、器高116mm、底径105mmを測る小形の広口壺である。碁笥底の底部からほぼ均

一の器壁を保ちながら内湾気味に胴部を作出し、頸部で垂直に近く立ち上がらせて外側に折り返して口縁部を作っている。口唇上面には浅い沈線が入る。また肩部にも浅い1本のヘラ描き沈線を入れている。胴部には左上がりの叩き痕かと思われる形跡がある。しかし内面には当て板の痕跡は認められない。この資料は全体的に火ぶくれが認められる。釉薬は灰釉が内・外面に掛けられ、内面灰白～淡黒色、外面淡黒色を呈している。また内外面に灰被りがあり、風化が進んでいる。胎土は灰白色を呈する緻密で精良な粘土を使用しており、焼成も良好である。しかし焼成時に破損しており、断面に自然釉が載っている。5は復元胴径320mmを測る。胴中位に2本のヘラ描き沈線を有つもので、胴径に比して器壁は薄い。胎土は灰色を呈する緻密で精良な粘土を使用しており、焼成も良好である。器表には鉄分の多い灰釉を施釉しており、淡緑～茶色に発色している。また内面には床面の土が固着している。6は復元胴径372mmを測る資料で、1条の貼付突帯を有している。この貼付突帯の上には指頭による刻み目を3cm間隔で付けている。焼成時に破損したもので、灰釉の発色にムラがある。濃緑色を呈する所や、発色不良の所が見受けられ、不良部分は風化が著しい。10は肩部の破片と見られるものであるが、傾きが分からないため直立にしている。須恵器様の肌合いを有つ資料である。上位はヨコナデ、中・下位は左上がりの叩き痕のような形跡が認められる。しかし、叩き(?)の後、ナデ消しているためその多くは器表面に現われていない。内面の調整はナデと思われる。胎土は灰色を呈する緻密・精良な粘土を使用しており、堅緻に焼き締められている。11も肩部資料と見做されるもので、1本のヘラ描き沈線を有つ。ほぼ全面に左上がりの10と同様の痕跡が見受けられる。この痕跡はナデ消され、かつヘラ描き沈線によって切られていることから成形時の叩き痕跡と考えられる。しかし、内面はロクロ目が残っており、当て板の痕跡をヨコナデして消去したものであると思われる。胎土・色調・焼成は10と同様で、この破片に関する限り施釉されていない。

・水差(3)

底部から丸く急に立ち上がる胴部は厚く、口縁部に近づくに従い薄く仕上げ、端部は丸く作出し内面に突出するクセをもつ。小破片であるため口径は不明。器高は90mm前後と思われ、高台の有無も不明。胎土は灰色を呈し、胎土は緻密で精良。焼成良好。灰釉を掛けていると見られるが発色していない。全体的に釉薬の風化が見受けられる。

・不明陶片(7・9)

7, 9共に相似た色調、胎土、焼成を示している。7は口縁部片と思われるもので、復元口径318mmを測る。内湾気味に立ち上がり、口唇部は平坦におさめている。外面ヨコナデで、口唇部及び内面はナデ調整を施す。9は蓋状のものか、或いは鏝状のものかのような形態を示すものか不明である。上面はナデ、端面はヨコナデ、下面には同心円状のナデ痕を残す。7と共に灰色を呈し、胎土は砂質っぽい。焼成は良好である。7と9は同一個体か、と思われる。無施釉である。

・灯明皿（8）

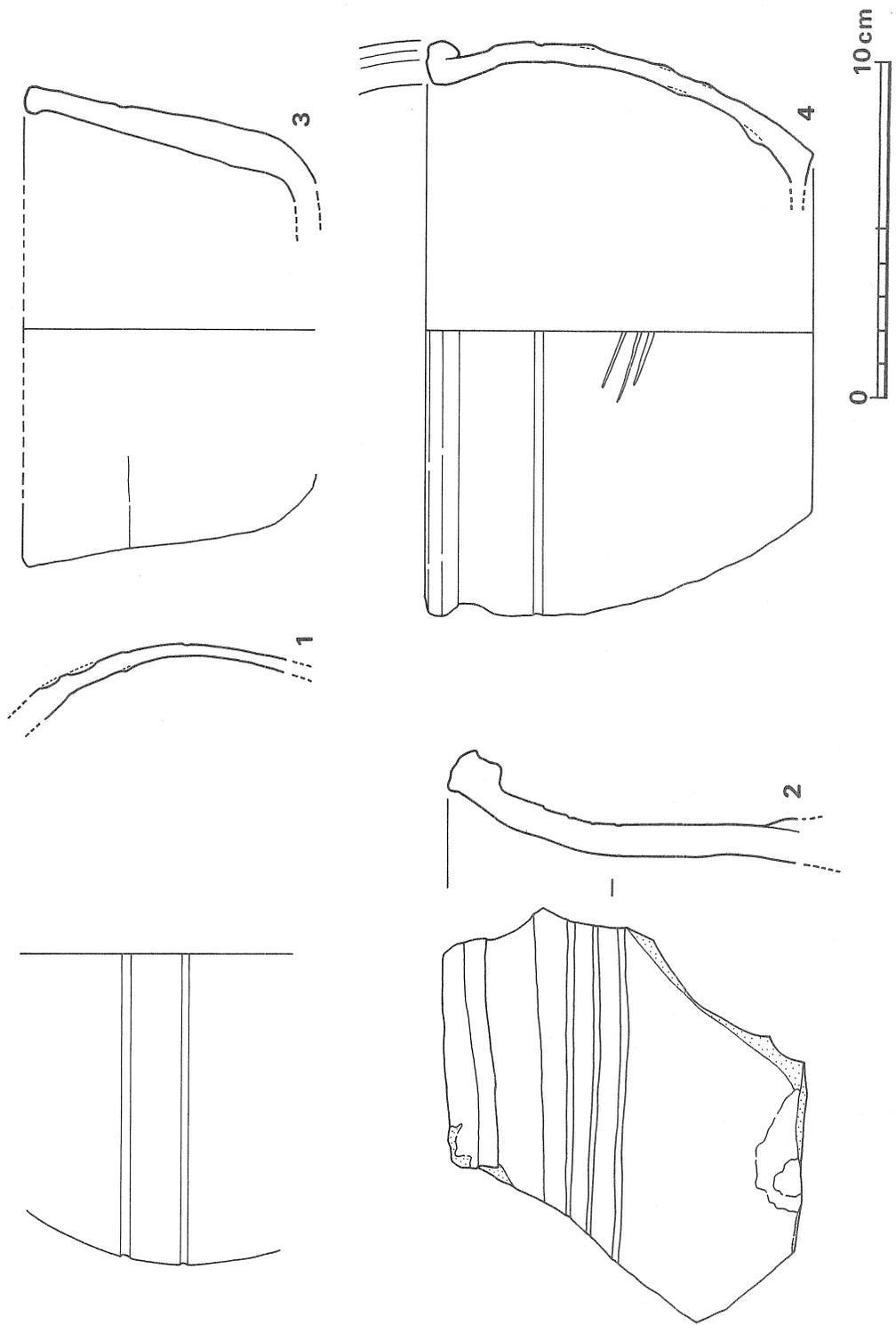
手捏ねによるもので口径70～74mm，底径66mm，器高14mmを測る。焼け歪みにより若干イビツになっている。油芯を受ける部分は舌状に粘土を貼付して作出する。灰被りが認められる。胎土は灰色で緻密・精良であり，鉄分が多く，外面に泌み出て茶色の光沢が見られる。焼成も良好であるが，温度が上がりすぎて1ヶ所亀裂が走っている。

・播鉢（12～14）

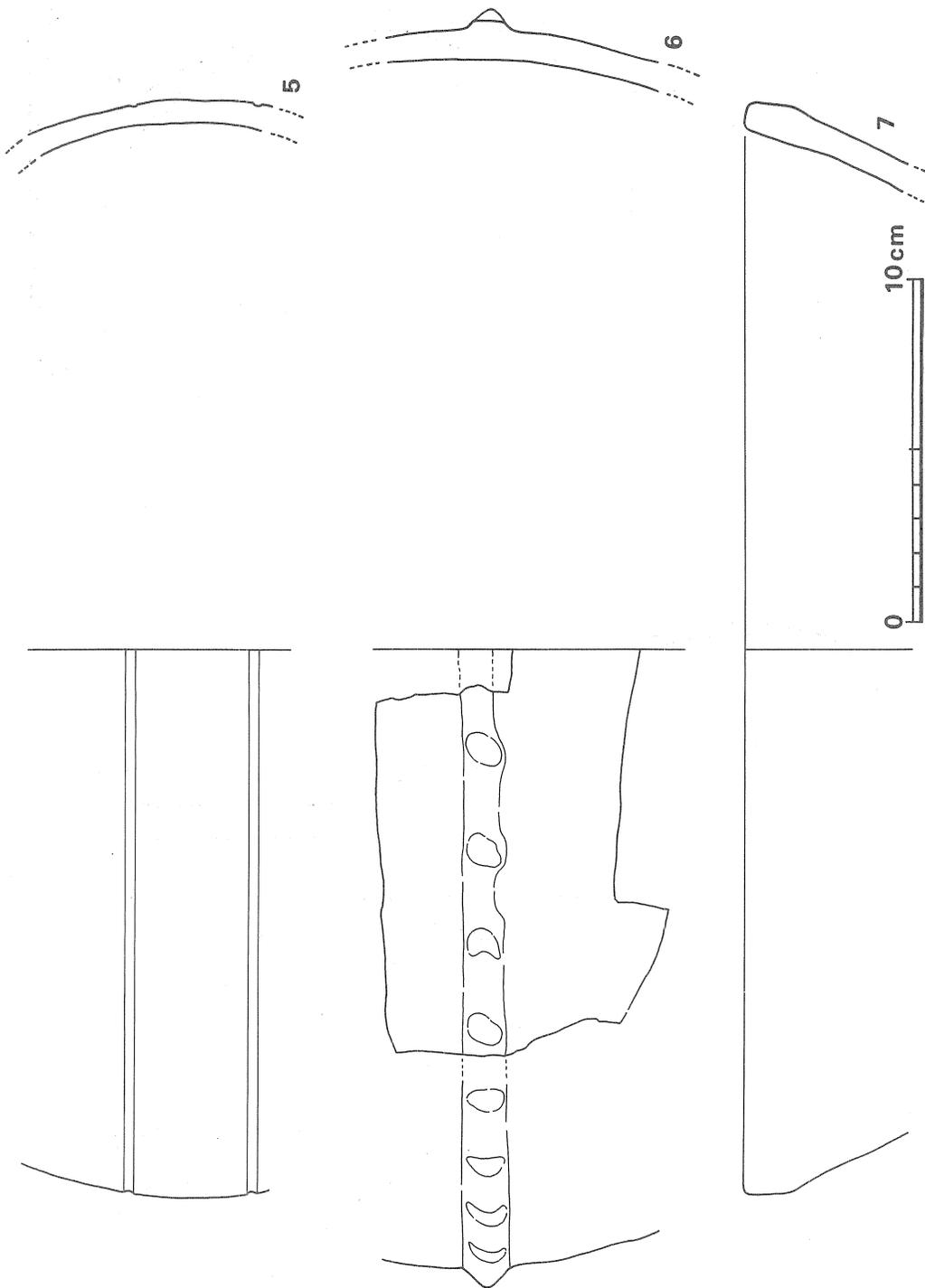
12は身の深い形態を示す。外面はタテの細い叩き又はハケを施し，のち上部はナデ消し，下半はヨコナデで消している。内面はヨコナデののち4条一単位のクシによって播鉢目を立てている。胎土は灰色を呈し，精良である。焼成良好。内面に灰被りが看取される。13も12と相似た形状を示すが，外面は叩き又はハケによって鋸歯的な文様効果(?)を出している。下端部はナデ消しを施す。内面は12より浅い4条一単位の播鉢目を立てている。14は復元口径300mm，器高151mm，底径162mmを測る。底部より直角に近く内湾しながら胴部が立ち上がり，T字状の口縁部を作出する。片口部は角張るように作出される。鉄分の多い胎土は緻密で精良であるが，いたる所に火ぶくれが認められる。内外面共にヨコナデ後，内面に4条一単位の播鉢目を施す。施釉は内面播鉢目上まで，外面体部上半までを浸し掛けしている。釉薬は灰釉を掛けており，焼成時破損のため部位によって異なるが，黄緑～緑茶～黒と窯変している。

・瓦（15～17）

すべて破片で出土し，約50点ほどを数える。その中で玉縁が付く丸瓦が主体で，平瓦は僅かである。破片の大きさは一定していないが，幅5～10cm前後で割れたものが多い。これらの破片は，その接合がなかなか難しく完形に復するものは一点もない。さて，これらの使用目的については，不明な点も多いが，窯場での二次的使用を考えた場合，窯壁と溶着した例があることや，床面から出土することを堪案すると，窯体の補修に使用したり，或いは製品を安定させかつ床面と離して焼造することを目的とした窯道具の両様の機能を持つ可能性が極めて高い。このことは，トチンやハマなどの窯道具が皆無或いは極めて少ないところからも肯けるようだ。15は粘土板巻きつけによって成形し，凸面は格子叩きの後ナデ及びヘラナデを施し，凹面には布目が残る。側端部はケズリ後ナデで仕上げる。現存長140mm，玉縁長33mmを測る。胎土は精良であり，酸化炎によって赤変している。16は粘土板を巻きつけて成形し，凸面は格子叩きの後，ナデ調整を施す。凹面は布目残り成形台から分割するための細い縄目が2ヶ所に残っている。側端部はケズリ後ナデ仕上げ。胎土は精良で，酸化炎のため赤変。現存長179mm，玉縁長36mmを測る。17は粘土板巻きつけによる成形と思われるもので，丸瓦先端部である。各々7～9cmの3つの破片が接合している。凸面は格子叩きを施すがナデ及びヘラナデにより殆んど消去されている。凹面は細かい布目圧痕が残り，細い縄目が認められる。側端部及び端面はケズリの後ナデ仕上げ。胎土は肌目細かく，酸化炎により赤変している。現存長257mm，柄部長48mmを測る。



第4図 ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第5図 ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)

・窯道具 (18)

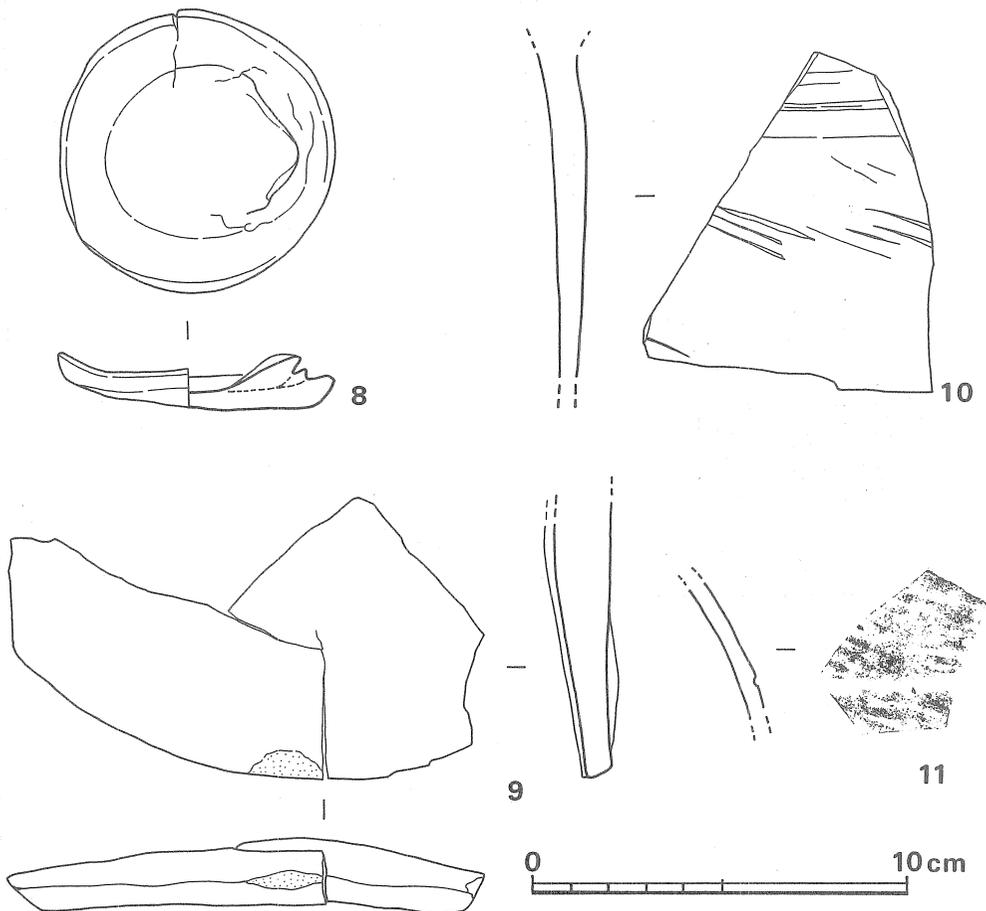
瓦と同様の胎土を使用して半円球状に作出したもので、上面は被熱により赤～茶色に変色し硬く縮っている。また内部や下面は酸化して明橙色を呈す。ハマと同様の機能をもつものと考えられる。

・その他の表採資料 (19～21)

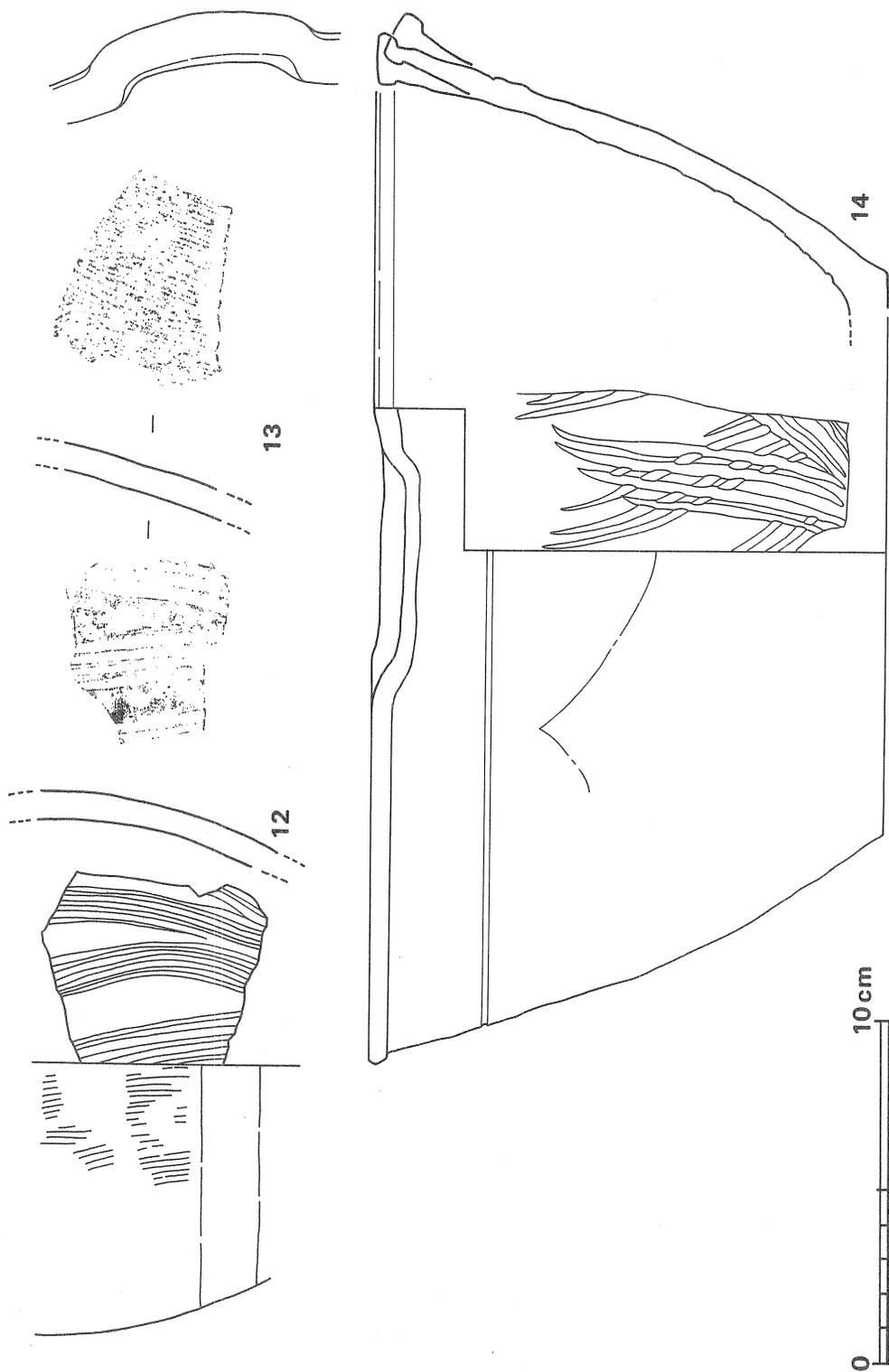
19は扁球形の小壺である。復元口径72mm, 最大径116mm, 器高80mm, 底径74mmを測る。非常に薄作りで碁笥底である。施釉は合わせ口部分と内面下半, 外面底部付近から見込み部を除いて掛けており, 黒色に窯変している。現川焼か。

20は輪花形の染付皿である。見込みに二重の界線を引き蛸唐草を描く。外面は繋ぎ唐草文。復元口径189mm, 器高30.5mm, 底径124mmを測る。18世紀の所産である。

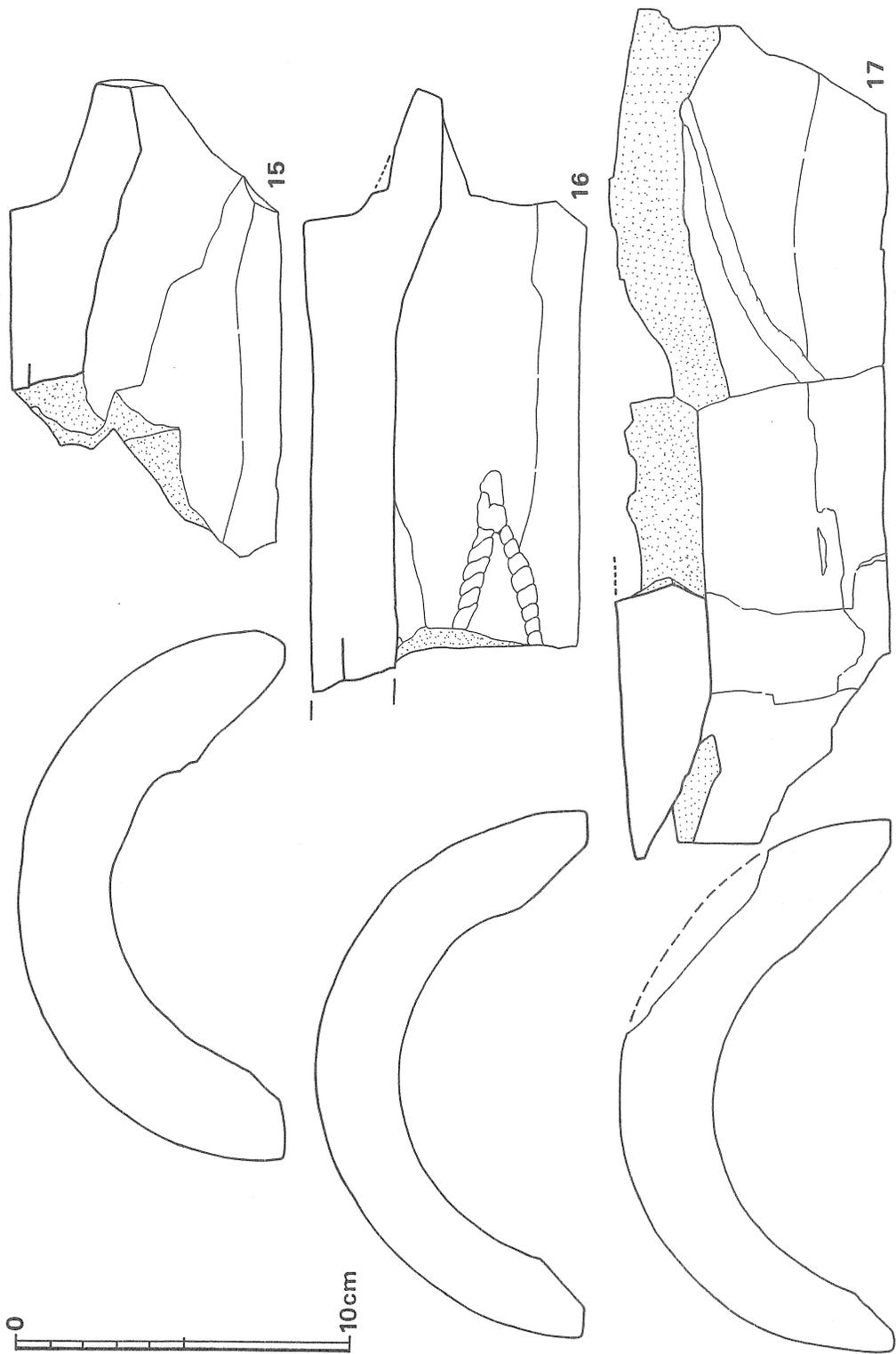
21は青磁で鉢形を呈す。黄緑色の釉薬が口唇部のみ掻き取り, 掛けられている。胎土は少しザラつきのあるもので, 焼成は良好である。体部はヘラによって稜がつくように削られている。復元口径344mmを測る。



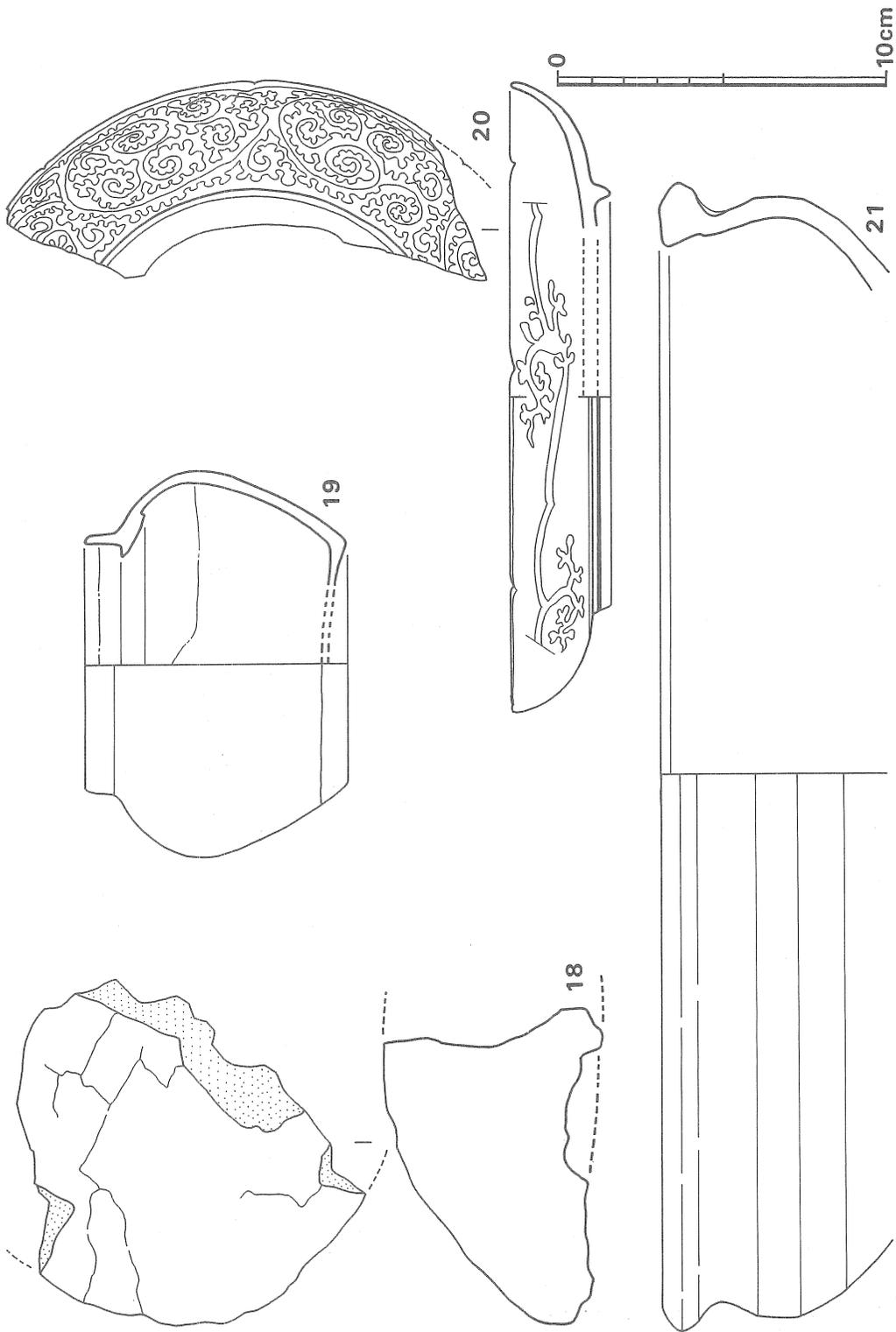
第6図 ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第7図 ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第8図 ハラタラ古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第9図 ハラタラ古窯跡出土遺物及び表採資料実測図 (1/2)

4. 小 結

ハラタラ古窯跡で検出・確認された遺構及び遺物の詳細については、前節において述べたので、ここではその纏めを行いたい。

遺構は窯体自体が急傾斜地に構築されているためその残存率が極めて悪く、かつ物原等の付属遺構に関しても残っていなかった。また同様に遺物の存在も僅少であった。

まず、遺構について

- 1 窯体が平均斜度26.5°の斜面に築かれている。
- 2 窯体は縦長の窯室が接続するものである。
- 3 窯室は温座が明確でなく、また焼成室床面が傾斜角を変えて登っている。
- 4 奥壁が明確な立ち上がりを有さない。
- 5 焼成室床面は川砂等を敷設するのではなく、地山面をそのまま利用したと考えられる。
- 6 築窯に際し、トンバイ等を利用せず、粘土を塗り込めて行っている。

等が挙げられる。また遺物に関して

- 7 日常雑器の中、皿・碗等通常多量に検出されるべき遺物の出土が見られない。これに対し壺類が多く焼造されている。
- 8 遺物の中に火ぶくれした資料が多く認められる。
- 9 窯道具と見られるものは第9図18の資料を除いて他になく、代用品として瓦類を使用したと考えられる。

以上が本窯跡について特記される点である。

さて、仮りに連房式登窯を急傾斜地に築くと、奥壁が高くかつ天井も高くなる。奥壁が高くなると温座の巢も高所に位置することとなり、炎の引きが強いため暖められた空気は窯室を回ることなく次室へ抜けると考えられる。つまり直炎式に近い状態となり、床面近くの器物の焼成が不良となる。これを解消するため奥壁を切り立たせることなく傾斜をつけて次室へ炎を送る必要があったのではないかと考えられる。このことが床面の傾斜角を変え、かつ奥壁を切り立たせない築窯の方法であったと推される。また、皿・碗類の出土が見られないのは、床面が急傾斜を保っているため多量焼成の窯詰めが不可能であったことによると推される。このことはトチン・ハマ・胎土目が看取されないことから首肯されよう。

以上を要約すると、本窯は壺類の焼成窯として敢て急傾斜地に築窯され、火の回りを良くし、引きを強くするため床面及び奥壁に傾斜をもたせたものと考えられる。

なお、その他の表採資料（19～21）は廃窯後に窯場が屋敷として開かれて近年までに及んだ折に使用されたものであり、窯の焼成品とは直接関係がない。

IV 中道古窯跡の調査

1. 調査の経過

中道古窯跡は、前章において述べたように、その発見年が昭和2年と古く、先年の道路開設の折や昭和32年の水害などに遺物の出土があり、よって広く周知され、盗・乱掘をかなりの程度蒙っていた。窯跡は主軸を南北にとっていることが僅かに看取される程度で、その規模は現状では判断し難かった。ただ、乱掘の跡が窯体の存在を示しているようであった。

以下、日誌を基に経過の概略を記す。

・ 8月6日～8月8日

雑木の一部伐採を行い、表土の剝除作業に入る。盗・乱掘の跡が小径の如くになっており、窯室であろうことを想像させる。表土の剝除から瓦礫層の除去を行うに従って1室目の火床境が現われる。これにより大方の窯の規模が判明する。砂床は長さ2m、幅1.2m、火床30cm位で、長方形のプランを呈している。従来の見聞からするとハラタラ古窯跡同様趣きを異にしている。焚口は右勝手となっており、閉塞石がそのまま残っている。

・ 8月9日～8月11日

本窯の脇に別の窯があつて二本並列していた、との伝えにより、西側に幅1mほどのトレンチを設定して調査するが当たらず。このトレンチに直行する南北の小トレンチを設定して、物原の確認を行う。このトレンチからは胎土目が多く出土する。又、物原と思われる部分から陶片や印刻文を持つ火舎片などが僅かに出土する。1～4室目の様相が大分明確になる。

・ 8月12日～9月5日

事務事業のため発掘調査を中断。

・ 9月6日～9月20日

1～4室及び煙道部の各種図面取りを行う。4室目に引掛かるようにして5室目の奥壁が現われる。3室目東側に側溝を確認するための小トレンチを設定。窯壁より約30cmほどに極浅の幅70cm程度の側溝を確認する。ハラタラ古窯跡よりレベル移動。

・ 9月21日～9月28日

窯体の清掃を行い、写真撮影をする。また地形測量を開始する。

・ 9月29日

島根大学の伊藤教授、時枝助教授、残留磁気測定を試料採取。

・ 10月17日

各窯室に土留めと崩壊防止の土のうを積んで埋め戻しを行う。

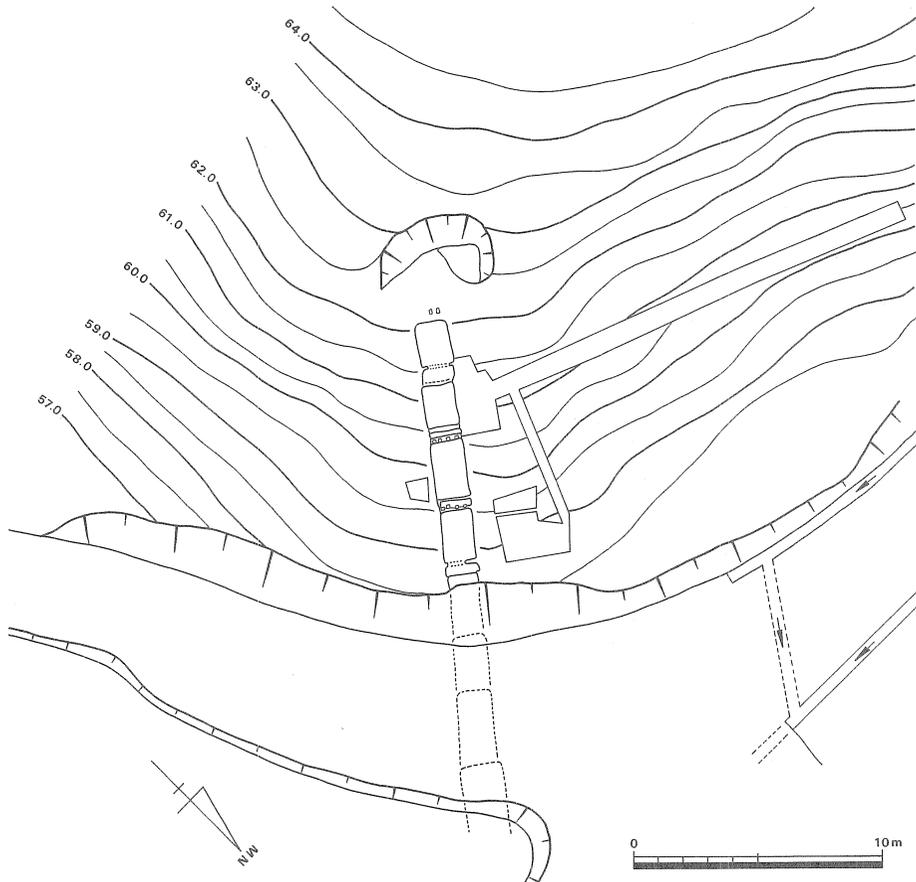
2. 遺構（別図第2，第10，第12図，図版7～15）

遺構は植林地内に立地しているが、植林が窯体を避けるようにしてあったことは誠に幸いであった。また、遺構内に入っても根張りによる攪乱が極めて少なかったことは遺構の保存上好ましい結果となった。

検出された遺構は、半地下式割竹型階段状連房式登窯で焼成室5室、煙道部、落ち込み、側溝、物原であり、各室の前面右側には薪を入れる焚口がある。焼成室は胴木間が破損しており不明なため、窯尻から順次窯室の番号を付している。

焼成室及び煙道部の現存長は主軸線上で11.4m、比高4.1mで、傾斜角 20° を測る。また落ち込み部まで含めると14.3m、比高5.1mとなる。

窯体は、第5室の大半及び胴木間迄の数室が破壊されている。第5室の奥壁付近の標高が約58m、煙道部で62m、落ち込み部で63mを測り、等高線に直交し、なだらかな地形に沿うように構築されている。窯体の主軸はN -37° -Eである。



第10図 中道古窯跡地形図 (1/300)

以下、各遺構ごとに説明を加える。

(1) 第5室

道路開設の折、窯室の大半は削られている。従来は、他室同様長方形プランを示していたと思われる。残存部分もその多くは地山が露出しており、壁面は僅かに看取されるにすぎない。奥壁右側に裏込めの石が確認され、また右側壁部にも同様の石が確認されている。検出されたのは奥壁部、側壁部と砂床の一部である。残存部は砂床で長さ13～35cm、右側壁高8cm、奥壁部で高さ25～29cmほどである。

(2) 第4室

長方形プランを示し、長さ、幅共に一定しており、窯室長246cm、幅123cmほどである。火床部分は破壊され、温座の巢も残存していない。焚口部分は未掘であるが、閉塞石の残存が認められる。また火床境は基底の部分が僅かに看取され、中央部分は残存していない。砂床は14°の勾配で登っており、床面は平らである。砂は赤変している。側壁は半分強残っており、塗りバケが看取される位しか溶けていない。また立ち上がりは内側にやや倒れ込むように延びて天井部を形成するものであろう。奥壁の残存は良好である。

(3) 第3室

窯室長217cmとこの窯の中で一番大きな室であり、最良の残り具合を見せている。温座の残りもよく、火床部分より高く構築し、幅13cm前後を測る。また、トンバイをタテに4個使って5か所の通焰孔としている。中、最右のものは半割されて第4室に倒れ掛けている。通焰孔の部分は良く焼けている。通焰孔の幅は左から21, 11, 14, 12, 27cmと側壁寄りが広がっており、火力の調整の工夫が見られる。火床部分は砂床より約17cm程下がっており、周縁は良く被熱している。この火床部分に閉塞石と思われる石材や、トチン・トンバイ片が何個か集積していた。また火床境に碗が溶着しているのが見られた。砂床の残りは良好で約13°の勾配で登り、床面は平らである。砂床の砂は細かく、赤変している。側壁は20cmほど残り、右側は急な角度で天井部を形成するらしい。また焚口上方の残りが良く（後に破損）第4室奥との関係で勘定すれば約50～60cm位の焚口の穴が火床右側に存在していたと思われる。奥壁も中央部とほぼ変わらない数値を示し、壁面には塗りバケが横位に明確に見て取れる。

(4) 第2室

窯室長238cmを測り、室幅も一定している。温座の巢は最右のトンバイを残し、他の3個は欠失している。よって4か所の通焰孔が存在している。この温座は火床底より4～9cmほど高く作られている。幅は14～20cmほどである。通焰孔の幅は左から19, 13, 12, 13, 19+ α cmと両側が広がる。火床は長さ25cm前後、幅130cmほどを測り、右勝手となっている。下面及び周辺の粘土は被熱により、よく焼けている。この焚口上方には20cmほどの自然石の角材を横に据えて使用しており、この短面が側壁となっている。この石材と第3室目の奥壁を勘案すれば約50～60cmの焚口の穴があったと考えられる。火床境は部分的に破損しているものの全体としては保存良好で

ある。砂床は約11°の勾配で登り、床面は上下差なく均一である。砂は細かく均一なものを使用しており、熱変で赤くなっている。側壁は粘土を塗り付け、ハケでヨコ方向に調整している。約20cmほどが残っており上部は崩壊している。奥壁は右半分から床面近くまで破壊されているが、ほぼ垂直に近く立ち上がって行く様子は観察される。

(5) 第1室

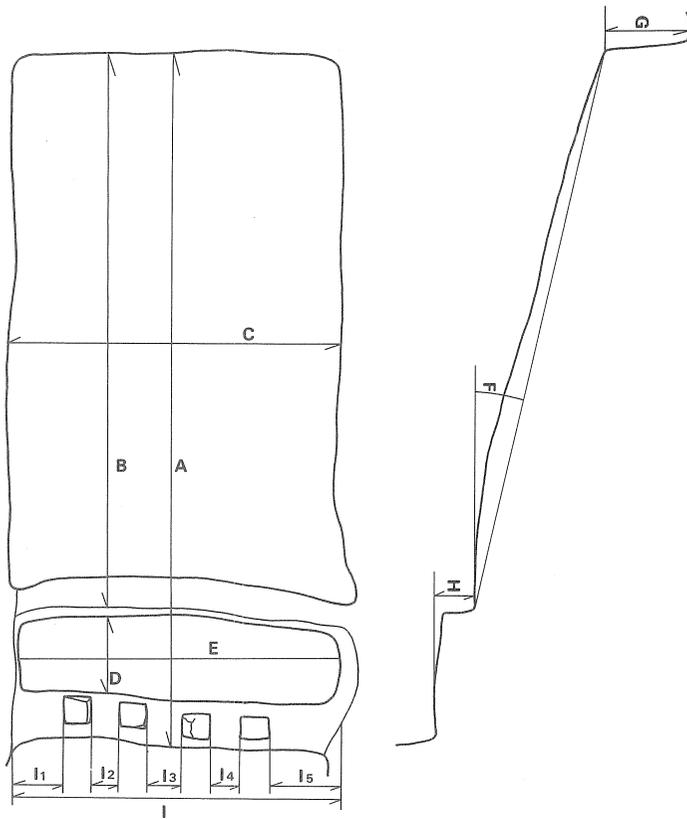
窯室長235cmと最短である。温座から火床境及び右側壁にかけて乱盗、植林によって攪乱されている。温座は全壊に近い状況であったが、幸いにも最左のトンバイの痕跡が僅かに残っていた。これによれば、通焰孔は22cmを測り、他室同様やや広い傾向を見せている。火床境は中央部が欠失し、左右に分かれて残っている。右の切断面を見ると側壁と同様の粘土を塗り付けており、この部分はよく被熱してセメントのように固化している。砂床も攪乱をかなりの程度受けているが他室同様、上下差なく均一にならしてある。勾配は8.5°と最も緩やかである。側壁は右側が根の営力によって内側へ押し出されている。奥壁は裏込めに石材を横位に使用しており、その表面に粘土を塗り付けて窯壁面としている。この横に据えた石材の上にトンバイをタテに立てて煙出しの通焰孔としている。奥壁の残存高45cmを測る。

(6) 煙出し

煙出しは第1室より立ち上がった奥壁が高さ約45cmの所から水平位になり狭小な室をなす。奥行き約50cm、幅62cmを測るが、復元すれば110cm前後となろう。この室の手前には現在1本のトンバイが僅かに残り、他の1本は抜かれている。左側が破壊されているが、本来はもう1本立っていたと推され、4か所の通焰孔が存在したと思われる。この通焰孔の下面及び後方の床面はドロドロに溶けており、火力の強さを物語っている。後方には1か所の石組みと、石材が2本立っている。石組みの部分は最下の石に側壁が覆うように載っており、窯尻はこの石材を包み込むように構築されたものと考えられる。その左側の2本の石材も原位置で残っていたもので窯尻を支え、かつ分焰する機能を果たしていたものと考えられる。この石組み及び2個の石材の中半位まで、つまり第1室奥壁から測ると約50cm位まで被熱で粘土が溶けて固化した範囲である。床面の勾配は最も急で18°を測る。その後方70cm位の所まで石材が散乱し、被熱で赤変した部分が認められた。

(7) 落ち込み

1室目奥壁から約3.2m程離れてC字状の地山を掘り込んだ部分がある。幅5m強と大きい。比高は1m前後あり、右手つまり西側には凹みを持っている。レベルでは西側の凹みの底が煙出しより下位にあり、また上端も若干下がる位置にある。東側は全体的に西側よりレベルが高くなっている。この状況から考えると雨水を溜め、西側へ流し出す機能を有していたようである。このことは、煙出し後方が全体的に盛り上がっている点からも考えられる。



- A 窯室平均長
- B 砂床平均長
- C 窯室平均幅
- D 火床平均長
- E 火床平均幅
- F 砂床の傾斜角
- G 奥壁残存高
- H 火床の深さ
- I 温座幅
- I₁ 左側壁と分焰柱までの通焰口の幅
- I₂ 通焰口の幅
- I₃ 〃
- I₄ 〃
- I₅ 〃

第11図 各室計測図

第2表 各室計測表 (単位: cm, m²)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I					砂床面積	
									I ₁	I ₂	I ₃	I ₄	I ₅		
第5室	34+α	34+α	112				25								
第4室	246	204	123	40	123+α	14°	29								2.509
第3室	271	211	133	32	130	13°	28	17	130					2.806	
									21	11	14	12	27		
第2室	238	184	122	25	130	11°	22	13	117+α					2.245	
									19	13	12	13	19+α		
第1室	235	163	125	34+α	112+α	8.5°	45	7+α	131+α					2.037	
									22						
煙出し	50		62+α			18°			85+α						
									20 18						
									57+α						
									13 15						

(8) 側溝

第3室東側に設定した小トレンチによって確認した。溝の西端は主軸より約90cm、東側壁より約25cm東にある。幅73cm、深さ10cm弱の浅い溝である。溝底は砂床面より約15cm上位にある。黄茶色の地山の土を掘っており、覆土は焼土小塊を混じえる淡茶色土である。

(9) 物原 (第12図)

第4室西側に設定したトレンチにより確認した。第12図は土層断面図である。地山が掘られその上に僅かに載っている程度である。3・4層共に焼土塊を含む程度であり、また遺物の量も多くない。小片化したものの多い中、完形に近い皿が重なって出土した。

第1室から第4室の東側から胎土目や陶器の小片の出土が見られたが、物原と呼ぶ土層の堆積も見られない。このような事から推すると、第3室東側以北にかけて物原が形成されたものと考えられる。以下、土層の説明を記す。

1層 表土

2層 黄茶色土で地山の再堆積土である。

3層 焼土混りの茶色土

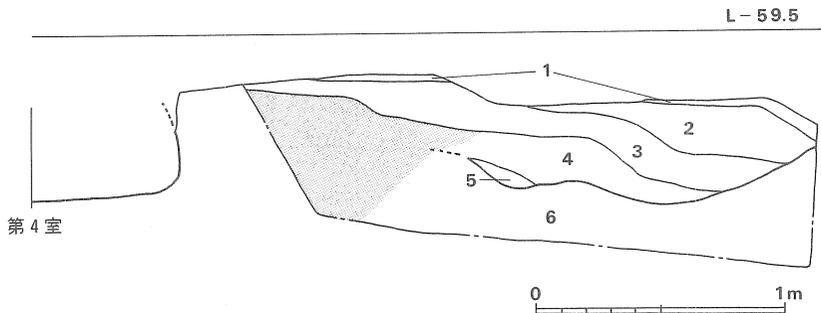
4層 焼土塊を僅かに含む黄色土で、下位の層が人為的な営力で再堆積したものと思われる。

この下面が往時の地表面と考えられる。

5層 焼土を僅かに含む暗黄茶色土

6層 黄茶色を呈する地山の層で、粘性に富んでいる。

また、アミ目の部分は焼成による間接的な熱変のためか、非常に硬く締っている。



第12図 物原土層断面図 (1/30)

3. 出土遺物（第13～21図，図版16～18）

本窯跡出土の遺物は量的には少なく、62点を図示した。器種は、皿、碗、片口、播鉢、火舎、不明陶器、窯道具などがある。壺、徳利などは検出されていないが、本来はセットをなすものと思われる。

・皿（1～24）

皿として分類したものは、その大きさにより小形品(I)、中形品(II)、大形品(III)に区別することができ、更に体部の作りや、口縁部の形状によって次のように分類可能である。

- a……体部に段を有していて明確に口縁部と区別されるもの。口縁部は内湾気味に外反させている。(1～4)
- b……体部の段が無くなり、内湾気味に延びた体部に外反する口縁部が付くもの。(5～13)
- c……やや身が深くなり、口縁部を内湾気味に外反させて内面に稜を有たせるようにしたものの。縁なぶりの皿もこの類に一応含めておく。(14～17)
- d……cと形状が似通っているが、口縁部の外反が見られないもの。(18)
- e……体部に内湾する口縁部が付くもの。(19)
- f……体部にほぼ垂直に近く立ち上がる口縁部が付くもの。(20)
- g……溝縁を有するもの。(22)
- h……内面に段を有し、上方から外反して平縁をなすもの。(24)

以上、a～hまで分類したが、本窯跡では物原による分層発掘が不可能であった。しかも、窯壁の焼け具合から長い操業とは考え難いことにより、セットをなすものと考えておきたい。

I-a（1～4）

1は素焼きのもので、水挽き痕が明確に残る。体部から反転してつまみ上げた口唇をもつ口縁部となるが境にはヘラによって明確な段がつけられている。ヘラによる削り出し高台で、高台内に兜巾が認められる。内面に胎土目跡4か所あり。2もほぼ相似た作りで、口唇部を僅かにつまみ上げるようにしている。内面に胎土目が残る重ね焼きの状況を示している。三日月高台である。3は器壁やや厚く、ヘラによって2段をつけている。4もやや厚いもので高台部を欠損している。

I-b（5～13）

5～7は器壁がやや厚く、口唇部を丸くおさめる傾向にある。11～13は非常に薄く引き上げられている。口縁部がやや上位に移るという特徴をもつ。

I-c（14～17）

底部を除くと、薄くやや深く挽き上げられた一群である。口縁部は上位に位置し、外面を丸くしている。16は指頭により縁なぶりを作出している。3～4か所つくものか。17は削り出し高台であるが、高台内のケズリが薄く、一見碁笥底のような観を呈している。

I-d (18)

18は口唇部の下で薄くなっている。底部を欠損。

I-e (19)

19は平縁形態を示しており、釉薬も厚く掛っている。

I-f (20)

立縁の皿で口縁内面にかすかな稜をもっている。底部は欠損。

II (21・23)

21は中形の皿であるが、口造りの形状は不明である。また、23も中形の皿であり、胎土目を用いて重ね焼きをしている。共に口縁部の形状は不明である。

II-g (22)

中形の皿で、底部から挽き上げられた体部に鋭く外反する口縁部が付いて溝縁をなしている。端部はつまみ上げるようにして口唇は面をなす。底部は欠損。

III-h (24)

大形品で焼け歪みが大きい。底部はヘラによる削り出しで実に鋭く仕上げている。体部の途中でヘラによって段を設け見込みとするが、その上方から外反して口縁部をなしている。

・碗

碗は全容を呈するものが極めて少なく、資料的に貧弱である。口縁部の作りは、天目形をなすもの(I)、単純に丸くおさめるもの(III)、その中間の形態を示すもので口唇からやや下方で外側に張り出して稜がつくもの(II)がある。高台は有高台と無高台があり、有高台には竹節形、撥形がある。釉薬は灰釉を掛けており、緑色～緑茶色に発色している。

I類 (25・26・33)

25は直線的に立ち上がる形態を示し、口唇下1cmの所で稜をなして垂直に立ち上がり尖り気味におさめる。復元口径150mmと大振りのものである。内外面に細かい石ハゼが看取される。26は、非常に薄く挽き上げられており稜の上位は25と同様のおさめ方をしている。33は大きく焼け歪んでいるが、口縁の作りが26と同様でありこの類に含めた。ロクロ目が明瞭である。高台は撥形をなし高く強く踏ん張っている。直置とみられ、高台部に砂床の砂が付着している。釉薬は淡緑色に発色している。

II類 (27～29・32)

27は復元口径106mmの小碗というべきもので、ロクロ目が明瞭であり、外面に凹凸が顕著に認められる。28も作行きは27と相似ている。釉薬は茶色から僅かに黒茶色を示し、所々に緑茶色が斑状に入る。削り出し高台で竹節状をなし、高台内に低い兜巾を認める。畳付にモミ殻付着。底部には砂床の砂が付着。また内面には窯壁片が付着している。29は高温のため焼け歪みが大きい。よって口径、器高は不明である。底部はヘラによって鋭く削られ、高台内の挟りも深い。畳付に糸切り痕がかすかに残る。釉調は28に似る。32もほぼ相似た特徴を有し、釉薬は黄緑色

に鮮やかに発色している。細かい貫入を認める。

Ⅲ類 (30・31・34)

30は猪口とも言うべきもので、口径88mmを測る。底部は糸切りで無高台はこの1点のみである。体部は中位で屈曲しており、尖がり気味におさめる。ロクロ目が明瞭で、凹みに釉が溜り緑～緑茶に発色している。31は内湾気味に立ち上がって丸くおさめている。34は若干焼け歪んでいる。全体的に厚く挽き上げている。口径に対しやや高台径が大きい。もう少し外方に傾くものと思われる。削り出し高台で竹節状をなす。

・高台 (35～40)

35～38は竹節状に削り出されており、35・36は強く踏ん張っている。36は高台内が三日月形に削り込まれる。40も僅かに竹節状をなすもので、厚くて大きい。高台内は深く挟り込まれており、29を一回り大きくしたものである。

・片口 (41～44)

43は注口部分で手捏ねによって作出。41・42・44は口縁部から胴部にかけての資料で各々異なる形態を示している。41は器壁が分厚く、如意形の口縁をなす。42は薄く挽き上げた体部に少しづつめて折り込んだ口縁を付しており、中空となっている。44は釉葉を生掛けした資料と見られるが、全く発色していないため不明である。口縁下5cmの所で最大径193mmを測り、内傾して外反する口縁をなす。いずれも水挽きで、胴下半から底部を欠損しているため高台の有無は判らない。44は壺か。

・紅皿 (45)

手捏ねで、8稜をなす。稜部は指頭で軽くつまんでいる。径約45mm、器高13mmを測る小形のものである。鉄分の多い胎土を使い、全体に浸み出て茶色を呈す。灰釉を掛けたと思われるが釉が飛び散って斑になっている。

・播鉢 (46～48)

各々口縁部の作りに差異が認められる。46は復元口径230mmを測るもので、口縁下に段を有している。播鉢目は8条一単位のクシで粗につける。片口部不明。47は復元口径246mmを測り体部下半は欠損。体部から直線的に立ち上がる口縁部を有し、一方に片口を付ける。7条一単位の荒い播鉢目を全体につけている。48は片口部を欠失している。皿Ⅰ-a類と相似た形状の口縁部を作っている。8条一単位のクシによって播鉢目を粗につける。底部は碁笥底となる。内面底部付近に重ね焼きの痕跡が残っている。

・火舎 (50～52)

瓦質で、50は復元口径272mmを測る。底部を欠失しており脚が付くものか不明。体部は内湾気味に延びて口縁部を内側に折り込む。口縁下2cmに断面カマボコ形の貼付突帯を一条巡し、上位に菊花と蝶様のスタンプを押す。外面僅かに叩き痕かミガキ痕が認められ、同様の痕跡は内側にも残る。のちササラ状のものでナデで両面とも消去する。酸化炎で一部赤変した個所も見

受けられる。また焼成時破損しており、断面に釉が載っている。51は50・52に相似た破片で底面と思われる部分に木の葉の痕跡を残す。52は脚部の資料であるが50とは接合しない。脚部外面、内面、底部内面はササラ状工具によるナデ仕上げ、底面はハケ調整。脚端部に条線が認められ焼成時の圧痕である。この耳様の脚が3～4個付いて脚台をなすものである。脚台の復元径は208mmを測る。また脚の高さは38mmを測る。

・壺 (57)

復元口径320mmを測る大形品である。器壁は分厚く口縁部は単純に外反している。同類の破片が十数片存在するが接合しない。無施釉の焼締陶器で自然釉が掛っている。焼成時に破損しており、断面に自然釉が載っている。また体部上半に叩きは認められず、不規則なナデが残っている。

・器種不明なもの (49・54・56)

共に生焼けでもろい。49は復元口径304mmと大形である。直立気味の胴部に内面稜をなして外傾する口縁部が付く。内面にはハケ状工具による横位の条線が付けられている。56も49と相似た形態をなすが条線の無いのが異なる。復元口径382mmを測る。54は円筒形の台状をなすもので器壁厚く無施釉。底径134mmを測る。

・窯道具 (53・55・58～63)

53は内湾気味に外反する摺鉢と思われる口縁部片である。内外面にはクシ様のもので調整している。内面にはモミ殻が円形に付着（アミ部分）している。また54も瓦片かと思われるもので、凹面と凸面を有している。厚さは10mm強と薄い。左側面と前面及び凹・凸面はナデ調整。この凹面にもモミ殻の付着（アミ部分）が看取されている。両資料共、ハマと同様の機能を有していたものと考えられる。58は長さ280mm、幅80～95mmを測る四角柱でトンバイである。正面はトンバイの上に粘土を塗り付け上下にハケで調整する。温座の分焰柱に使用されたものである。59・60はトチンで円柱に上下に円盤を付けたような恰好をしている。59は手捏ねによっており柱状部に指の跡が残る。上面にはモミ殻の付着が認められる。60は下部を欠損しており、上盤径119mmと大形品である。全体的に高温のため亀裂が走る。また上面にはモミ殻が顕著に付着している。61・62はハマで、トチンと同粘土を使用して円盤状に作ったものである。上面にはモミ殻の付着が多く認められ、62の上面には陶器の高台片が溶着している。今回の調査では破片で5個体分位しか出土していない。63は胎土目である。大形のもは摺鉢等の重ね焼きに、小形のもは皿類の重ね焼きの際に使用するもので、ほぼ同巧である。約210個ほど出土している。

第3表 出土遺物一覽表

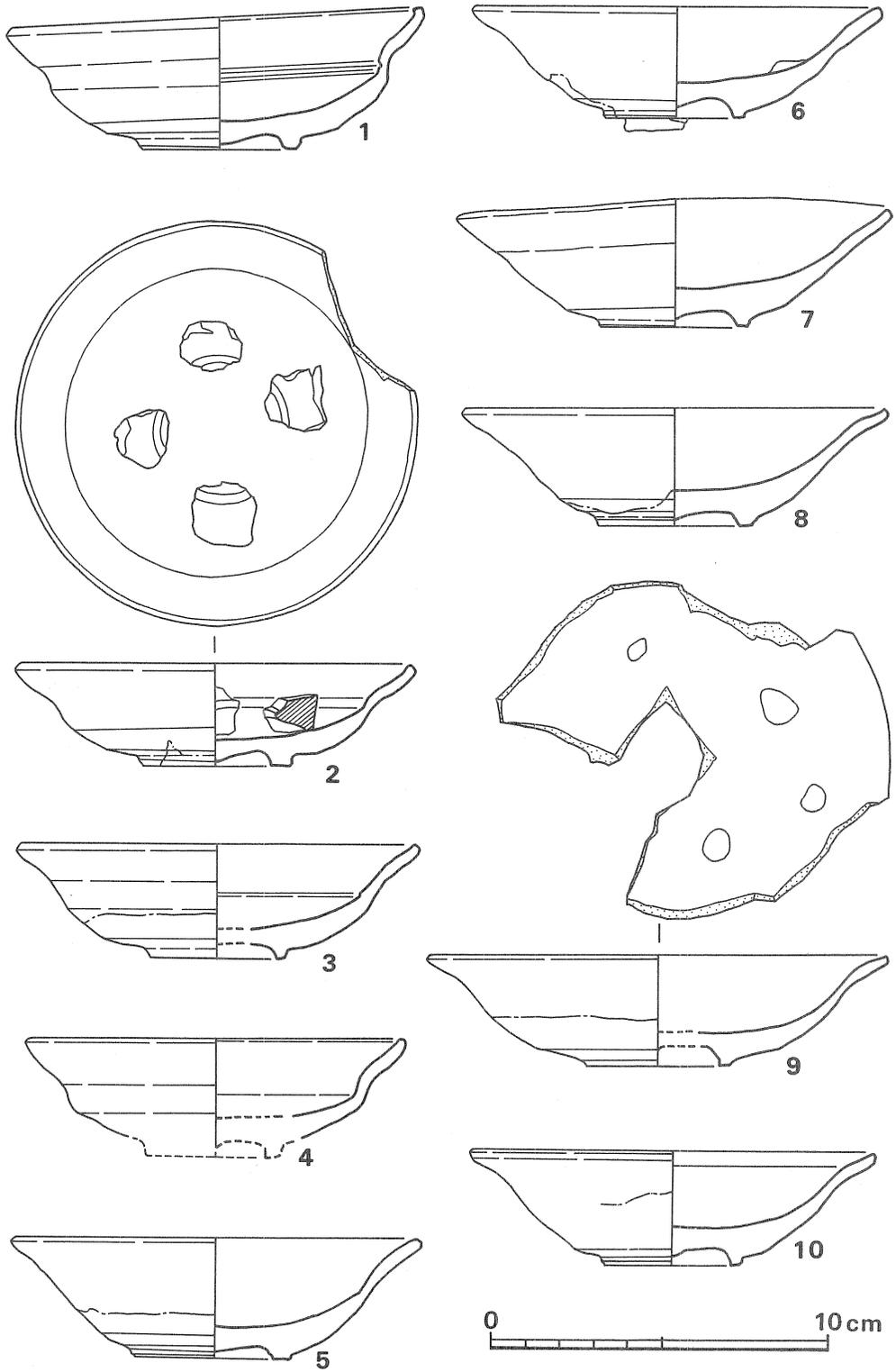
番号	器種・分類	法量 (mm)	口径 器高 台径	特 徴	色調・釉薬	ク ロ 回 転 方 向	挿 図 ・ 図 版 番 号
1	Ⅲ I-a	124 39 47		削り出し高台で兜巾あり。底部は2回のヘラケズリで高台作出。明確な段をもって口縁部に移る。口唇はつまみ上げて、立縁様をなす。内面にかすかな目跡4ヶ所あり。	淡赤色を呈し施釉の有無不明	反時計回り	13-1 16
2	Ⅲ I-a	118 30 44		水挽き成形。底部は2回のヘラケズリで高台作出。高台内に兜巾あり。高台内の削りで三日月形を呈す。内面に4個の胎土目を残す。貫入は細かい。	全体的に発色不良。黄白色。灰釉	反時計回り	13-2 16
3	Ⅲ I-a	118 34 40		水挽き成形で、2回のヘラケズリで高台作出。高台内に兜巾あり。内面ヘラによって段をつける。目跡1ヶ所残る。	全体的に発色不良。黄白色。灰釉	反時計回り	13-3
4	Ⅲ I-a	112 — —		水挽き成形で、器壁が厚い。底部から直立する段をなして口縁部へと続く。体部内面に明確な段を有している。釉薬一部風化している。	淡緑色 灰釉		13-4
5	Ⅲ I-b	121 35 47		分厚い底部から段をなさず口縁部へ移る。2回のヘラケズリで高台作出し、高台内に兜巾あり。釉は一部高台際まで流れている。	発色不良で黄白色。灰釉	反時計回り	13-5 16
6	Ⅲ I-b	121 32.5 41		全体的に分厚い器壁を見せ2回のヘラケズリで高台を作出している。体部外面に水挽きによって稜をなす。高台内は深く抉り、兜巾あり。内面に目跡3ヶ所あり、高台に胎土目が付着。	発色不良で黄白色。灰釉	反時計回り	13-6 16
7	Ⅲ I-b	120~128 38 42		水挽き成形で、1回のヘラケズリで高台作出。高台内は深く抉り込み兜巾あり。6とよく似通う。焼け歪みあり。胎土は緻密である。内面は灰被りの状態、また砂の付着も顕著である。目跡3ヶ所あり。	外面一部淡緑色に発色。他は黄白色。灰釉	反時計回り	13-7 16
8	Ⅲ I-b	126 35 46		内湾気味の体部に外反する口縁が付き、口唇はつまみ気味におさめる。2回のヘラケズリで高台を作出している。釉薬は高台際まで流れている。内面に目跡2ヶ所あり。	底部付近は黄白色、他は淡緑色。灰釉	反時計回り	13-8
9	Ⅲ I-b	136 32.5 46		内湾気味に延びる体部に、屈折点でやや薄くなってふくらむような口縁部が付く。1回のヘラケズリで高台作出。高台内の抉りも深い。内面に胎土目4ヶ所が残る。	淡緑色を呈すが一部発色不良な所もある。灰釉	反時計回り	13-9 16
10	Ⅲ I-b	120 33.5 40		内湾気味の体部にほぼ同一の厚さでゆるく外反する口縁部が付く。口縁部は僅かに内面が凹むようにしている。2回のヘラケズリで高台を作出し、高台内は深く抉り兜巾がある。内面に2ヶ所残る。	釉が全くおけず黄白色を呈す。灰釉	反時計回り	13-10
11	Ⅲ I-b	120 37 41		底部から内湾気味に延びる体部に、さほど外反しない口縁部がつく。1回のヘラケズリで高台を作出。高台内の抉りも浅い。内面に目跡が4ヶ所残る。	緑色 灰釉	時計回り	14-11
12	Ⅲ I-b	116 33 41		内湾気味の体部に、少し間延びたような感じの口縁部が付く。手際よく水挽きされたものである。1回のヘラケズリで底部を作出し、高台内は鋭く抉り兜巾を見せる。	釉が全くおけず黄白色を呈す。灰釉	反時計回り	14-12
13	Ⅲ I-b	118 34 42		内湾気味の体部に、なめらかにやや内湾する口縁部が付く。高台内の抉りは深く兜巾がある。	釉が全くおけず黄灰色を呈す。灰釉	反時計回り	14-13
14	Ⅲ I-c	120 — —		身が深くなるもので、体部から非常に薄く水挽きして口縁部となる。口縁部は外側を凹ませて、内湾気味に外反させている。内面に稜が付く。貫入は細かい。2回以上のヘラケズリで高台を作出するものと思われる。	緑色に発色。 灰釉	時計回り	14-14
15	Ⅲ I-c	130 37 42		やや厚めの体部に外反する口縁部が付く。口縁下はユビでかなり薄く挽き、口縁外面を彫らせ気味に作出している。1回のヘラケズリで高台を作出する。内面に目跡2ヶ所あり。	釉が全くおけず黄灰色を呈す。灰釉	反時計回り	14-15
16	Ⅲ I-c	122 — —		内湾する体部にやや直立気味の口縁部が付く。口縁部の屈曲点では内面に稜を残す。この口縁を指頭で3回内側へ折り込んで縁なぶり部を作る。	黄緑~緑色 灰釉		14-16
17	Ⅲ I-c	126 42 46		やや厚目の体部に直立気味に口縁部が付く。が、僅かに外反させている。口唇部は尖がり気味におさめる。1回のヘラケズリで高台を作出し、高台内は浅く三日月形に抉っている。僅かに兜巾があり。内面に目跡4ヶ所残す。	釉が全くおけず黄白色を呈す。灰釉	時計回り	14-17 16
18	Ⅲ I-d	136 — —		非常に薄手の作りで一氣に口縁部まで水挽きしている。口縁下外面は内側に凹ませて、碗Ⅱ類に近い作りをなす。傾き具合からⅢI-dとした。	緑色 灰釉		14-18
19	Ⅲ I-e	124 — —		浅い皿形をなすもので、ほぼ均一の器壁をもち口唇は丸くおさめる。	緑茶色 灰釉		14-19
20	Ⅲ I-f	118 — —		底部が欠失する。直線的に斜め外方に延びる体部に直立する口縁部が付く。口縁部はやや内湾気味にしており、口唇は尖がり気味におさめる。ヘラケズリの様子から有高台と思われる。	釉がとけず黄白色を呈す。灰釉	反時計回り	14-20
21	Ⅲ II	— — 46		口縁部が欠失する。分厚い体部をなすが、口縁部に近づくに従って急に薄くなる。内湾する体部に外反する口縁部が付くようである。2回のヘラケズリで高台を作出する。I類に比してややザラつきの多い胎土を使っている。	緑茶色 灰釉	反時計回り	14-21

第4表 出土遺物一覧表

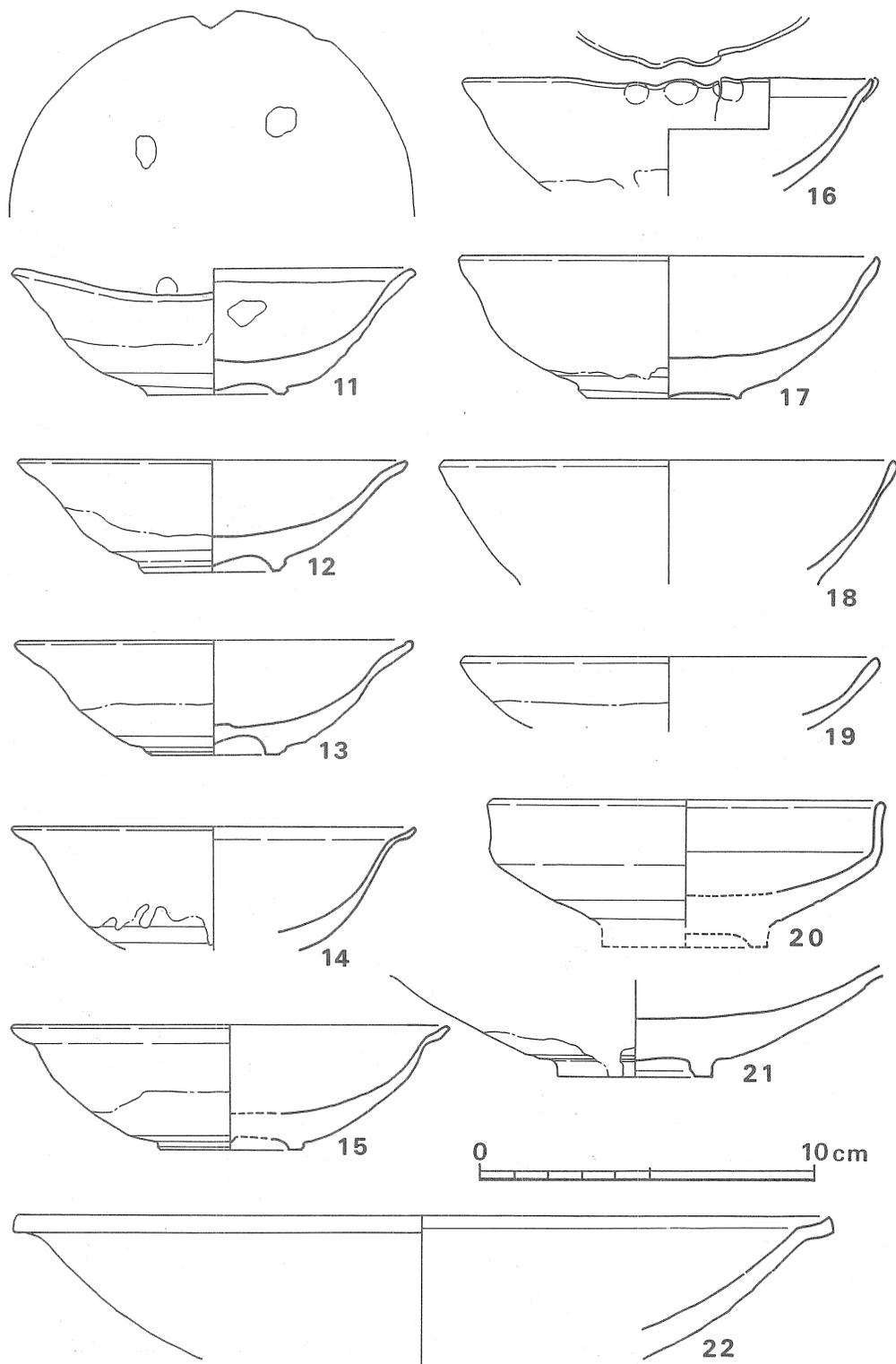
番号	器種・分類	法量 (mm)	口径 器高 台径	特 徴	色調・釉薬	口 口 回 回 転 転 方 方 向 向	挿図・図版 番 番 号 号
22	皿 II-g	240 — —	— — —	内湾気味に斜め上方に延びる体部に、溝縁の口縁部が付く。口唇部は上方につまみ上げている。	緑色 灰釉		14-22
23	皿 II	— — 56	— — —	重ね積み状態の資料で4~5個の胎土目を残す。高台内に兜巾あり。	緑色 灰釉	時計回り	15-23
24	皿 III-h	330 — 108	— — —	焼け歪みが大きい。内湾気味に外上方へ延びる体部に外反する口縁部が付く。内面口縁下に段を有し見込みとするが、口縁の折り返しはその上方で行う。削り出し竹節形の高台で高台内の挟りも鋭く、直線的な畳付となる。	黄緑~灰緑色 灰釉	反時計回 り	15-24 16
25	碗 I	150 — —	— — —	天目形をなすもので、斜め外上方に直線的に延びる体部に直立気味の口縁部が付く。口縁下の外面には明確な稜を有し、中凹みにして尖り気味におさめる口作りである。細かな石ハゼが多く認められる。	緑茶色 灰釉		16-25
26	碗 I	134 — —	— — —	25のように明確な外稜を持つ資料ではないが、作行きは似通う。極薄に挽き上げられた体部に凹凸の顕著な口縁部が付く。	緑色 灰釉		16-26
27	碗 II	106 — —	— — —	薄く立ち上がる体部は凹凸を見せ、口唇部は尖り気味におさめる。	緑色		16-27
28	碗 II	— — 48	— — —	焼け歪みが多く、破損している。底部から挽き上がる体部に断面長三角形の口縁部が付く。口唇は尖り気味におさめる。2回のヘラケズリで高台作出。高台内兜巾あり。砂床直置で砂が付着。また畳付けにモミ敷付着。内面に窯壁片付着。	茶色 灰釉	反時計回 り	16-28 16
29	碗 II	— — 47	— — —	やや高い高台にすんなりと延びる体部が付く。焼成時の破損が大きい。口縁部は肥厚させて長三角形に作り、口唇は尖り気味におさめる。高台の外側は3回のヘラケズリで整えるが凹凸を見せる。畳付に糸切り痕が残る。	濃緑色 灰釉	反時計回 り	16-29 16
30	碗 III	88 48 41	— — —	底部から直線的に外上方へ延びる体部は、中程で外面に稜をなして立ち上がり口唇は尖り気味におさめる。底部は糸切り離して葎筒底をなしている。底部に火ぶくれが認められる。	緑色 灰釉	時計回り	16-30 17
31	碗 III	120 — —	— — —	ほぼ均一の器壁で体部より口縁部まで挽き上げる。口唇は尖り気味におさめる。	淡緑色 灰釉		16-31
32	碗 II	130 — —	— — —	底部から薄く外上方へ延びる体部に、やや肥厚して直立する口縁部が付く。口唇部が明瞭に残る。	淡緑色 灰釉		16-32
33	碗 I	— — 56	— — —	焼成時破損。撥形をなす高台からすんなりと延びる体部が付く。口縁部は僅かに外稜をもって立ち上がる様子を見せる。高台は18mmと高い。高台に砂付着。	緑色 灰釉	反時計回 り	16-33 16
34	碗 III	117 81 54	— — —	若干焼け歪みがあり口径・器高不確定。体部は内湾気味に鋭く立ち上がり、口唇は丸くおさめる。外面に砂が付着。2回のヘラケズリで高台作出。竹節状をなし鋭い。	緑~灰緑色 灰釉	反時計回 り	16-34
35	高台	— — 48	— — —	碗の高台で底部より延びる体部はかなり薄く挽き上げられる。1回のヘラケズリで高台作出。高台は竹節状をなし鋭く削られている。高台内は三日月形に挟る。火ぶくれがあり畳付に砂の付着が認められる。	緑色 灰釉		17-35 17
36	高台	— — 50	— — —	碗の高台である。口縁部の形状不明。2回のヘラケズリで高台作出。竹節状をなし、内面の挟りは浅く兜巾あり、また三日月形をなす。	黄灰~緑色 灰釉	反時計回 り	17-36
37	高台	— — 46	— — —	小振りの碗の高台である。分厚い底部から強く立ち上がる様子を見せる。2回のヘラケズリで高台作出。高台内は丸く挟る。内面に窯壁片付着。また畳付及び高台内にモミ敷付着。	緑色 灰釉	反時計回 り	17-37
38	高台	— — 44	— — —	碗の高台である。体部は分厚く、口縁の形状不明。削り出し高台で竹節状をなす。高台内の挟りは浅い。兜巾を見せる。	暗緑~黒 灰釉		17-38
39	高台	— — 46	— — —	碗の高台で底部からほぼ均一の器壁で立ち上がるが、口縁部の形状不明。削り出し高台で内に兜巾がある。高台内の挟りは三日月形をなす。	緑色 灰釉	時計回り	17-39
40	高台	— — 58	— — —	碗の高台で分厚く大きい。高台作出はヘラケズリによって行い、のち外面コナデを行う。畳付に糸切り痕残る。	見込み濃緑色。 灰釉	反時計回 り	17-40
41	片口	152 — —	— — —	如意形の口縁部をなすもので器壁分厚く重量感がある。口縁下5cmの所で最大径をとる。内外面に細かい石ハゼが認められる。釉薬は内面及び外面胴下半に掛ける。	緑色 灰釉		17-41
42	片口	166 — —	— — —	底部欠失している。体部から薄く挽き上げて折り返しの口縁をなす。口縁部は中空となる。外面と内面口縁下まで施釉。	緑色 灰釉		17-42

第5表 出土遺物一覧表

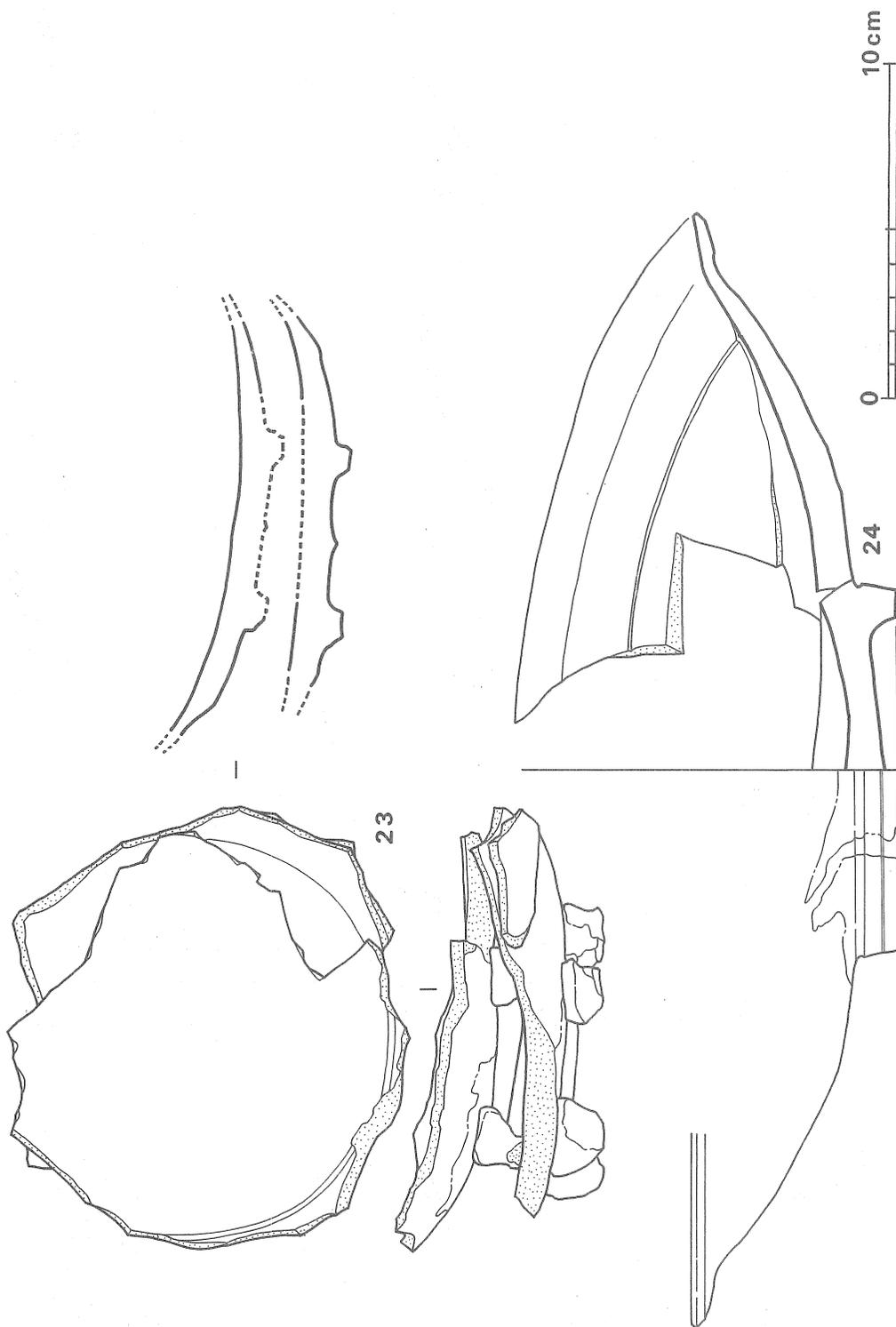
番号	器種・分類	法量 (mm)	口径 高台径	特 徴	色調・釉薬	ロクロ 回転方向	挿図・図版 番 号
43	片口部	— — —	— — —	片口の口部片で手捏ねである。長さ35mm、幅50mmほどを測る。全面に施釉。	緑色 灰釉		17-43
44	片口	169 — —	— — —	扁球形の体部をなす類であろう。体部はほぼ均一に挽き上げられ、口縁部は薄く外反させる。内面に水挽きの際のヘラ痕が残る。口縁下5cmで最大径190mmを測る。あるいは壺か。	発色せず黄灰色。 灰釉		17-44
45	紅皿	45 13 —	— — —	手捏ねで八稜形に成形。指頭によってつまんでいる。指頭痕が明瞭に残る。内面施釉と思われるが、多く弾かれている。鉄分の多い胎土を使っているため外面に沁みている。	緑色 灰釉		17-45 17
46	擂鉢	230 — —	— — —	水挽き成形で体部から一度外反させ口縁部と区別させている。口縁部は直線的に外上方へ延び、口唇は内側へ僅かに突出させる。8条一単位のクシで粗に擂鉢目をつける。施釉は内外面共口縁部付近のみ。	緑色 灰釉		18-46
47	擂鉢	246 — —	— — —	水挽き成形で、体部から外稜を有しながら内湾気味に立ち上がる。片口部は僅かに外反させる。7条一単位の荒いクシで全面に擂鉢目をつける。施釉は内面口縁部、外面体部中位まで。	灰緑～緑 灰釉		18-47 17
48	擂鉢	276 118 100	— — —	水挽き成形で内湾気味に立上る体部に、内湾気味に外反する口縁部が付く。口唇は内上方につまみ上げ、端面を形成。8条一単位の擂鉢目を粗につける。高台は碁首底で高台内は2回に扶る。内面に重ね痕あり。施釉は内面口縁部、外面体部中位まで。	緑色 灰釉	反時計回 り	18-48 17
49	不明	304 — —	— — —	生焼けの資料で水挽き成形である。直線的に立ち上がる体部に外傾する口縁部が付く。内面口縁下にハケによって横位に条線を入れる。	淡赤色	時計回り	18-49
50	火舎	272 — —	— — —	瓦質の火舎である。底部は欠失している。外上方に延びる体部に内側へ折り返す口縁部が付く。外面口縁下には断面コマボコ形の貼付突起を一条巡らし、上位に菊花、蝶様の文様をスタンプする。内外面に左上がりの叩き？痕が認められる。内外面共ササラ状のナデ。	茶褐～黄赤色		19-50 18
51	火舎片 ?	— — —	— — —	小破片で胎土・焼成は50に似る。外面に木の葉のスタンプが認められる。内面は50同様不規則なササラによるナデ仕上げ	赤茶色		19-51
52	火舎脚 台	— 脚高38 208	— — —	瓦質の脚台部である。耳状に成形し、調整は底部下面がハケによる他はすべてササラ状のナデ仕上げ。脚端に7本の線条痕認められる。	茶褐色		19-52 18
53	窯道具	— — —	— — —	瓦質の擂鉢口縁片かと思われる。口唇部は平坦におさめ、内外面下位はクシ状のもので調整。内面はハケで擂鉢目を斜位につける。外面はクシ状の文様をナデ消す。内面に円形状にモミ殻が付着。このことからハマのような置き台の機能を持つのであろう。	灰黒色		19-53 18
54	不明	— — 134	— — —	素焼きのもので、円筒状をなすものか。外面下端ヘラケズリ、上位ヨコナデ、内面ヘラケズリのまま。焼成時の窯道具か。	灰褐色	反時計回 り	19-54
55	窯道具	— — —	— — —	瓦質で瓦様のものか。凹面と凸面を有し凸面の状態からすると成形台を使って成形したものと見られる。凹面にモミ殻の付着が認められ53同様の機能を持つものであろう。	灰黒色		19-55 18
56	不明	382 — —	— — —	生焼けで赤黄色を呈し、脆弱である。49と口縁部の形状が似通う。内外面共にヨコナデ仕上げ。水挽き成形である。	赤黄色		20-56 18
57	壺	320	—	大形の壺で肉厚の頸部から、短く鋭く外反する口縁部が付く。口縁部内外面ヨコナデ、外面下位は不規則なナデ仕上げ。内面不明。自然釉付着。	茶～灰茶色		20-57
58	トンバ イ	長さ280 幅80～95	—	断面方形をなす。胎土目と同様の胎土を使っている。温座の分焰柱のみに使用する。一面は窯構築の折粘土を塗り付け上下方向にハケ調整した痕が見られる。他の3面はナデ仕上げ。	茶色及び赤色		20-58 18
59	トチン	高さ93 上盤径75 下カ73 柱径43	—	小形のトチンで左方に僅かに傾く。手捏ねによって作出されユビ痕が残る。下盤に砂床の砂、上盤にモミ殻付着する。	茶色		21-59 18
60	トチン	上盤径119 柱径68	—	最大形のトチンで下半分欠失する。柱部はユビ成形。鉄分の多い胎土で全体に茶色の滑沢あり。上面にモミ殻多量に付着。	茶色		21-60 18
61	ハマ	直径136 厚27	—	上下面の径が異なる。約半分を欠失するが、おおよその形態はわかる。被熱のため亀裂が生じる。上面にモミ殻及びワラ様の付着が認められる。下面は酸化炭により赤変。	茶黒～赤色		21-61
62	ハマ	復元径90 厚29	—	やや小形のハマで61と同巧である。上面には滑沢があり、モミ殻の付着も看取される。また高台が溶着している。	赤茶色		21-62
63	胎土目	上面径43 高さ43 底面径13	—	手捏ねであり、上面には高台のスタンプを残す。	赤色		21-63



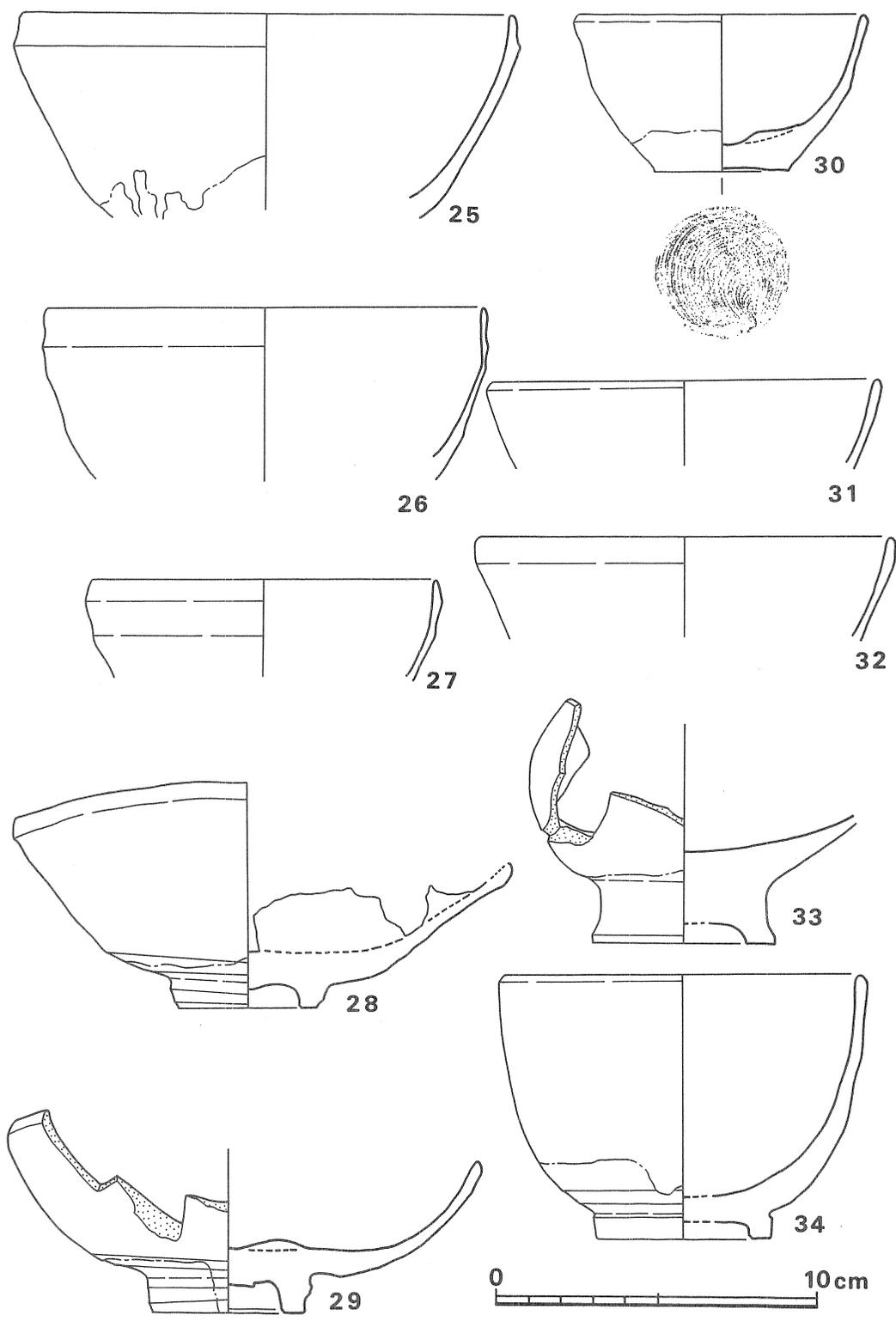
第13図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



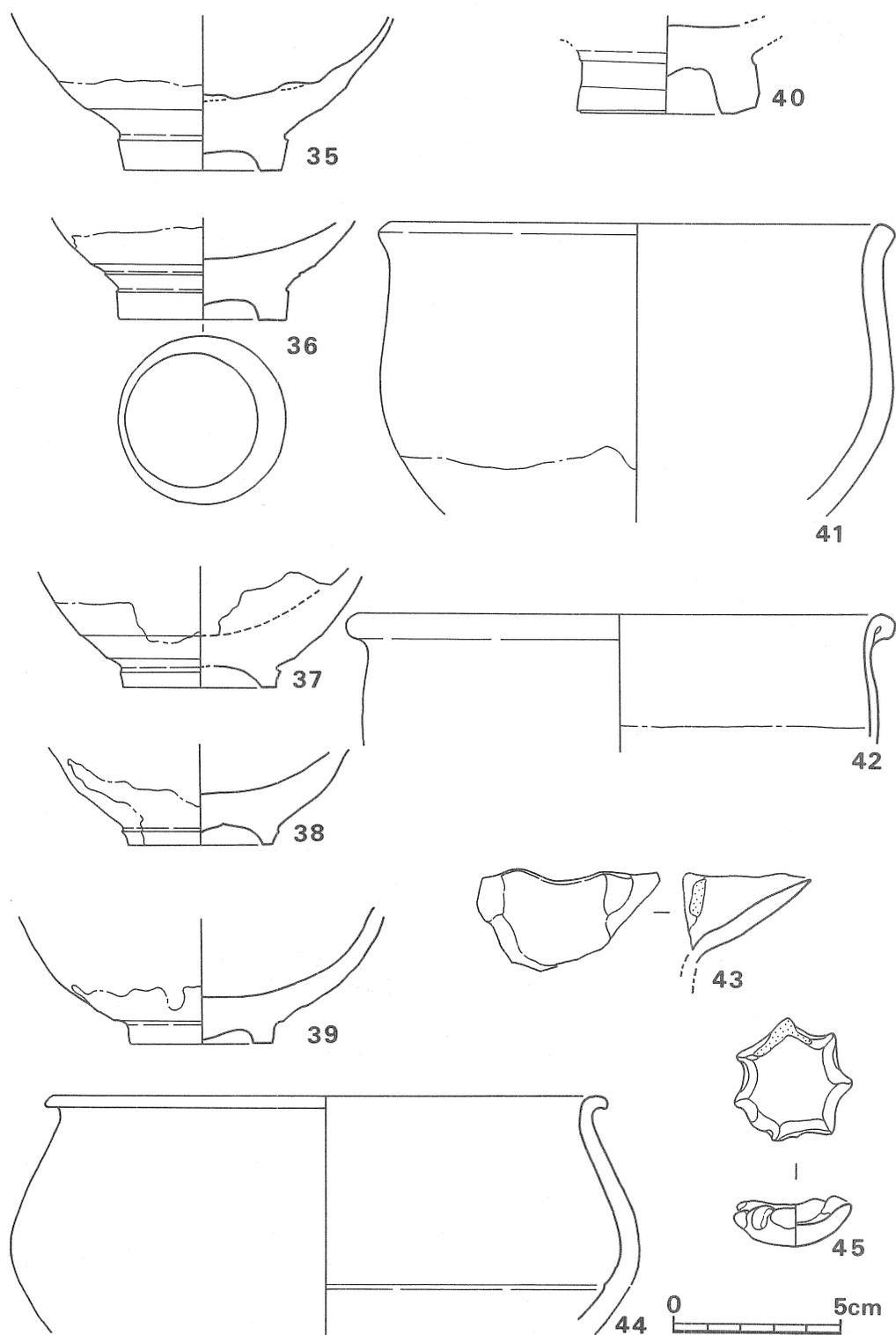
第14図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



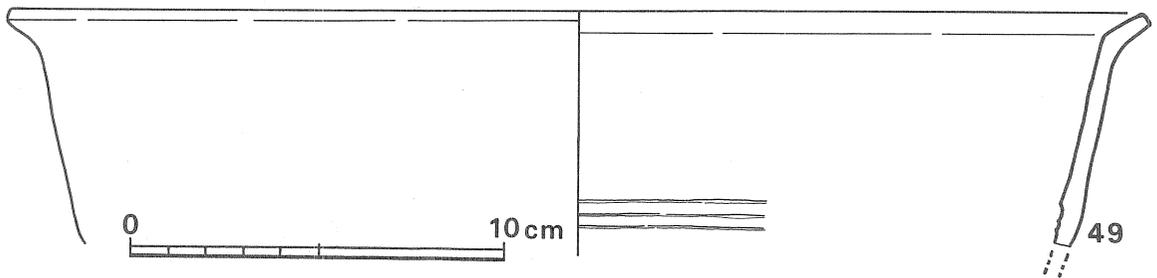
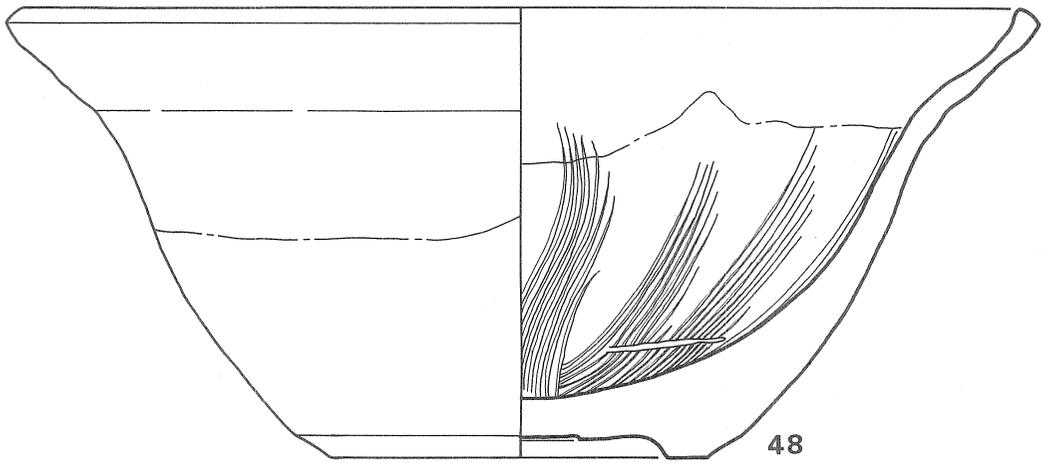
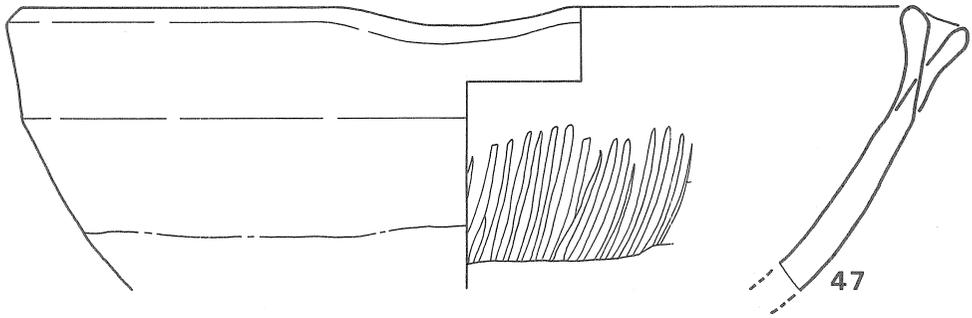
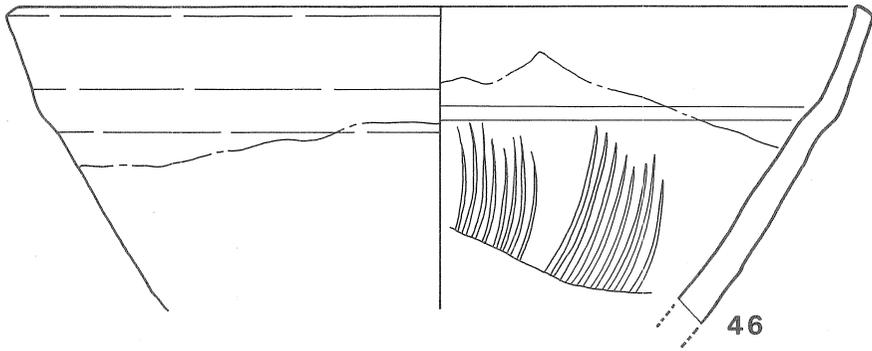
第15図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



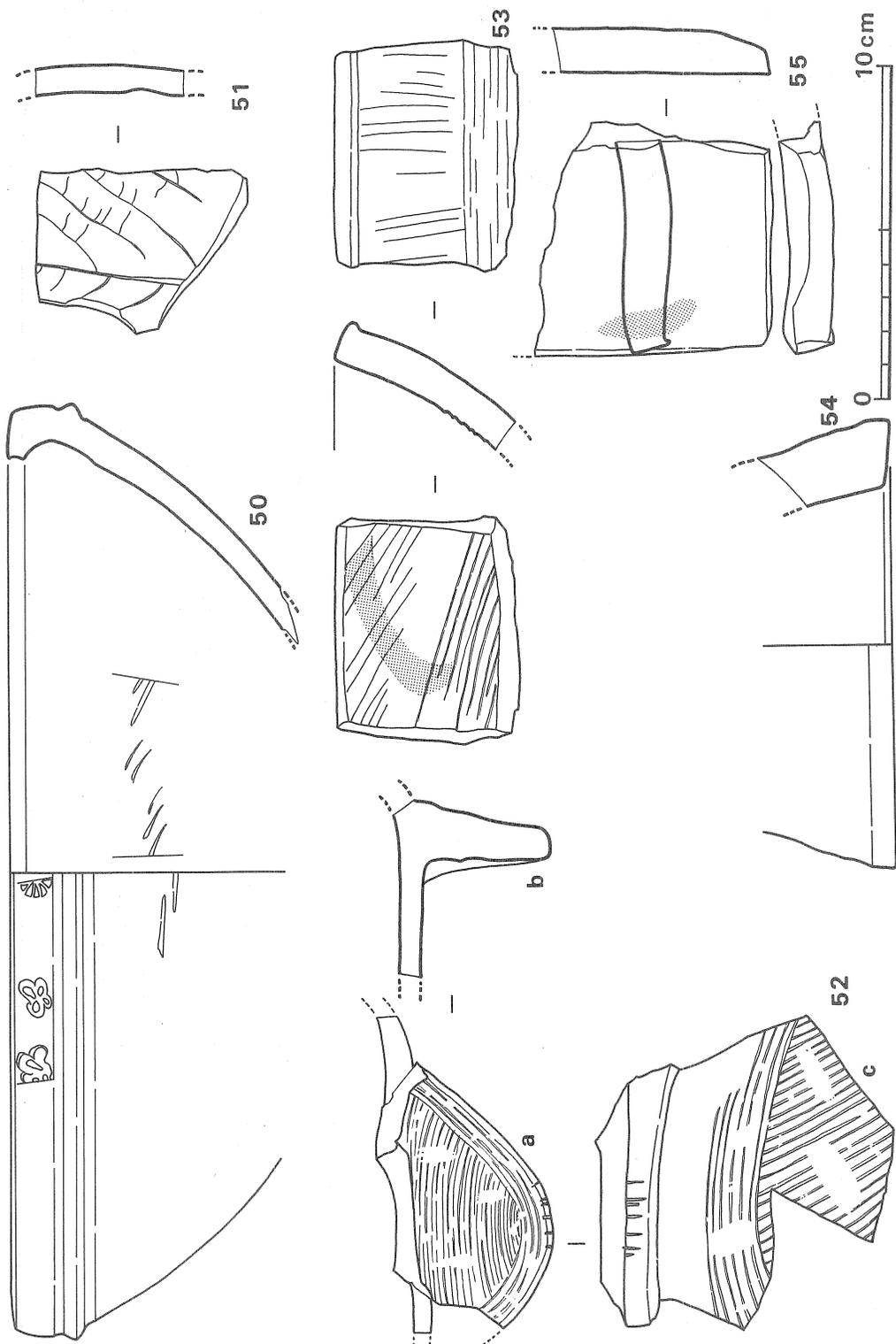
第16图 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



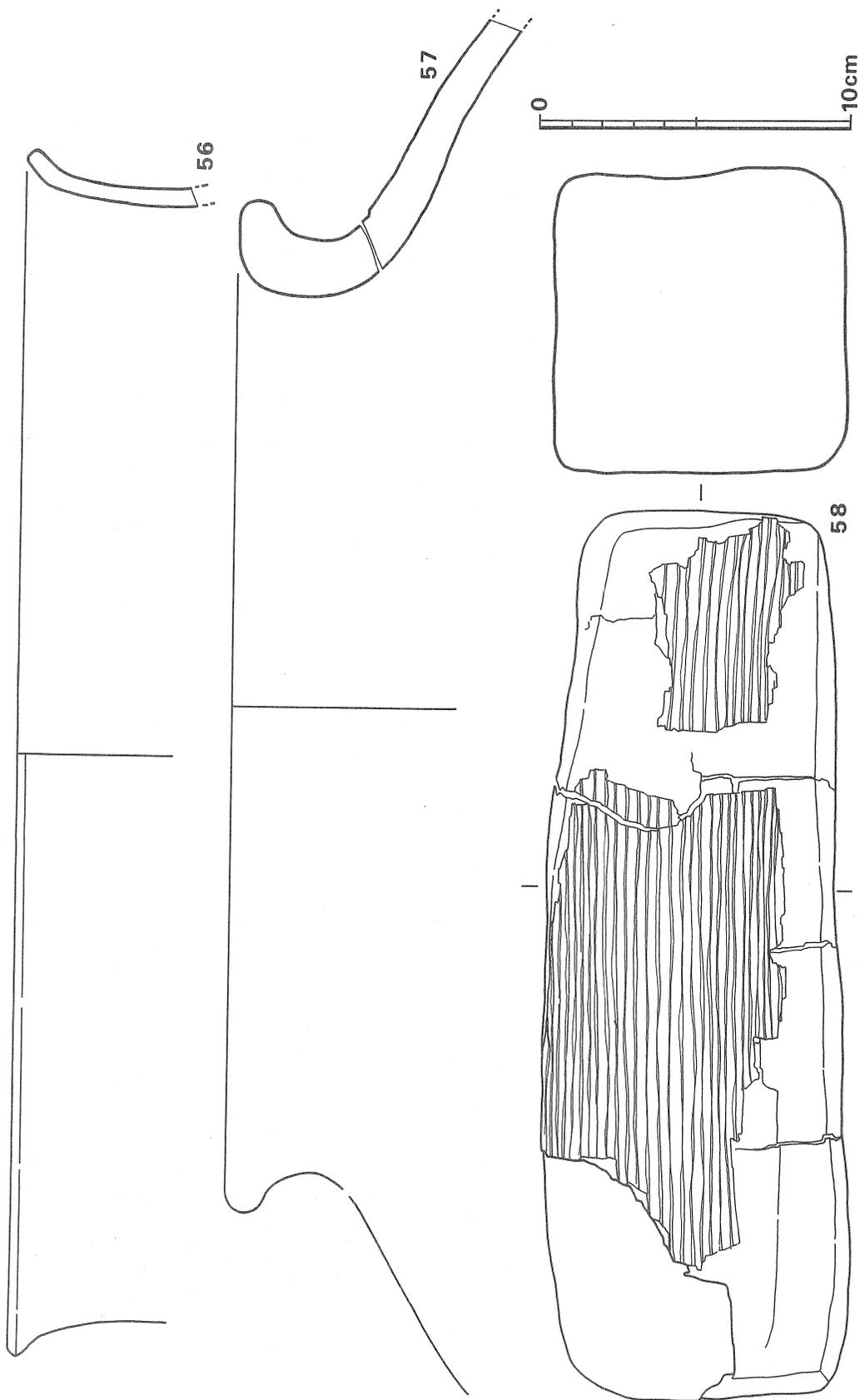
第17图 中道古寨跡出土遺物実測図 (1/2)



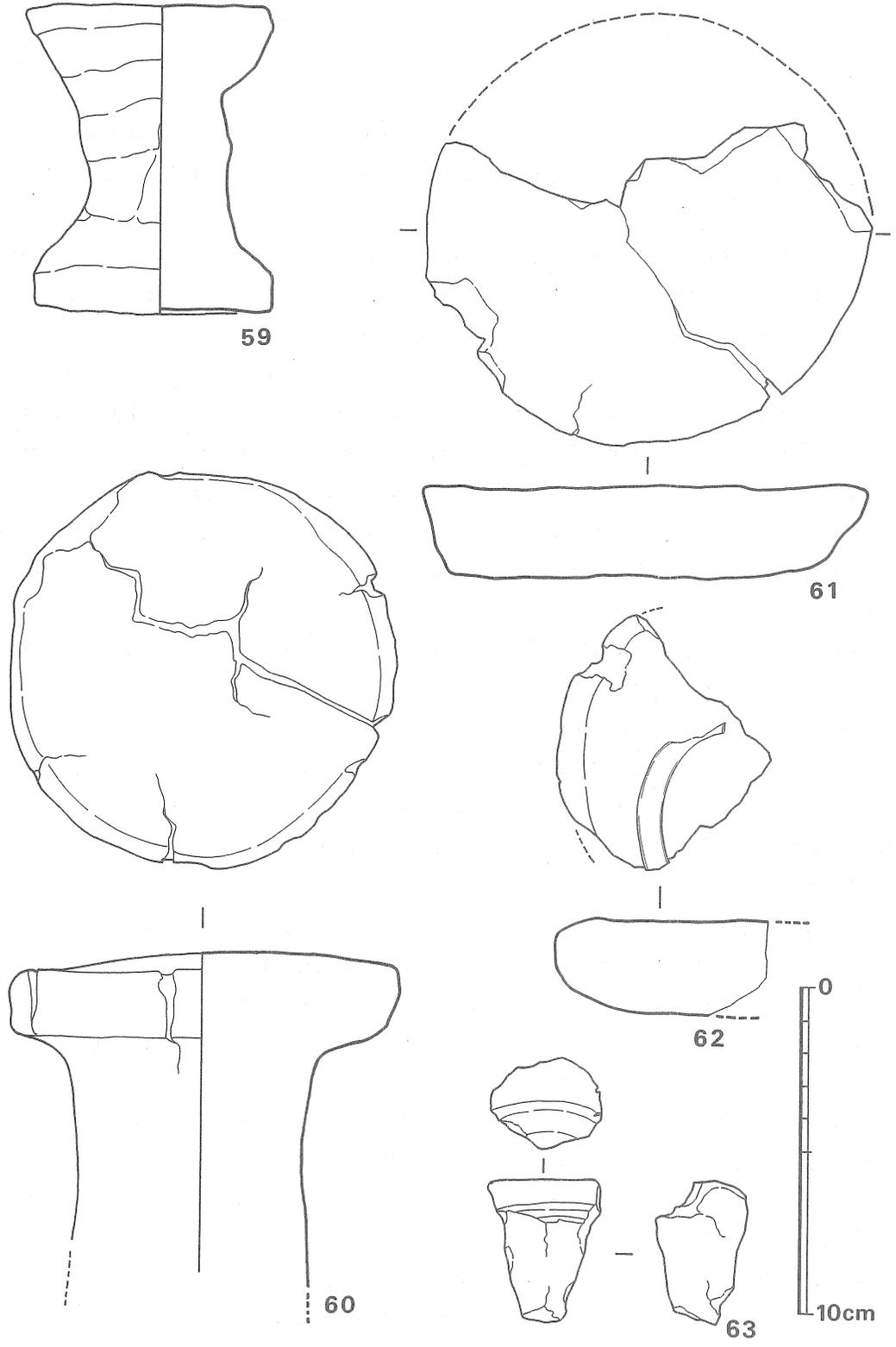
第18図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第19图 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第20図 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)



第21图 中道古窯跡出土遺物実測図 (1/2)

4. 小 結

本古窯跡は前節において述べたように、その出土品等からいわゆる日常雑器を焼造する窯である。また、窯体についても前章に挙げたハラタラ古窯跡と異なり、半地下式の階段状連房式登窯である。

窯体は縦長の窯室を接続させており、従来管見において知る限り類似は多くない。窯体自体は小規模であるが、側溝、落ち込み部(煙出し外施設)、火床、砂床、温座の巢、焚口と全てを備える。窯室が小規模であることにより、温座の幅は狭く、狭間穴も5か所見られるのみである。この狭間穴(通焰孔)は火の回り具合を良くするため、両端を広く、中央を狭くしてあり、技術的側面が十分に窺われる。築窯に際しては、分焰柱のみにトンバイを使用し、他は粘土を塗り込めて作る。窯壁を築く際は、部分的に石材を裏込めとして使っている外は、地山を掘り込んだ面に粘土を貼付している。天井部は崩壊しているため不分明であるが、竹を組んで粘土を塗り込めてカマボコ形に築いたと推される。天井内部の高さは、煙出し及び第1室の状況から高く80~90cm程度と推量される。また焚口部は高さ不明であるが間口50~60cmと考えられる。

遺物については、物原が第3室脇より下位に拡がっており、その多くが道路によって破壊されている。そのため、遺物量は少なかった。

皿・碗・播鉢などの日常雑器の出土が、数量的に少ない遺物の中でも主体を占めている。皿類は大・中・小と認められ、また種類も形態的に8分類が可能でバリエーションに富んでいる。また碗も3分類が可能で、I類とした天目形碗が特記される。高台の作行きは不明であるが、形態的に葎の本古窯跡3号窯の天目形茶碗より、口縁部の作りが未発達段階のものであり先行するタイプと言えよう。

本古窯跡出土遺物には大別して2つの粘土が使用されている。一つは小皿類に多用される肌目細かで緻密な粘土、他は砂質気味の粘土で胎土中に微小な黒色鉱物を含み、ケズリによって縮緬じわが看取されるものである。窯跡近隣より採取したと考えられ、鉄分に富んでいる。無施釉部分は茶色の滑沢を呈している。また釉薬は灰釉のみで淡緑~茶色に発色している。この器面への彩絵の技法は取り入れられていない。

窯道具は築窯材としてトンバイ、窯詰め材としてトチン・ハマ・胎土目がある。その他ハマの代用品と見られる資料も存在する。窯詰めには碗等にはトチン・ハマを使ったと見られ、モミ殻を併用する。小・中皿、播鉢は胎土目積みしている。碗は重ね焼きすることなく焼造し、中には砂床直置の資料も見受けられる。

なお、出土遺物のうち50~55は物原を中心に出土したものであるが、本古窯跡で焼造されたものかどうか、今後類例の増加をまって更に検討する必要がある。

V 土師野尾古窯跡の残留磁気測定

伊藤晴明 (島根大学理学部)
時枝克安 (")

はじめに

地磁気は時代とともにその方向と強さを変化してきている。これが地磁気永年変化である。しかし、同じ時代であっても地磁気は場所により異なった方向を示す。方向は偏角(D)と伏角(I)で表わされる。

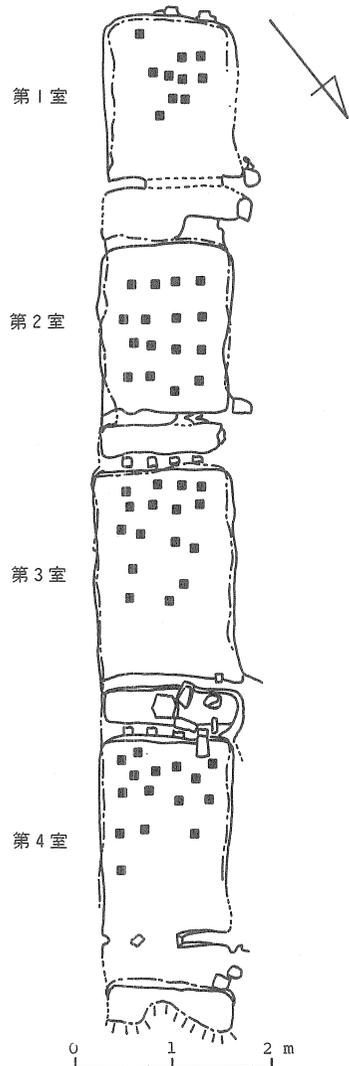
他方、粘土中には磁石になる強磁性鉱物(主にMagnetite)が数パーセント程度含まれていることが多い。Magnetite粒子は粘土が焼かれ、キュリー温度(578°C)以上に熱せられると磁性を失うが、キュリー温度以下に冷却するとその時の地磁気の方に磁化して再び磁石となり、地磁気の方角をしっかりと記憶することになる。このようにして焼土に固着された熱残留磁気は再度キュリー温度以上に加熱されない限り、その方向を頑固に保持し続ける。考古地磁気法はこのようにして焼土に固着された熱残留磁気方向を測定し、焼土が焼かれた時の地磁気の方角を求め、焼成年代を推定する方法である。

試料採取

土師野尾古窯跡(32°49'N, 130°02'E)は諫早市土師野尾町にあり、中道古窯跡とハラタラ古窯跡の2基が発掘・調査されている。考古地磁気試料は昭和59年9月29日小雨の中で採取した。

中道古窯跡は勾配が10°~12°の山の斜面に構築されており、第1室、第2室、第3室、第4室の床面がきれいに発掘されていた。試料は第1室の床面で10個、第2室で16個、第3室で16個、第4室で15個、総計で57個採集した。

ハラタラ古窯跡は第1室、第2室、第3室及び煙出し部分が不完全ながらも残存していた。この窯跡の床面の勾配は急で平均して25°位であった。しかも床面はもろく



第22図 中道古窯跡試料採取場所

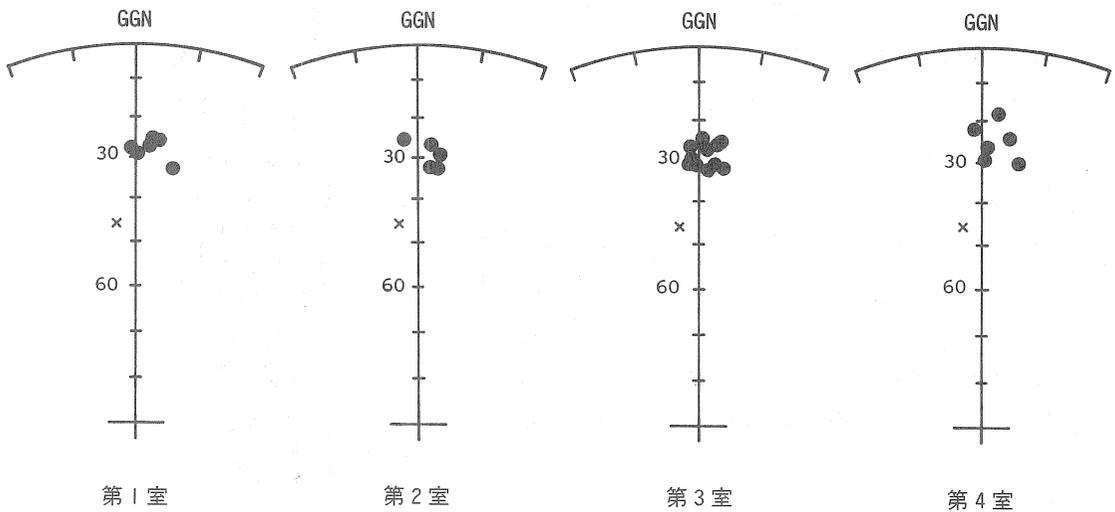
てくずれ易く、固く焼きしめられた焼土部分は少なかった。試料は第1室、第3室及び煙出し地点から計39個採取したが、第2室は焼結部分が少なく試料の採取はできなかった。

中道古窯跡の試料採取地所は第22図に示す通りである。

残留磁気測定

焼土試料は実験室内で一辺ほぼ3cmの立方体に整形し、残留磁気方向は無定位磁力計ですべて測定した。一部試料の安定性は交流消磁によりチェックした。その結果、中道古窯跡の焼土試料は安定な残留磁気方向を示すものが多く、信頼できるものであった。第23図は中道古窯跡から得られた残留磁気方向である。

一方、ハラタラ古窯跡の焼土試料は方向のバラツキが大きく、信頼できる方向が得られなかった。第24図はハラタラ古窯跡の残留磁気方向である。

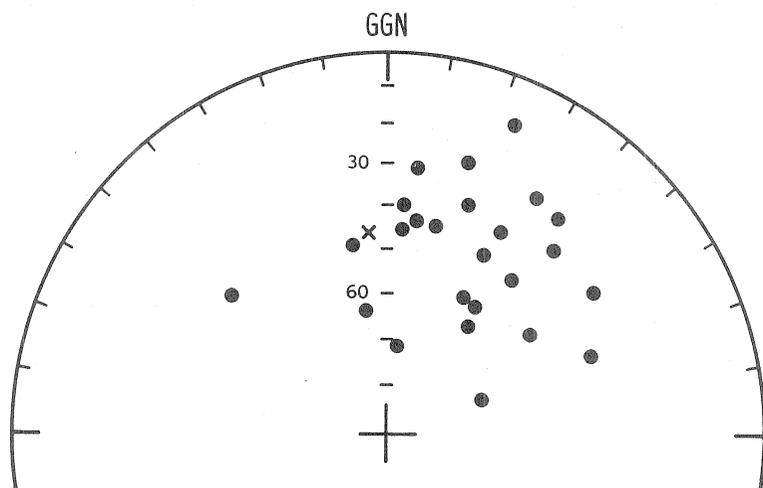


第23図 中道古窯跡残留磁気方向

中道古窯跡の残留磁気測定結果は次の通りである。

ただし、Nは測定試料数、Dは偏角、Iは伏角、Kは信頼度係数、 θ_{95} は誤差角である。

採取場所	N	D	I	K	θ_{95}
第1室	6	3.2	28.5	420.2	3.2
第2室	5	2.5	29.9	373.2	4.0
第3室	11	1.5	29.6	467.3	2.1
第4室	6	2.6	25.3	195.3	4.8
平均	28	2.3	28.9	277.1	1.6



第24図 ハラタラ古窯跡残留磁気方向

各室から求めた残留磁気の方法はよく一致しており、それらに有意の差は認められない。従って、全測定試料の平均値をとりこの窯跡の残留磁気方向とする。

推定年代

測定した残留磁気方向を広岡（1977）の地磁気永年変化図にプロットしたのが第25図である。測定値は伏角が浅く、変化曲線から少し離れているのが気にかかるが、測定値から曲線に垂線を下し年代を求めてみると、

A. D. 1530±30

の値が得られる。この推定年代は16世紀前半を示唆しているが、一般には16世紀末の操業が考えられているようである。

考 察

長崎県の平戸（33°30′N, 129°20′E）や五島列島沖（33°00′N, 128°30′E）では、17世紀初頭ヨーロッパ人による偏角の観測値が報告されている（Imamiti, 1956）。それによると、A. D. 1613～1615年頃、平戸や五島列島沖での偏角は約2.5°東にずれていたことになる。ただし、伏角の観測値はなく不明である。

この偏角の観測値が正しいものとして、広岡の変化曲線を5°西にずらし、曲線の補正をしてから、改めて年代を求めてみると、

A. D. 1570±30

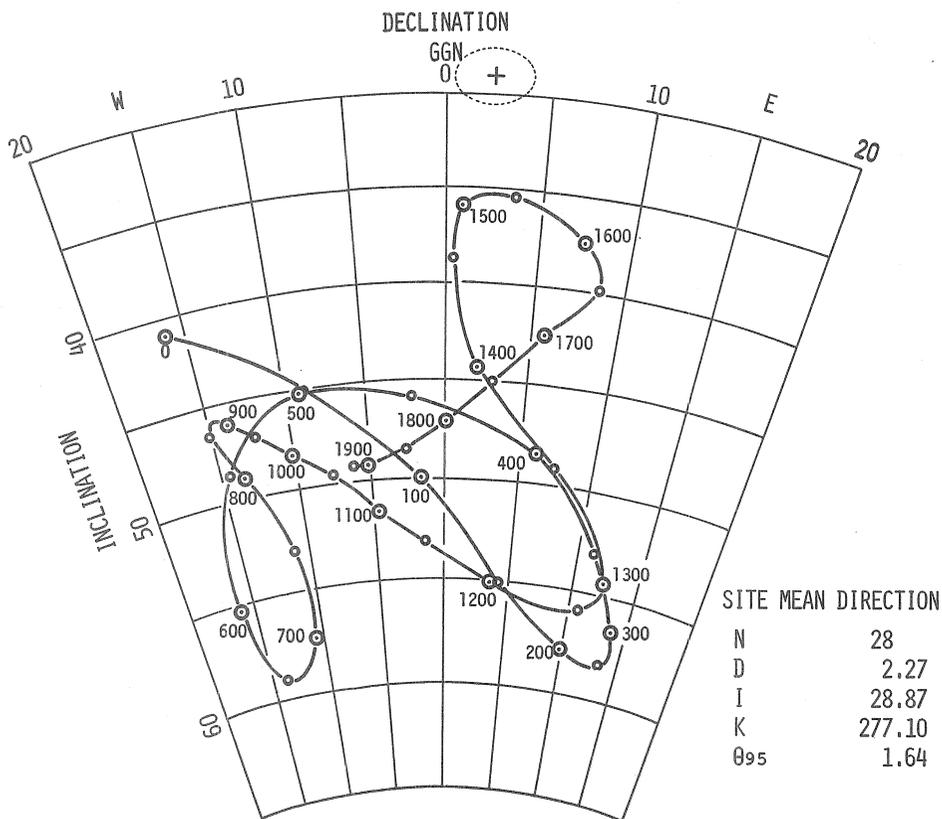
という値が得られる。これに従えば、中道古窯の操業年代は16世紀後半ということになる。九

州地方では、広岡（1977）の永年変化曲線は少し補正が必要であろうという報告もあり（広岡，1978；伊藤・時枝，1982），より精度の高いデータの蓄積が必要であろう。

終りに、考古地磁気試料採取の機会を与えていただき、試料採取時には種々御世話になり御協力いただいた諫早市教育委員会の方々、特に秀島貞康氏に心からの謝意を表したい。

参 考 文 献

- 広岡公夫（1977） 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向，第四紀研究，15巻，200～203。
 広岡公夫（1978） 考古地磁気法による年代決定，「自然科学の手法による遺跡の古文化財等の研究」，昭和52年次報告書，53～65。
 Imamiti, S・（1956） Secular variation of the magnetic declination in Japan, Men. kakioka Mag. Obs., 7, 49～55。
 伊藤晴明・時枝克安（1982） 内ヶ磯窯跡の科学的な年代測定について，「内ヶ磯窯跡」，直方市文化財調査報告書 第4集，直方市教育委員会，145～155。



第25図 地磁気永年変化図（広岡，1977）と中道古窯跡の測定値（+印）

VI 結 論

各章において今次発掘調査を実施した2古窯跡についてその概要を記したが、本章ではその総括を行い結論としたい。

先ず窯体についてであるが、築窯については両窯ともに半地下式となっており地山掘鑿を行い、窯室を接続させている。ハラタラ古窯跡は胴木間以下数室を破損しているが、残存窯室の観察からすると焼成室床面は傾斜角を変えており、また奥壁も急角度で登らせ次室へ接続させる築き方をしている。次室へ移る部分、つまり奥壁上位の温座の巢の存在は現状では把握できないが、存在したと見るのが妥当であろう。それは火床及び焚口を右側に備えていることによる。築窯はすべて粘土を塗り込めて造作しており、調査時点では僅かに側壁にその残存が見られた。地形の傾斜に沿う塗りバケの状態が看取され、また壁には竹様の痕跡が残り、天井部は竹様の材を骨組みにして築いたことが知られる。

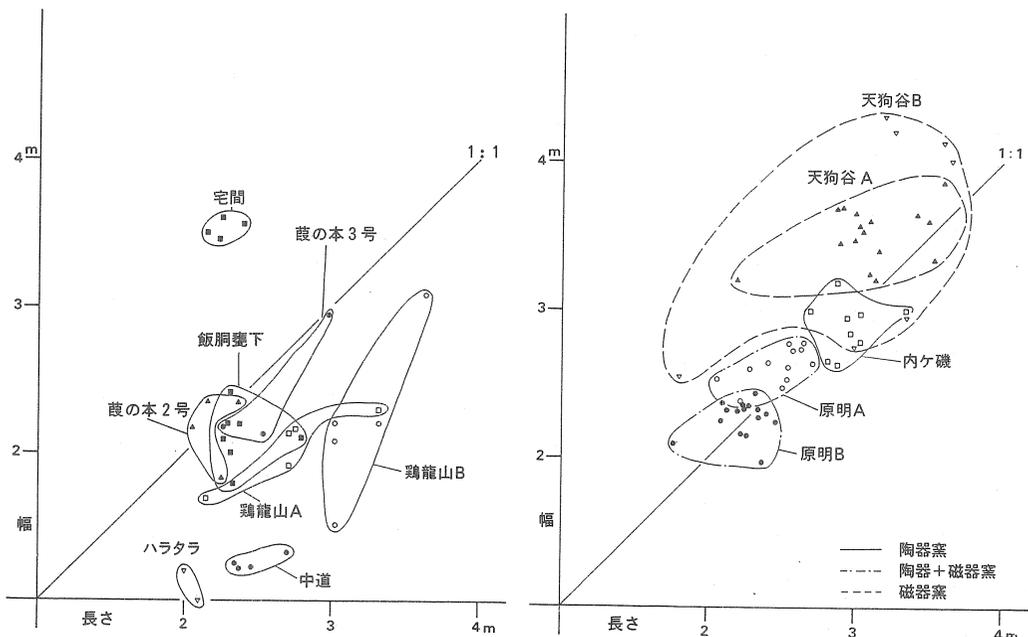
中道古窯跡の場合は、緩傾斜面にハラタラ古窯跡同様の築窯を行っているが、緩傾斜であるためその遺存度は良好であった。各室とも奥壁に向って漸次高くなる砂床を作り、奥壁は急角度で立ち上がる。壁部分は僅か30cmほどの立ち上がり有し、上位はトンバイを縦位に4本使用して5ヶ所の通焰孔を作っている。この通焰孔上位に奥壁が続くのであるが、その高さがどれ位のものであったか現状では分からない。しかし、第1室及び煙出し部分の状況からすると高く80~90cmの低い天井であったろうと見られる。この低い天井部は現存の側壁及び奥壁の状況からするとカマボコ形を呈するように、つまり竹を2つに割って伏せたような割竹型を示していたと推定される。このような窯室が何室接続していたか不明であるが、窯体を切断する道路下に砂床が看取される処よりすれば最低8室は存在したであろうと推定される。この窯体の南限は落ち込みによって劃されている。地山を切断したもので、煙出し外部の施設である。このような施設は他窯跡においてもしばしば見られるものである。

さて、上記2古窯跡のうちハラタラ古窯跡は割竹型登窯と称すべき構造を示すが、細部において独自の築窯の方法を見出すことができる。また、中道古窯跡もハラタラ古窯跡同様のプランを示し、割竹型の階段状連房式登窯である。両窯構造的に異なっているが、築窯意識は同一軌上にあると見られる。それはハラタラ古窯跡が壺類の大形品を焼造し、中道古窯跡は皿・碗等小形品を焼造した窯と考えられ、このことが築窯法、立地及び窯道具の相異に起因したと推考されるからである。よって両古窯が新旧関係にあるものと見るより、同時期に操業されたと考える方が隠当であろうと思われる。

以上述べた両古窯の窯体構造について、その類例を国内に求めるのは難しい状況である。両古窯跡ともに縦長プランを示す窯室が接続する形態を示し、その類例に乏しいことによる。近世の肥前における窯型式の系譜^{註3}について三上次男氏は中国との関係よりも朝鮮との関係を重視

されている。そこで過去調査が実施された李朝初期の鶴峯里第一陶窯址^{註4}（鷄龍山麓陶窯址）のA・B窯を見てみたい。窯体の規模はA窯19.6m、窯室平均長2.74m、同平均幅1.27m、B窯全長18.8m、窯室平均長3.1m、同平均幅1.33mを測り、A室は胴木間を含めて7室で構成され、各室は障壁によって区画されているものの奥壁部分に階段状の立ち上がりを有さない。B窯は胴木間を含めて6室で各窯室ともに僅かながら立ち上がる奥壁を有し、次室と接続している。両窯とも縦長プランの窯室が接続して割竹型登窯をなすもので、各窯室の主軸は各々ズレ込んで蛇窯の形態を示している。この窯址からは刷毛目、絵三島、黒釉、白磁などが焼造されており、出土陶磁器及び墓誌板等から15世紀前半から16世紀半ば頃までの操業と位置付けられている。この鷄龍山陶窯址群と本古窯跡群との窯体構造における類似点が指摘される。

次に窯室のプランについて本古窯跡群では縦長を示していることは既述した。多くの古窯跡が陶器窯、磁器窯を問わず横長プランを示すのに比し対照的である。そこで各古窯跡窯室の奥行き（ここでは火床まで含めた）と幅を図化して纏めたのが下図である。陶器窯は総体的に小規模であり、縦長或いは正方形に近いプランを示している。ただ宅間窯跡^{註5}のみは窯室幅が広く横長プランを呈している。この窯は割竹式登窯の地上式で李朝中期の築窯方法を直接導入したとされるものである。岸嶽7古窯中最古と言われる飯胴甕下窯^{註6}はほぼ正方形に近いプランを示している。また陶器窯で磁器をも焼造した原明A・B窯^{註7}は正方形プランを呈するもので17世紀初頭に位置付けられている。磁器窯では天狗谷A・B窯^{註8}を取り上げたが窯室幅が長さを遙かに凌駕しており、同時に坪数も大きくなっている。また火床面積も増大する傾向を示している。このように見てくると陶器窯から磁器窯への移行に伴い、縦長プランから正方形プランを経て



横長プランの窯室へと変遷していくのが理解されるのである。また、同時に規模の拡大化、火床の増大が伴っており、多量焼成を可能にする窯体構造の変化、窯道具の多様化が指摘される。割竹型登窯から階段状連房式登窯への変換は、安定した焼造温度を得ることや燃焼効率を高めることと多量生産を可能とする両相を止揚する形でもたらされたと評価されよう。

本古窯跡群で焼造された陶器群はすべて灰釉を施釉したものである。鉄分の多寡及び窯変によって淡緑色、茶色の飴釉の如く発色したもの、黒色を呈するものなどの釉調が認められる。しかし、絵唐津と言われる彩絵した例は一点も検出されていない。本古窯跡出土陶器群は各器種の形態等から絵唐津発生期以前に位置付けがなされよう。

この絵唐津と言われる彩絵技法が何時頃から導入されたかについては、未だ明確な論証がなされていない。昭和57年度調査が実施された葎の本古窯^{註9}の成果によると3号窯は土灰釉溝縁皿を主体とする絵唐津以前の所産である。後続する2号窯では片口に単純な草文を表わし、1号窯では絵唐津の主体が皿類に移り、同時に器種の増加が指摘されている。操業年代は慶長～寛永年間とされており、中でも絵唐津以前の3号窯はその最初期となろう。この葎の本古窯の調査によって絵唐津に先行する陶器群の存在が明確となった。

さて、溝縁皿については大橋康二氏によって検討が加えられている^{註10}。これによれば溝縁皿の紀年銘初出資料が川古窯の谷窯出土の元和4年銘大皿であること、その下限が遺跡出土陶の検討により寛永後半期にあらうことが提示された。また窯詰技法について言及され胎土目積が砂目積に先行する技法であること、砂目積技法と溝縁皿が密接な関連性が認められることを指摘され、「文禄・慶長の役に連れ帰られ藤ノ川内に来住した朝鮮人陶工集団が焼造、あるいは日本人に教えた技術、それは砂目積の陶磁器や砂敷の磁器だったと想像されるのである。」と述べられている。

次に遺跡出土の唐津陶としては天正元年織田信長によって滅ぼされた朝倉氏の本貫地一乗谷朝倉氏遺跡^{註11}を挙げることができる。また大阪・京都近傍の諸遺跡に関しては鈴木重治氏によって纏められており^{註12}、天正10年代にはかなりの唐津陶が京都に搬入されていた事を示された。

また天正20年銘沓岐聖母神社の「唐津叩き三ツ耳付茶壺」、天正19年没した利久所持「ねのこもち」などの存在により唐津焼の起源が天正期以前に位置付けられることを示している。

以上、本古窯跡の窯体構造及び出土品等について概略を記し、関連事項について触れてきた。本古窯跡群の操業期については、窯体構造が李朝期の鷄龍山陶窯址と類似点が指摘されること、法量図から規模が極めて小さく縦長プランを示す窯室は陶器窯でも古期に位置付けられること、胎土目積技法のみが看取され、かつ溝縁皿の出現が見られないこと等により、1560～70年代に推定することができる。この推定年代は出土陶器群、瓦器類との年代的な齟齬を来すものではないと考えられる。また、Vで詳述してある残留磁気測定の推定年代とは若干ズレているものの、補正值とは一致しており妥当な年代であろうと考えられる。

本古窯跡の操業期は、諫早地方の西郷氏治世の時代に相当する。従来喧伝されてきた龍造寺家晴

帯同説は今回の調査で改められることになった。西郷氏についてはその史料が僅少で多くを知ることはできない。しかし山部淳氏が取り上げられた『実隆公記』、『再昌草』等の検討により、西郷尚善が京の文化摂取に努力したことが窺える。この尚善の上京等京文化の摂取と古窯成立との関連は現状では認め難いが、西郷氏関連史料の発見とともに、本古窯跡成立の背景も次第に闡明されるであろう。

- 註1. 水町和三郎・金原京一
『肥前古窯址めぐり』田中平安堂 京都市 昭和10年
- 註2. 楠原佑介・溝手理太郎
『地名用語語源辞典』東京堂出版 昭和58年
- 註3. 三上次男
「九州陶磁と国際性—日本陶磁史上におけるその位置づけについて—」
『九州の絵画と陶芸 九州文化論集 5』平凡社 昭和50年
- 註4. 野守健・神田惣蔵
「鶏籠山麓陶窯址調査報告」
『昭和二年度古蹟調査報告 第一冊』朝鮮総督府 昭和2年
鄭良謨・香本不苦治
「李朝陶磁の窯跡と出土品」
『世界陶磁全集19 李朝』小学館 昭和55年
- 註5. 副島邦弘
『古高取 永満寺宅間窯跡』直方市教育委員会 昭和58年
- 註6. 北波多村史編纂委員会
『北波多村史 上・下巻』昭和36・38年
- 註7. 高島忠平外
『原明古窯跡』西有田町教育委員会 昭和56年
- 註8. 三上次男外
『有田天狗谷古窯』有田町教育委員会 昭和47年
- 註9. 久村貞男外
『葎の本窯跡範囲確認調査報告書』佐世保市教育委員会 昭和58年
- 註10. 大橋康二
「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について—窯詰技法よりみた—」
『佐久間重男教授退休記念 中国史・陶磁史論集』昭和58年
- 註11. 佐賀県立博物館『古唐津』昭和53年に依った。
- 註12. 鈴木重治
「生活遺跡出土の唐津陶」
『島根県立博物館調査報告 第3冊』島根県立博物館 昭和57年
同
「唐津陶出現についての一考察」
『同志社構内 地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』昭和56年
- 註13. 山部淳
「西郷尚善と東山文化」
『諫早史談』第14号 諫早史談会 昭和57年

VII 唐津系陶器の中における土師野尾窯について

1. 唐津系陶器の流れ

日本近世陶磁器の発展にあたって重要な役割を果たしてきたのが、16世紀に西北九州を拠点として始まった唐津系陶器である。その起源については朝鮮の陶技を受けて出発したと言われるが、時期については多分に推測的な部分が多い。これまで岸嶽系の一群を最古の様式とするところでは大方の意見が一致するところだが、その創窯の時期については16世紀の前半とするにとどまり、この一群の終焉を16世紀末の文禄3年（1594）に波多氏が所領を没収された時としている。なおこの間の年代を示す資料として昭和31年に発掘調査が行われた飯胴甕下窯の熱残留磁気測定によると、1570年～1600年の閉窯年代が算出されているが、この一群の窯跡調査はほとんど行われておらず、わずかに階段式連房登窯の構造から叩きの技法を用いた壺・甕、水挽き法での碗・鉢・皿類が施釉されて焼成されていたことが判る。

伝世品及び生活址での出土資料に含まれるものでは、壱岐島聖母神社の叩き黒唐津天正20年銘耳付茶壺と、天正元年（1573）に焼亡した福井県の一乗谷朝倉遺跡、大阪府堺環濠都市遺跡SKT19での天正13年（1585）銘の木簡資料との共伴出土、あるいは天正15年（1578）焼失廃寺の京都南蛮寺などからも年代を推すことができる。このように1570年～80年頃にはすでに唐津系陶器は京阪地方までに販路が拡大していることからすると、創窯を16世紀前半頃とするには妥当なところであるが、その要因についてはこれらの地域での唐津系陶器出現以前の実態が不明であることが大きな支障となっている。即ち九州一円において古墳時代以降の中世陶器窯の発見がほとんど無いことが挙げられてきたが、この点では多くの研究者が大陸系陶磁器が入手しやすい環境にあったことを指摘して解答としている。確かに中世の遺跡発掘では多くの舶載陶磁器の出土を見るが、同時に土師系陶器の出土もあり、これらの産地について言及した例は少ない。

岸嶽系以降では前代の技術的な継承は見られるが、ここに秀吉の朝鮮出兵を機会として製品の多様化がある。慶長2年（1597）寺沢志摩守の招へいで古田織部と懇意であった美濃陶工の加藤景正がやってきて、新興の窯地で織部好みと呼ばれる茶陶類が焼成されている。内田皿屋、藤の川内の窯などでは一般の食器類と共に志野、織部に似かよった製品類が物原発見資料の中に認められる。九州のほとんどの近世陶器の出発点はいずれもこの時期に創窯されたと言われるのが通説であるが、必ずしも茶陶そのものがこれらの窯を起させたものでないことは多くの窯の焼成資料から眺めることができる。特に17世紀に入ってから次第に磁器とのかかわり合いを強くして行き、有田天狗谷窯に代表されるように白磁焼成へ転化したわけである。なお一部では引き続いて陶器焼成が行われた窯もあるが、製品は日常の雑器類が主体となっている。

このような唐津系陶器の変遷史の中にあつて、最古の様式に位置するものは岸嶽を中心とする狭い地域に限られ、ここを唐津系陶器の発生の地として捉えてきた。今回の土師野尾窯については、それ以後の慶長の役後渡来した陶工によって始まったとされてきたが、これまで製品の検討は全然行われないうまま、創窯時についても文献史料はなくて口伝のみであった。

2. 唐津系陶器における土師野尾窯の位置

土師野尾窯（中道窯）の発見は、昭和2年に金原京一によってなされているが、その後長い間にわたつてこの窯が唐津焼研究の中で注目されてこなかったのは、当時から特徴あるものとしてものではやされてきた絵唐津や茶陶類の製品が認められないことと、この窯が唐津系陶器窯の一群に含められてはいるが、分布の上で遠く孤立化していることにもよる。そのために一応は平戸古唐津と称するものに統轄されているが、ほとんど今日まで製品の特徴に触れられたものはなく、わずかに紹介を試みた文献の中では黄・青唐津、絵唐津が挙がるが、採集資料に認められない絵唐津製品が加えられているなどあいまいである。

その後、昭和40年頃に中道窯は道路改修工事によって、調査が行われないで胴木間から数室が寸断・破壊されている。この折にかなりの陶片が出土したと聞かすが、極く一部の資料を除いて保管されていないため実態は不明のままであった。しかし昭和54年には中道窯の西方約500mに登窯1基が確認され（ハラタラ窯）、また「古唐津—肥前陶器の歴史と美を探る—」（佐賀県立博物館1978）の展覧会では初めて土師野尾窯製品として、伝世品の黒唐津三耳付葉茶壺（図26—3）が展示されるなど土師野尾窯に対する関心は次第に高まってきつた。加えて昭和57年の長崎大水害では一部に土師野尾窯の陶技を受継いだのではないかとされる同じ諫早領内の現川焼〔元禄4年（1691）創始〕鬼木上窯の窯跡が発見され、やがて確認調査が行われたところから土師野尾の2つの窯の実態を把握する必要に迫られることとなったのである。

調査結果の詳細については秀島報文で触れているが、発掘した窯跡は2基である。そのためにこれまで土師野尾窯と総称していたが、それぞれ中道窯、ハラタラ窯と名づけた。両窯跡とも単独窯で、いずれも胴木間から数室を消失しているが、推定ではおよそ全長15m、幅1.2mの7～8室程度の同様な規模をもつものである。窯室の広さは中道窯では約2.5m×1.2mであるが、ハラタラ窯の場合は保存状態が著しく悪いために明確に奥壁を捉えることはできなかった。床面は手前から奥壁に向つて次第に上がつており、その角度は窯場の地形と併せてハラタラ窯ではかなり急傾斜をもっている。資料では両窯の主体となる製品が異なる様相を示しているが、検討の結果では同時に使い分けて用いられたものとして把握した。

ではこの両古窯の年代であるが、一応島根大学が実施した残留磁気測定では中道窯の終焉は1570年±30年となっている。この年代値を単純にとりあげるならば、これまでの唐津系陶器窯の中で最も古い一群に属し、換言すれば唐津系陶器の起源について一考を要する窯として注目

されるべきものである。仮に30年の誤差を新しく加えてみても1600年となって飯胴甕下窯の数値と同様であることは、岸嶽系古窯跡群とほぼ同年代であることはまちがいないだろう。

窯の構造・規模及び出土資料からは割竹型の階段式登窯であり、個々の窯室の規模はこれまで調査が行われている前記の飯胴甕下窯、武雄北部系古窯の中で最も古く開窯されたと言われる黒牟田銚谷窯や、平戸系の佐世保葎の本1～3号窯などいずれも1辺2～3m程度の正方形もしくは長方形を形作っているが、当窯跡もほぼその範疇に含まれるものである。しかしその中でも小形に属し、その後の磁器焼成を行った登窯が窯室数及び窯室の1つの広さが拡大し、それが横長の状態で縦に連なって行くのに対して、当古窯では縦長で連なる特徴を擁している。もちろんこの変遷だけでは決定的な要因となり得ないが、その後この型式に属するものが姿を見せなくなると言うことは、唐津系陶器の初期の段階における現象として捉えてよいものと思われる。また窯室数が7～8室程度の規模という点でも飯胴甕下窯と一致するところである。

次に資料からは、ここで焼成されたものは一般的な壺・甕・皿などの雑陶類であり、いわゆる唐津焼を代表する茶陶類はなく、わずかに碗類で天目形の器形、高台が撥形に類する一部の資料で推測されるにとどまる。原料の胎土はあまり火度に強くない鉄分が濃く混ったもので、原料選択にさほど配慮が施されていないことが製品の中での石はぜなどに認めることができる。鉄分の濃い土を用いる唐津系陶器には武雄系唐津があるが、これらの窯場ではこの鉄分の濃さを消すために刷毛目や象嵌技術など装飾技法が発達しているわけであるが、ここではこれらの装飾技法はもちろん前述したように絵唐津類も全くなく、その点では非常に素朴なものである。釉薬でも木灰に鉄分が入ったものを基調としており、そのことがわずかに黒唐津、青唐津の製品として生み出されている。

成形では壺・甕類が輪積みから叩き締め技法を用い、皿・碗類に水挽きの技法が行われていることは他窯製品と異なるところはない。しかし詳細に眺めると内外叩きの後でなで消すような手法を用いたものがあり、なかには外側よりも内面に多く行ったものもある。窯詰めは土製のはま、支柱台（とちん）それに陶片を使用しているが、これらの中には靱殻や繊維質のものが付着した痕跡を示すものがあるところから、釉薬の流れ過ぎによる失敗を防ぐために意識的に靱痕、繊維質等のものが利用されたことが碗類の高台畳付部にも認められることから断言できる。出土資料からは碗類には内面に重ね焼きの痕跡を残すものはなく、皿・平鉢・挿鉢類に胎土目の痕跡を残している。また壺では図4-2の口唇部にタール状のもの付着が認められることは、口幅の広い壺や甕類に伏せ焼きや口と口を合わせた重ね焼きの方法が行われていることが判る。

最後にこれらの特徴をもつ土師野尾窯（中道・ハラタラ）の唐津系陶器群の中での系統と編年的な位置づけに触れてみよう。まず唐津系陶器の研究は古くに組み立てられた一本の流れが今日まで多少の修正はあったにしても踏襲されていると言っても過言ではない。それはもちろん文献資料の乏しさもあるが、多くは科学的な方法が用いられなかった研究初期の段階に確立

されたものであり、その目安となった根拠もあいまいである。たとえば古窯跡の分布を基盤とした分類も一部では納得できるところもあるが、平戸古唐津系に至っては佐賀県西松浦郡から長崎県のほぼ北から南までが含まれるという事実は全く無謀と言えることである。また愛玩される製品を焼いた窯のみが強く前面に押し出され、しかもその窯においても全体的な映像からではなく、特徴ある製品とともにどのようなものが焼成されたかについては深く言及していないこともあげられる。これは物原の層位的な発掘調査が行われた窯跡が少ないことにも起因しており、結果として編年作業を行う上で大きな支障となっているのである。そのために本古窯の位置づけについても困難な様相を示しているが、さいわいなことに窯の構造・規模と科学的な方法による年代算出の方法がとられたことは評価できる。ただ物原の調査において豊富な出土品に恵まれず、層位的な把握ができなかったことは問題を残している。

結論を言えば本古窯はこれまで言われてきたような慶長の役（1597～1598）以降に開かれた窯ではなく、少なくとも岸嶽系古唐津とほぼ並行期に位置づけることができる。即ち古唐津の系譜を大きく雑陶焼成期、茶陶招来期、磁器焼成の3期にわけて考えるならば、ここでは茶陶製品はなく、また装飾的な技法が見られない庶民生活具が主である点でも肯定される。それに加えて資料の観察から成形、施釉、作調ともにこれまで言われてきた朝鮮の高麗末から李朝初期の陶技の影響を強く受けており、中にはそのものを伝承している気配すらある。また窯の構造・規模ともに同様なことが言えるであろう^註。

註 筆者は、絵唐津以前に施釉のみの陶器焼成を行った時期があるとし、岸嶽系古窯での絵唐津陶片の出土はもう一度窯及び焼成品について検討する必要があると考える。

即ち、陶片の出土はそれが絵唐津の発生期を示しているのか、あるいは物原の分層発掘が行われなかったことに起因しているかである。

3. 土師野尾窯の伝世品について（第26・27図，図版19）

今回の調査では発掘調査と並行して、伝世資料の調査を地元で実施し、その結果3点の資料を見い出すことができた。

この資料調査にあたっては、諫早市文化財保護審議会委員植村富士男氏に担当して頂いた。

また資料の掲載に際し、ご快諾頂いた所蔵者各位に深甚の謝意を表するものである。

さて、土師野尾窯の伝世品については、これまで出土陶片も少なく目安となるものに欠けていたが、それでも数点の資料が確認されていた。これは諫早市在住のつかさコレクション代表植村富士男氏の長年に渡る探索が進められ、まず愛陶家の眼に最初に触れたのが「黒唐津三耳付葉茶壺」である。輪積みを経て叩き締めによって完成されたやや胴長の壺は、口縁部の形成は天正20年在銘の壺と類似する古式の様相を示すものである。内外の叩き（内側は青海波叩き

痕)はその後になでて消されて釉薬がかけられているが、施釉されない胴裾の露胎はきめの細かな鉄分の濃い土であることを示している。釉薬は鉄分を含む木灰釉で火表は酸化炎による黒色、火裏は還元によって緑色を呈しているが、第26図2の「黒唐津壺」も同じ釉薬を用いて、同様な現象をおこしている。こちらは前者が口縁部のみ内側に施釉しているのに対して比較的内部までかかっているし、成形も明らかに異なる水挽きによる轆轤目を顕著に残している。次にその詳細を述べる。

1は中道古窯跡北側の田んぼから出土した資料である。口径130mm、器高79mm、高台径56mmを測るやや大ぶりの碗である。体部は内湾気味に立ち上がるもので、外面に凹凸の水挽き痕を明瞭に残す。口唇部はやや尖り気味におさめている。底部は1回のヘラケズリを施し、高台部を作出している。高台は竹節に近い形をなし、重厚である。高台内は深く抉り兜巾を見せる。また畳付に糸切り痕が残る。灰釉は胴下半を土見せとして残す外は全面に掛ける。内面淡緑茶～淡黄緑色、外面淡緑茶～緑黄色を呈し、外面に一部発色不良が認められる。

2は黒唐津壺で重量感がある。水挽き成形でロクロ目が残る。碁笥底から立ち上がる器壁は厚く、底部から $\frac{2}{3}$ 位のところで最大径163mmを測る。肩部はすんなりと内傾して口縁部にいたり直口する。また口縁部は丸く玉縁状に作り出す。口径120mm、器高155mm、底径84mmを測る。底部は糸切り痕が残り、約4cm位まで手持ちのヘラケズリが看取される。釉薬は鉄分の多い灰釉で黒色に発色し、部分的に緑色を呈するように窯変している。また所々に釉を弾いて茶褐色の鉄分の多い器表を見せている。内部はべつ甲様に黒と茶に発色している。

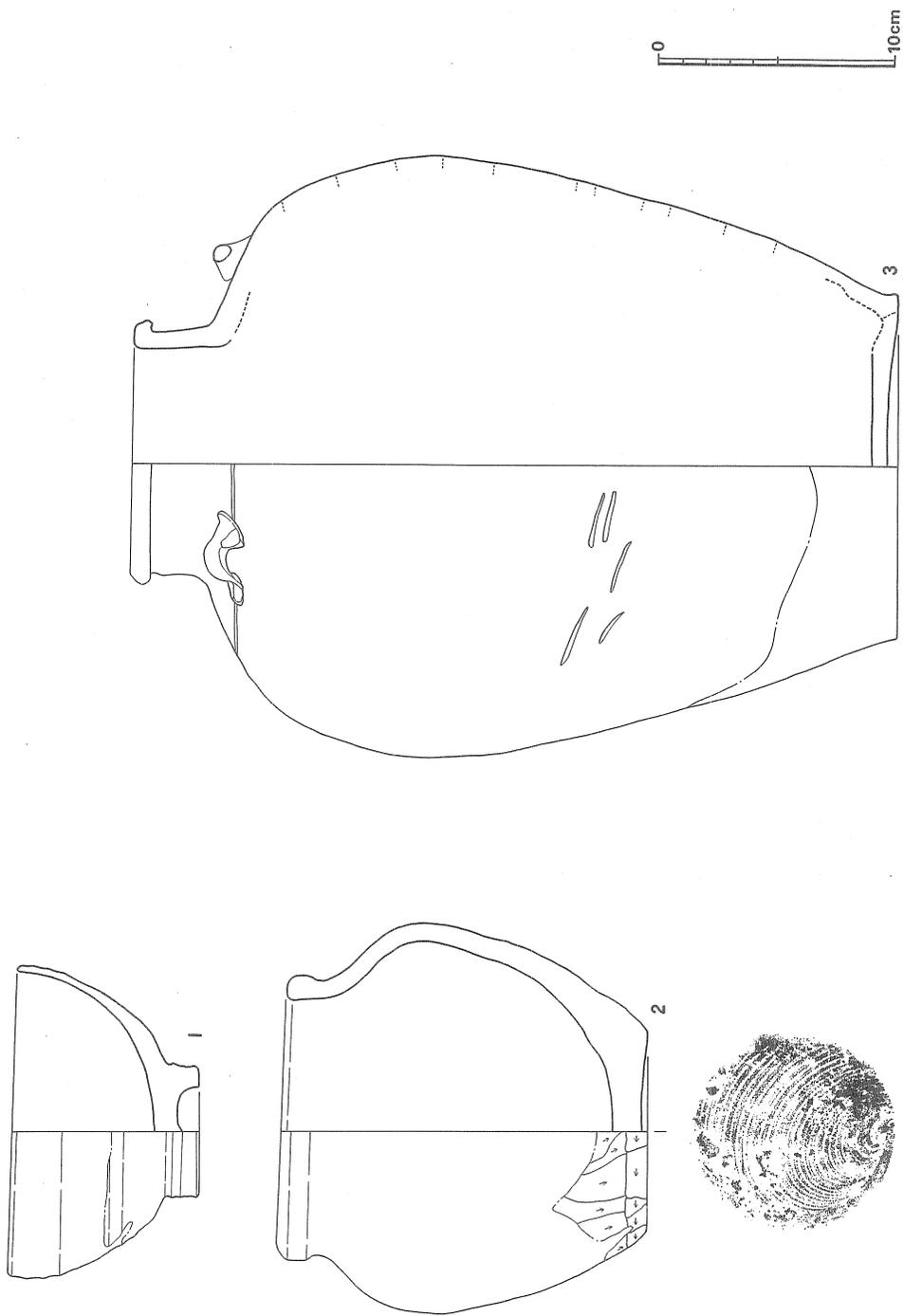
3は「黒唐津三耳付葉茶壺」である。144mmの安定性の良い底部からすんなりと延び上がる体部を示し、胴中位よりやや上で最大径をとりゆっくりと内湾して肩部をなしている。口頸部は直立して口縁部は逆L字状に折り曲げている。成形は底部板おこし、13段の紐造りで外面胴下半に左上がりの叩き痕、内面全面に青海波の当て板痕を留めている。叩きの後内外面共にナデて仕上げる。また肩部内面にはユビ押えの痕が顕著に残っている。肩部には1条のヘラ描沈線をつけ、その上に3個の耳を貼り付ける。釉薬は口縁内面から外面胴下半まで流し掛けており火前で天目色、火裏で濃緑色に窯変している。全体に恒って石ハゼがまばらに認められる。重厚な壺であるが実に軽く仕上がっている。
(つかさコレクション蔵)

4は叩き黒唐津壺で焼け歪んでいる。口径184mm、器高456mm、底径200mmを測る。安定感のある底部に胴長の体部をなし、口縁部は短く外傾し口唇部はT字状に作り出す。底部板おこし、11段の紐造りで、内面円孤状の連続した当て板痕を残す。後ハケ仕上げか。外面は胴下半にタテに残る叩き痕があり、その多くをナデ及びヨコナデ消去している。器壁厚く、かつ重い重厚な壺である。全体的に大きな火ぶくれが認められる。釉薬は鉄分の多い灰釉を口頸部内面から外面にムラなく掛けており茶～黒色に窯変している。現在も茶壺として使用されている。

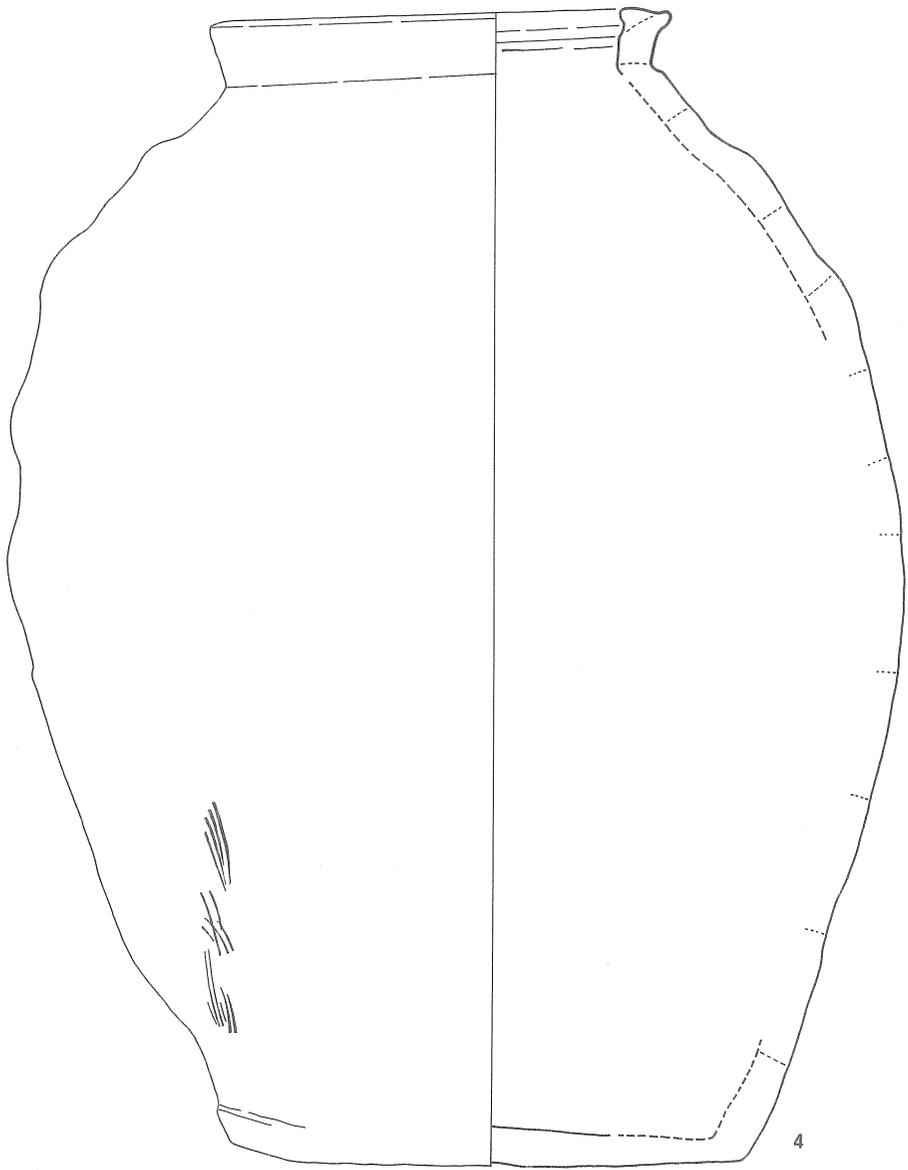
(田中重秋氏蔵)

以上が、調査前あるいは調査後に発見した土師野尾焼伝世品であるが、これらが全て土師野

尾窯の特徴を網羅しているものとは断言できない。しかし今回の調査成果に照らしあわせると製作技法や施釉技法がよく合致しており、その点では当窯焼成品の特徴をそなえた代表的資料と言える。なお数年にわたる伝世品確認調査でもその発見数は少なく、今後新たな資料が発見される機会は非常に難しい。

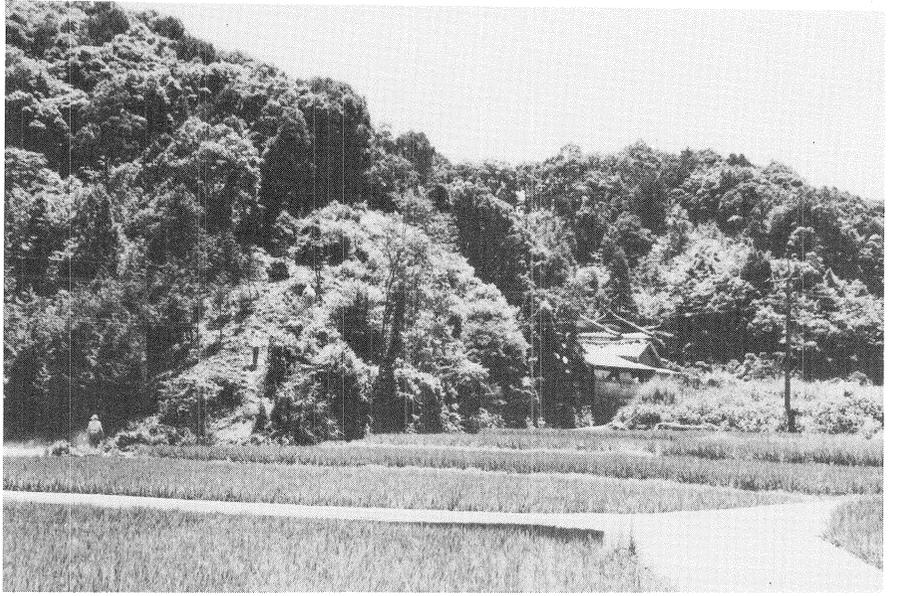


第26図 土師野尾焼伝世品 (1/3)

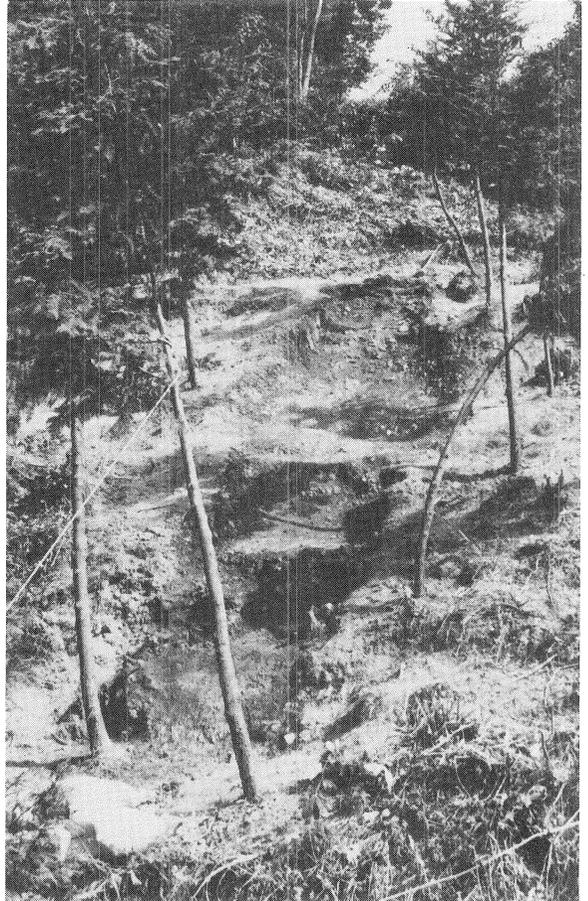


第27図 土師野尾焼伝世品 (1/3)

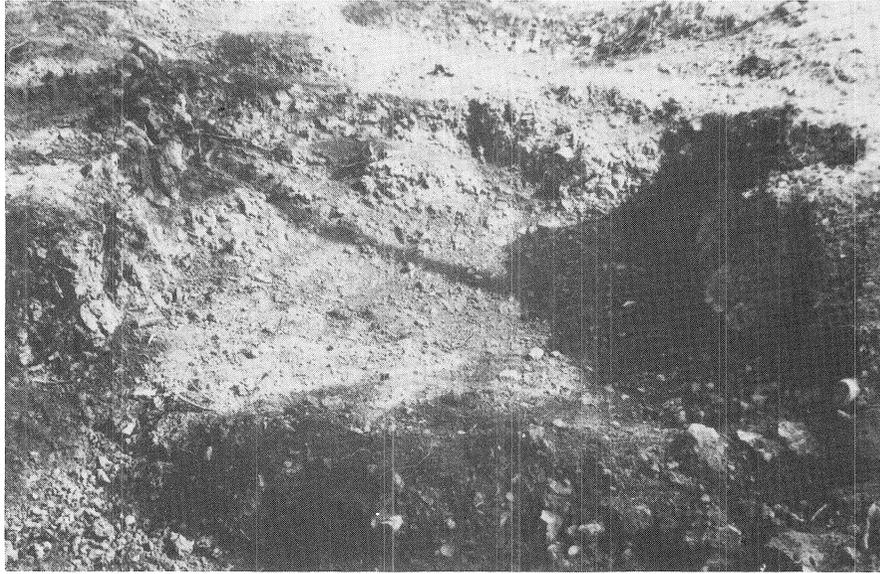
版 圖



ハラタラ古窯跡全景（西より）



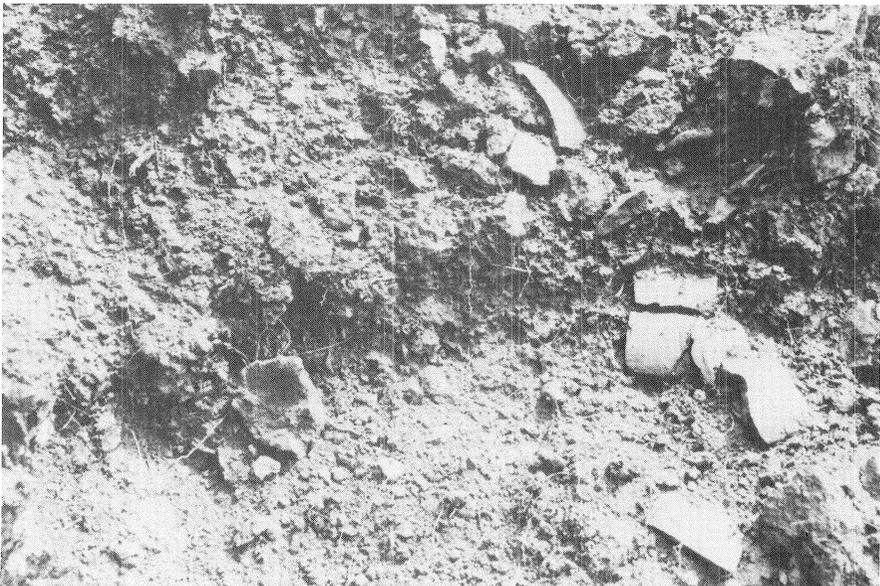
窯跡全景（西より）



第3室の状況

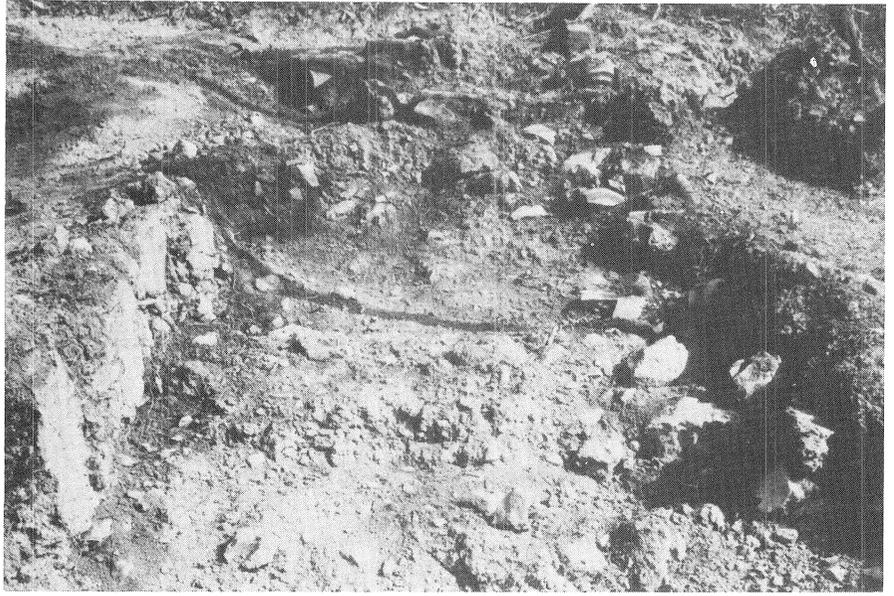


第3室遺物出土状況



第3室遺物出土状況

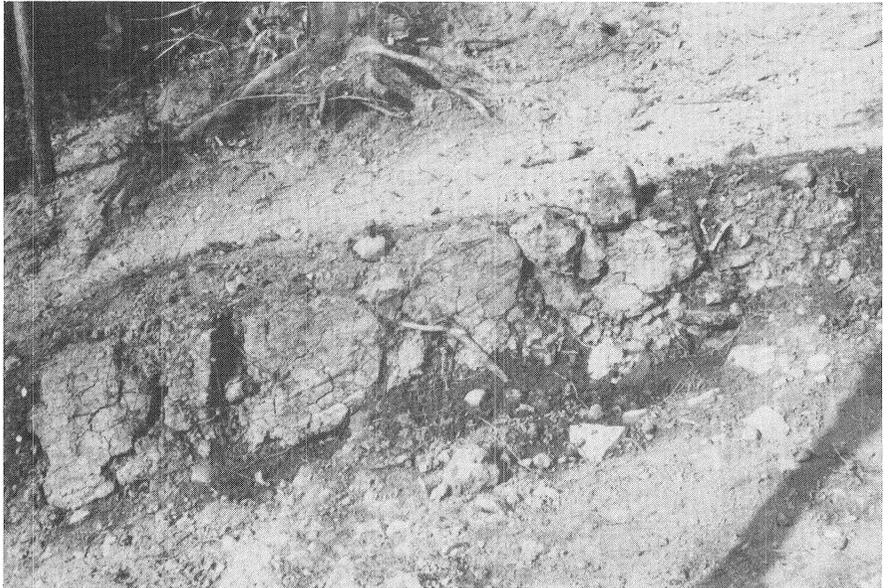
第1室から煙出し

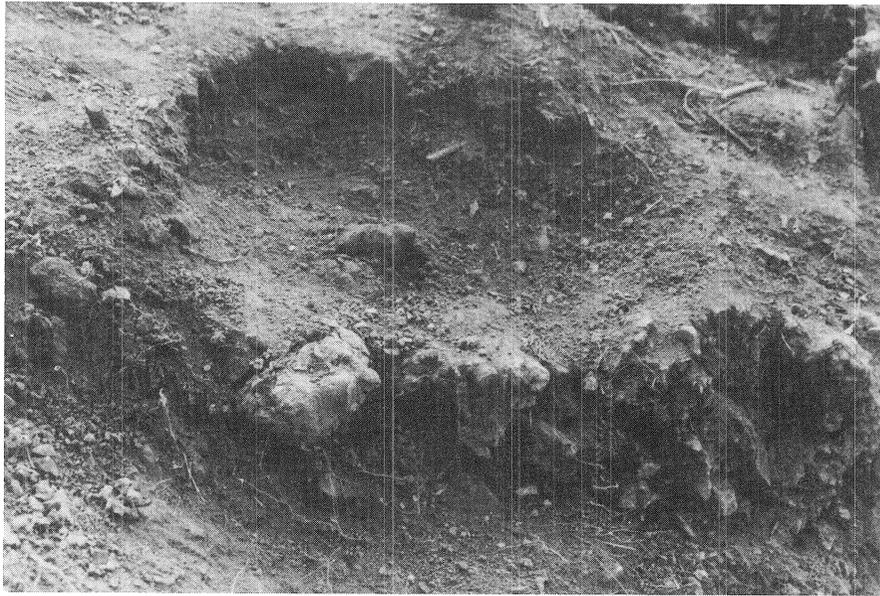


第1室から煙出し

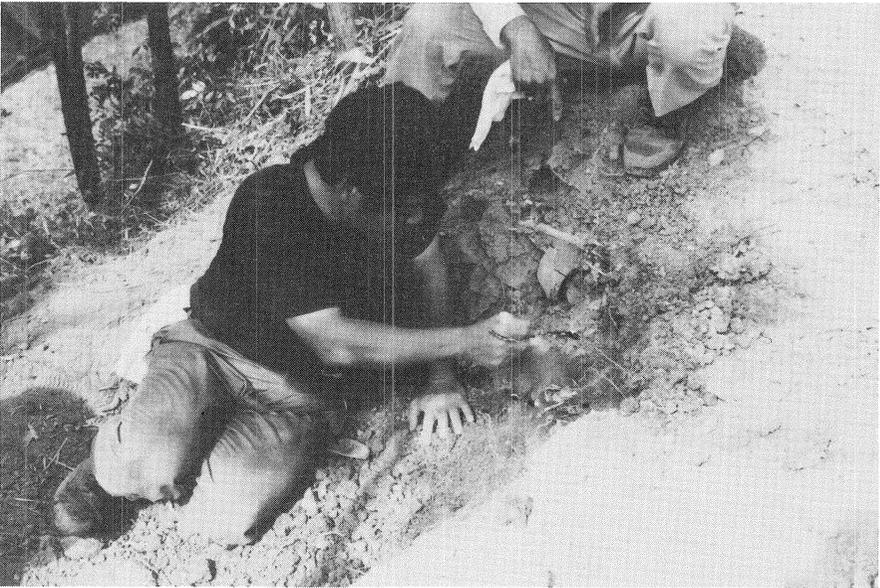


第1室東壁残存状況

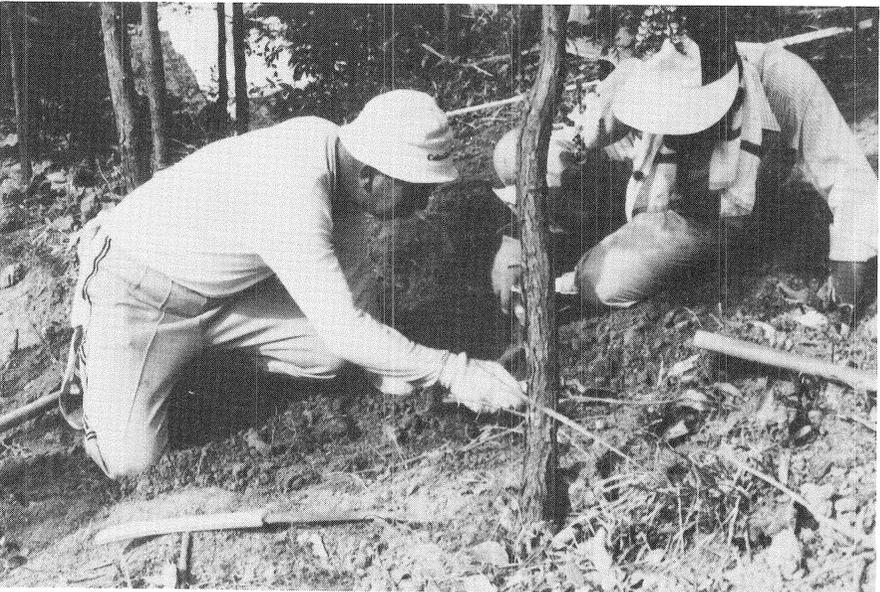




第 I 室焚口状況



調査風景



調査風景



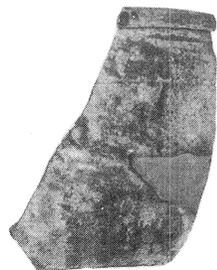
1



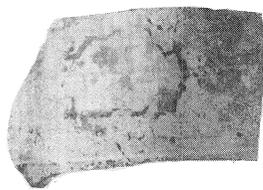
2



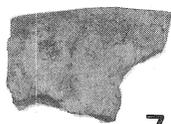
3



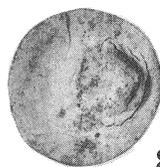
4



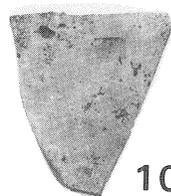
5



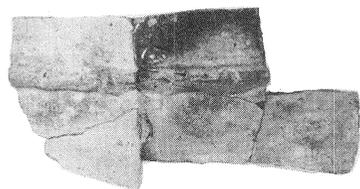
7



8



10



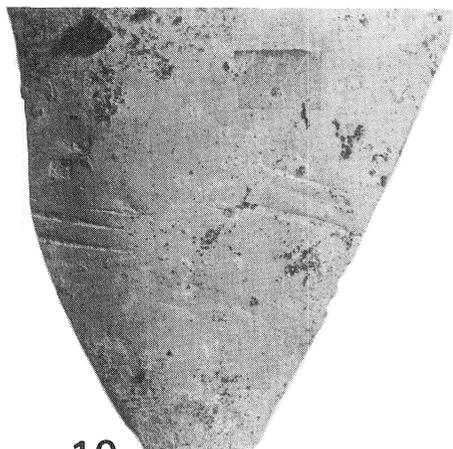
6



9



11



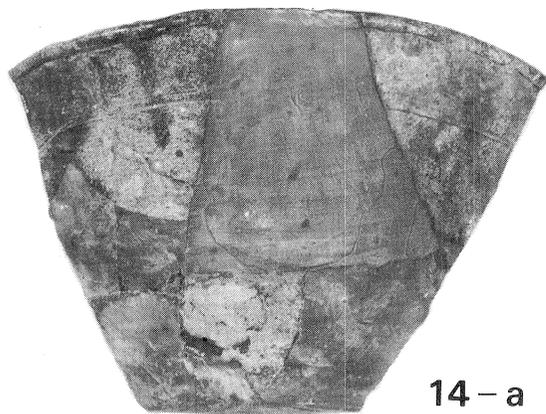
10



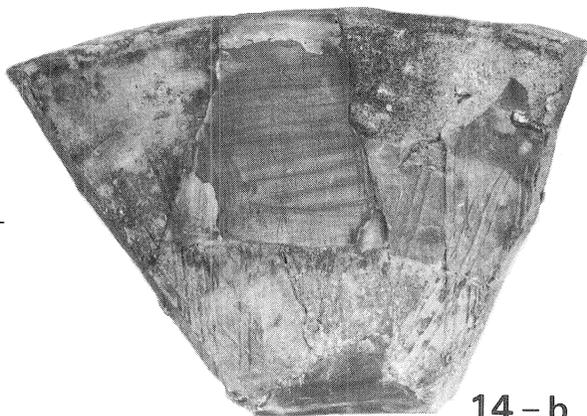
12



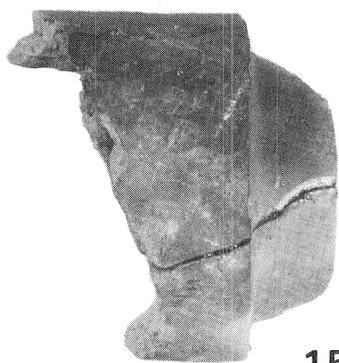
13



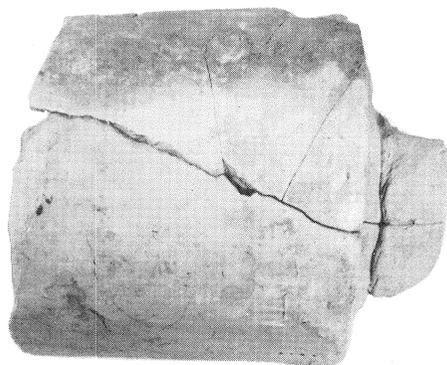
14-a



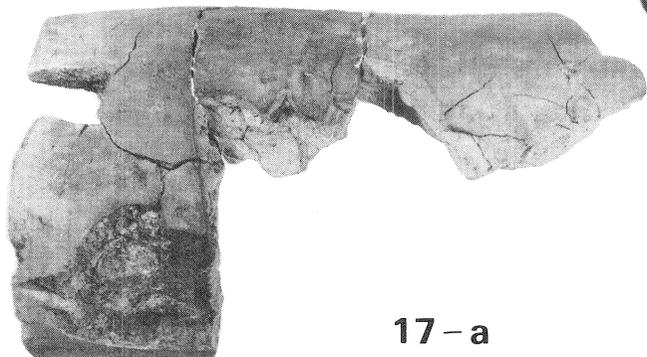
14-b



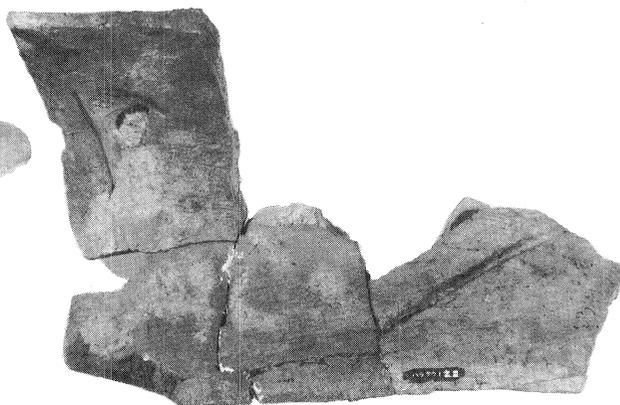
15



16



17-a



17-b



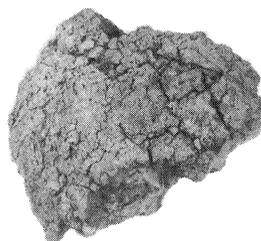
16



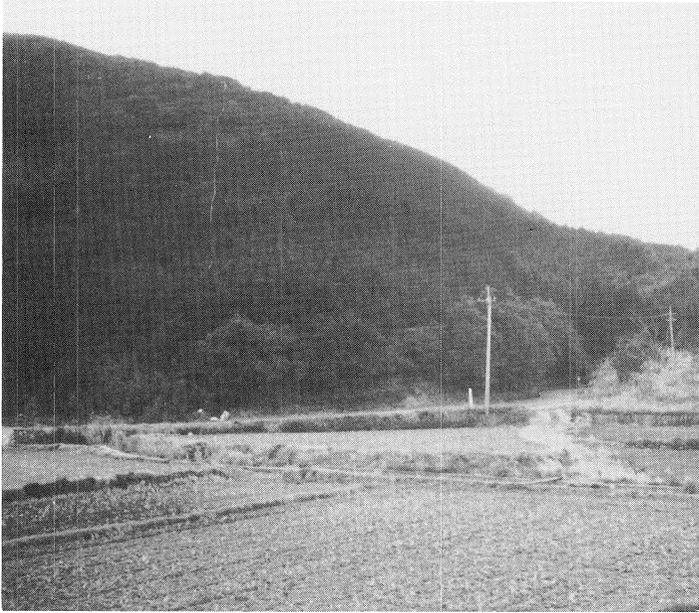
17



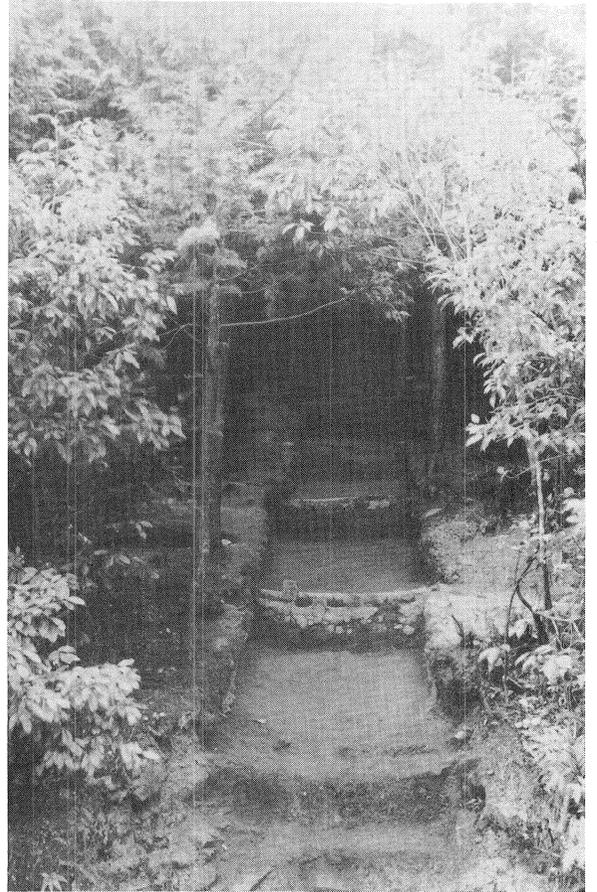
18-a



18-b



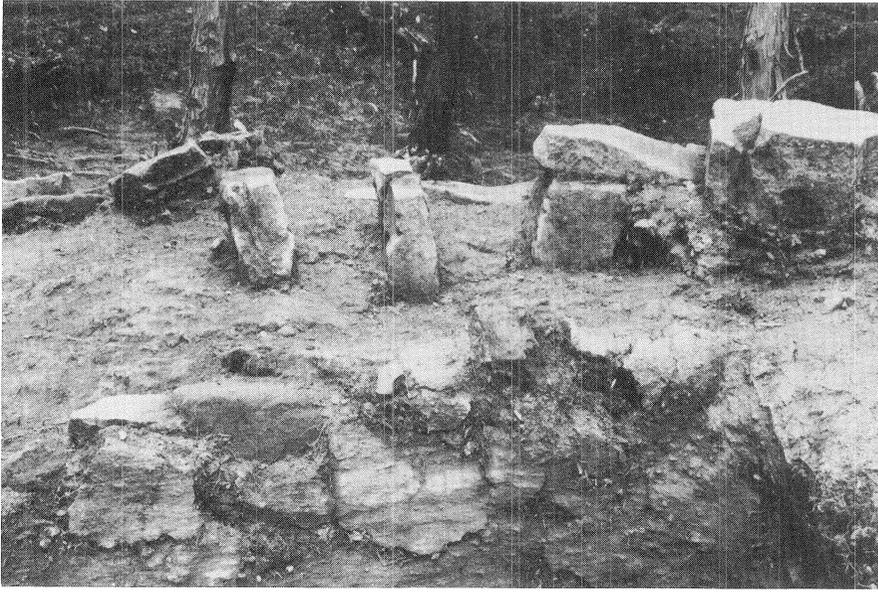
中道古窯跡全景（西より）



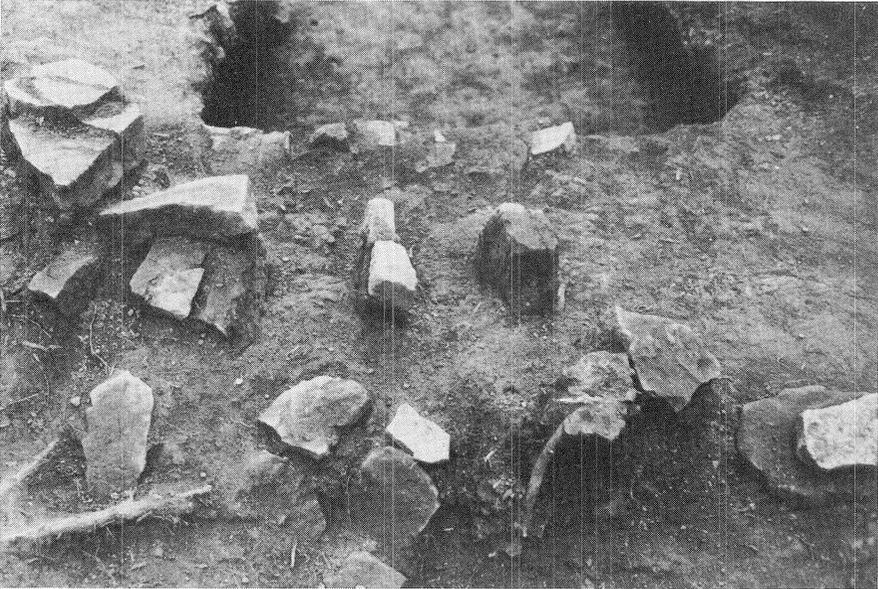
窯跡全景



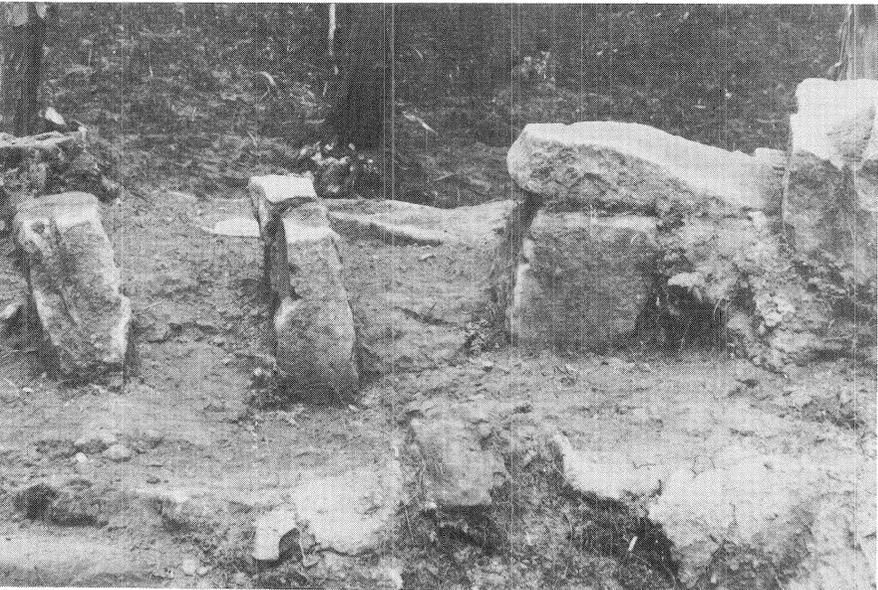
落ち込み部全景



煙出し状況

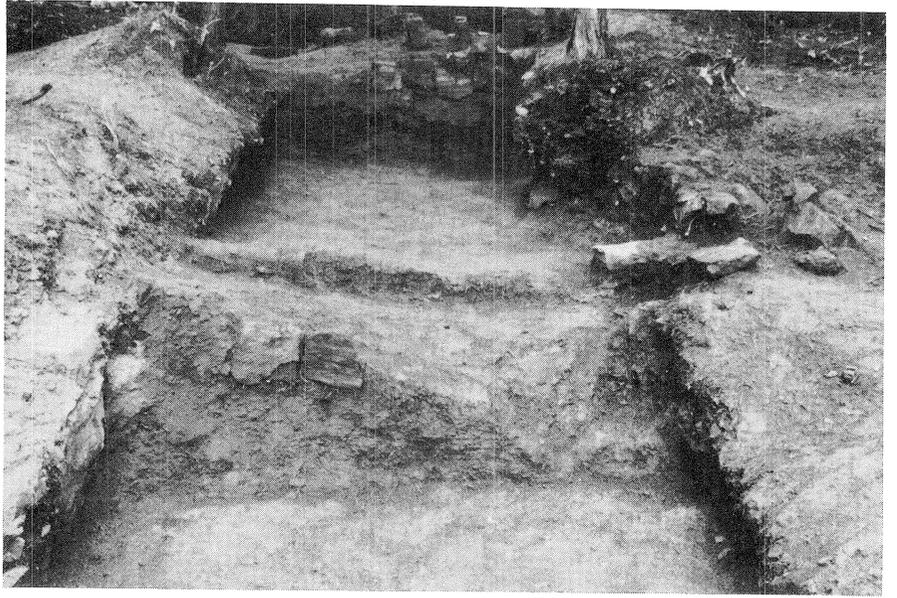


煙出し状況

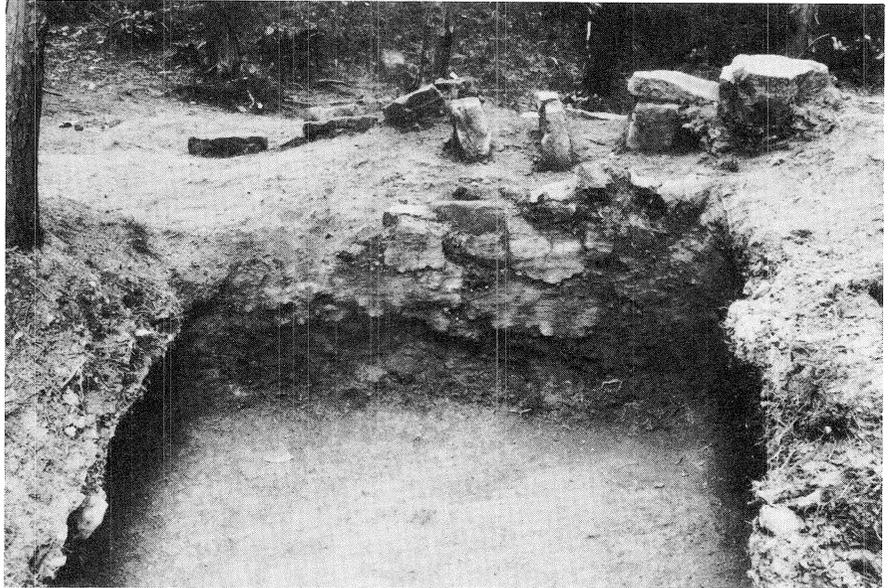


煙出し細部

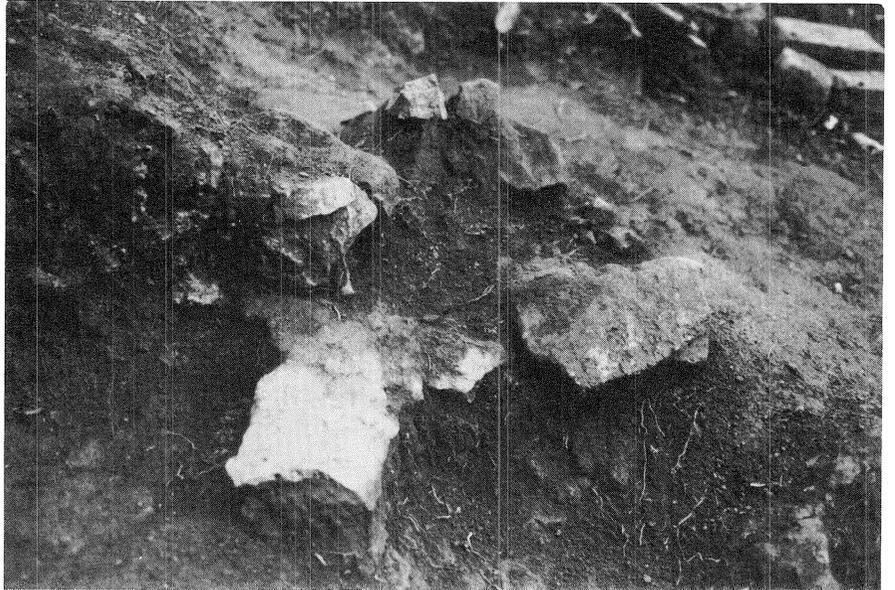
第1室から第2室の状況

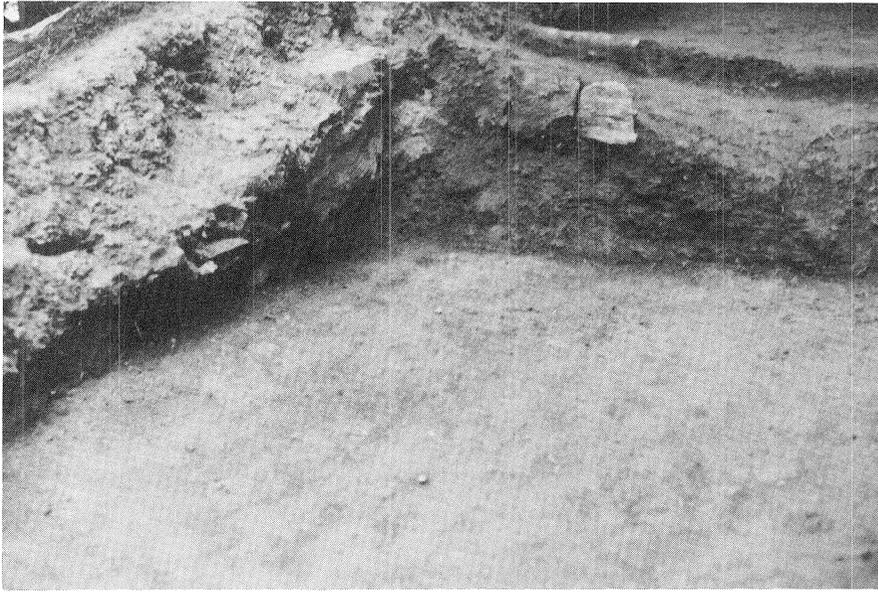


第1室奥壁状況

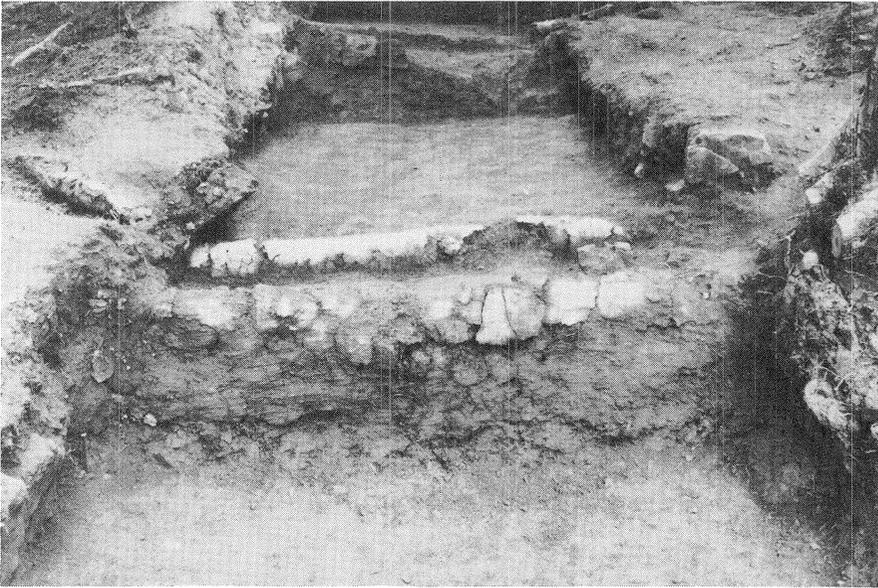


第1室焚口部状況

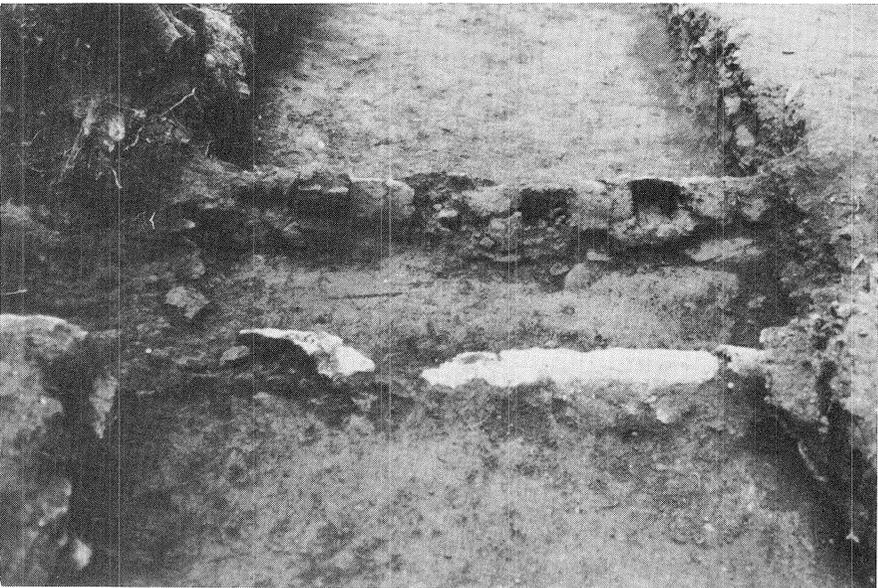




第2室左隅の状況

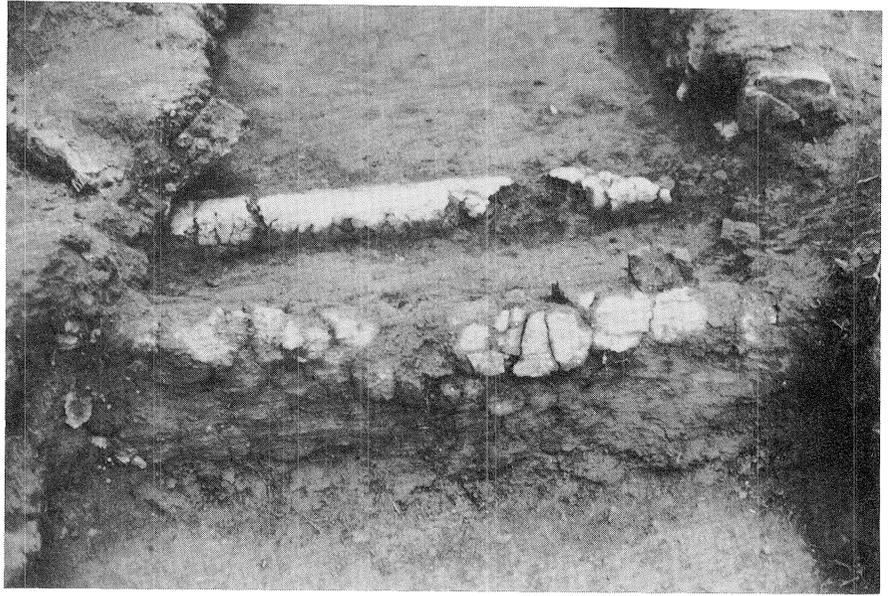


第2室全景

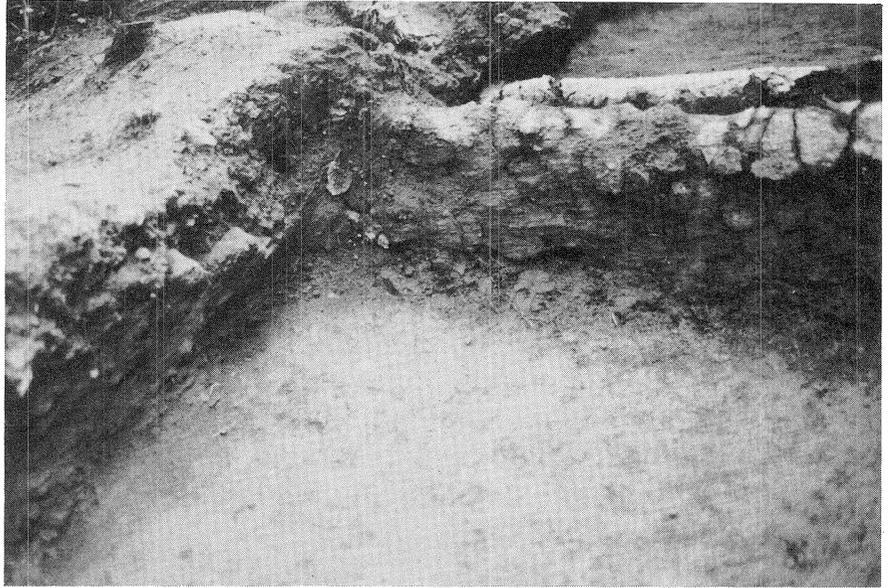


第2室火床状況

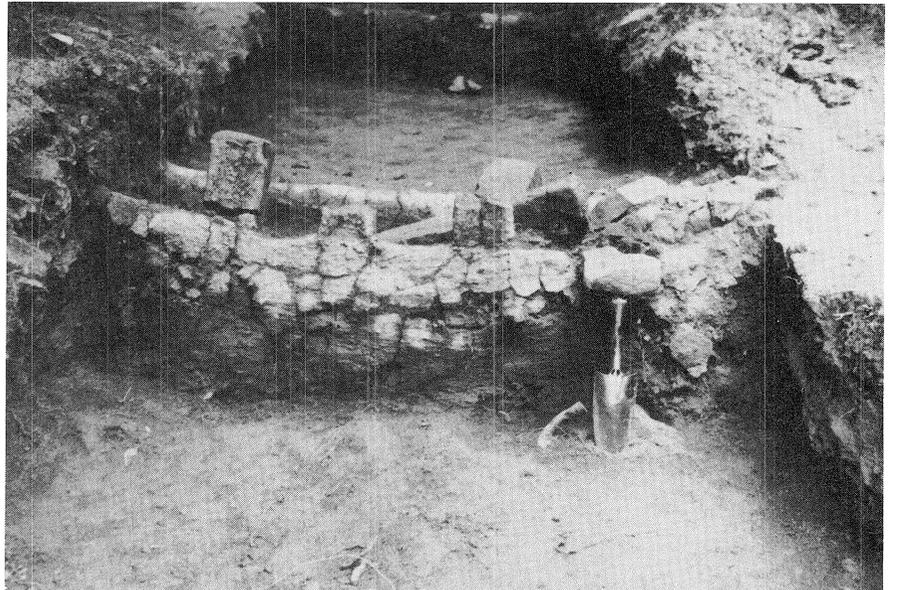
第3室奥壁状況

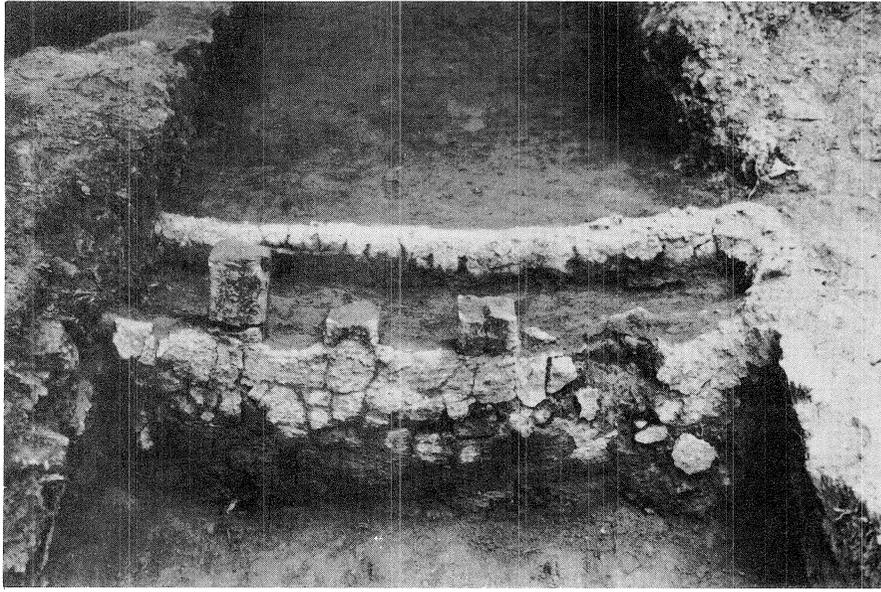


第3室左隅の状況

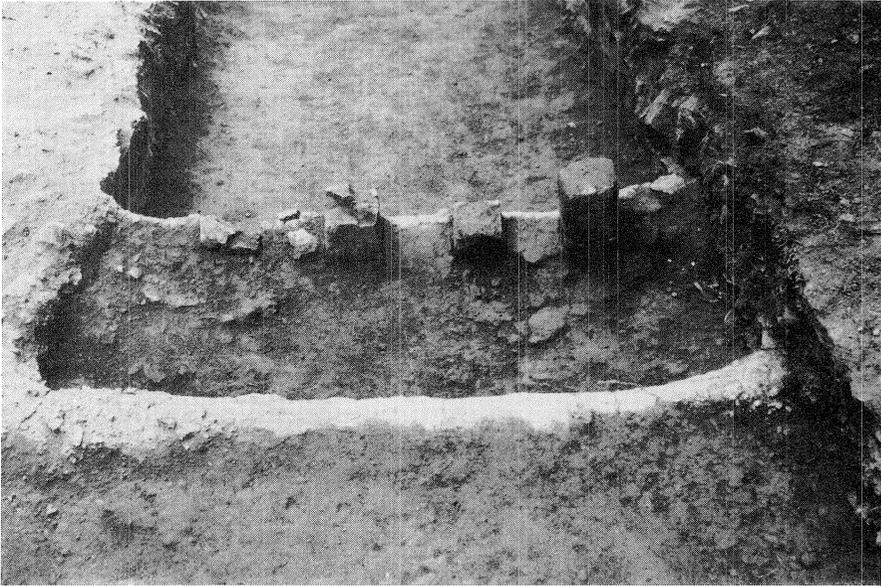


第4室奥壁状況

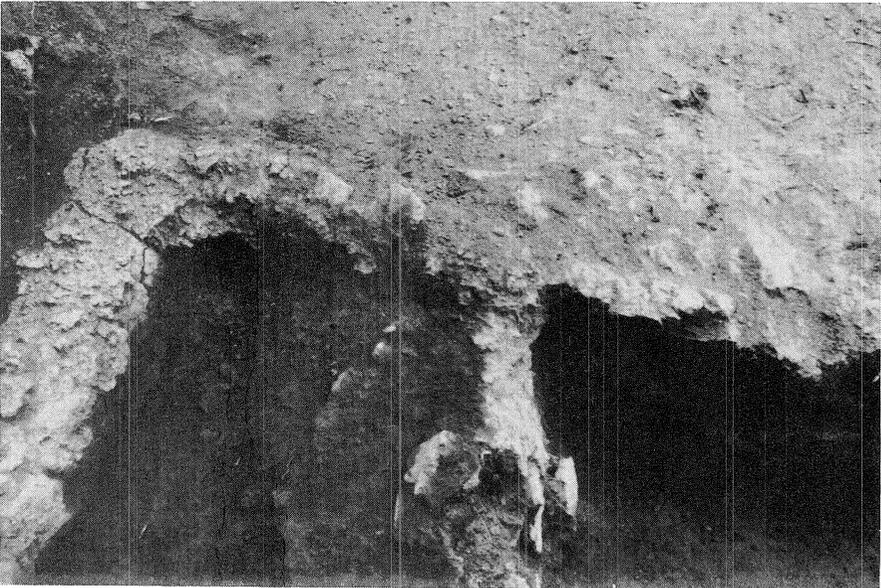




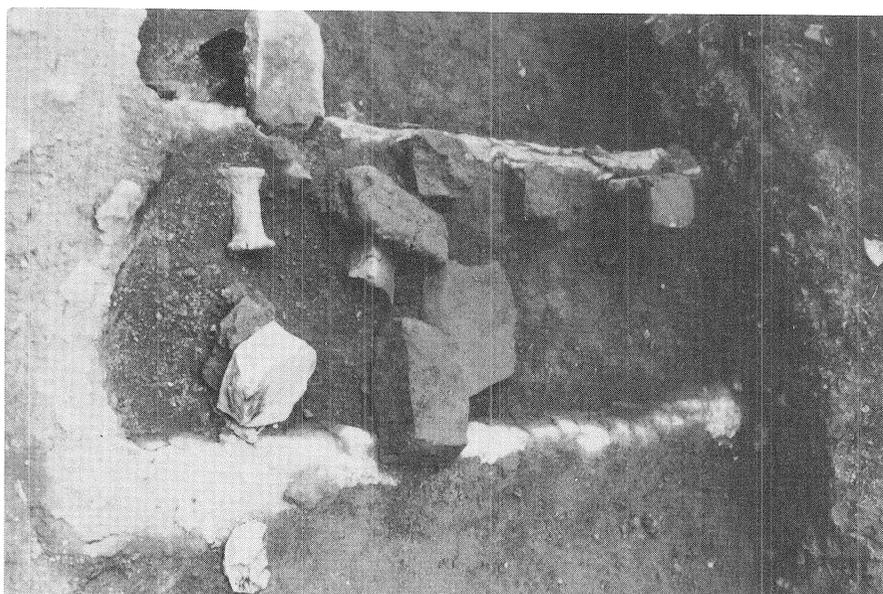
第3室火床状况



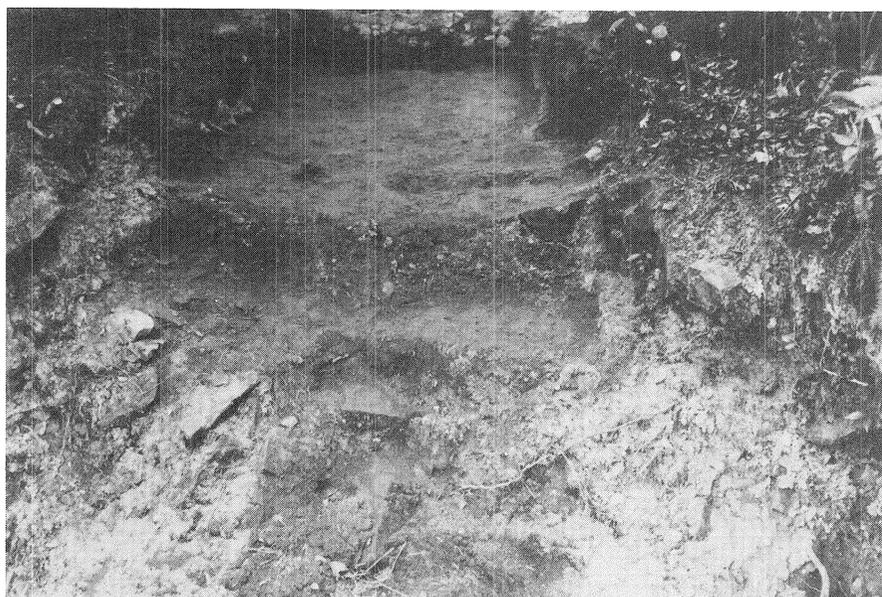
第3室火床状况



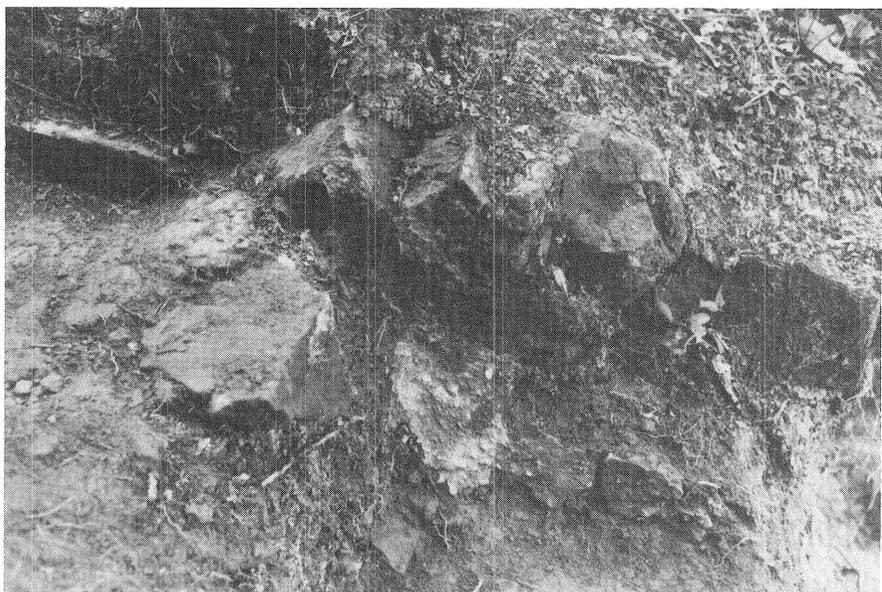
第3室焚口部状况



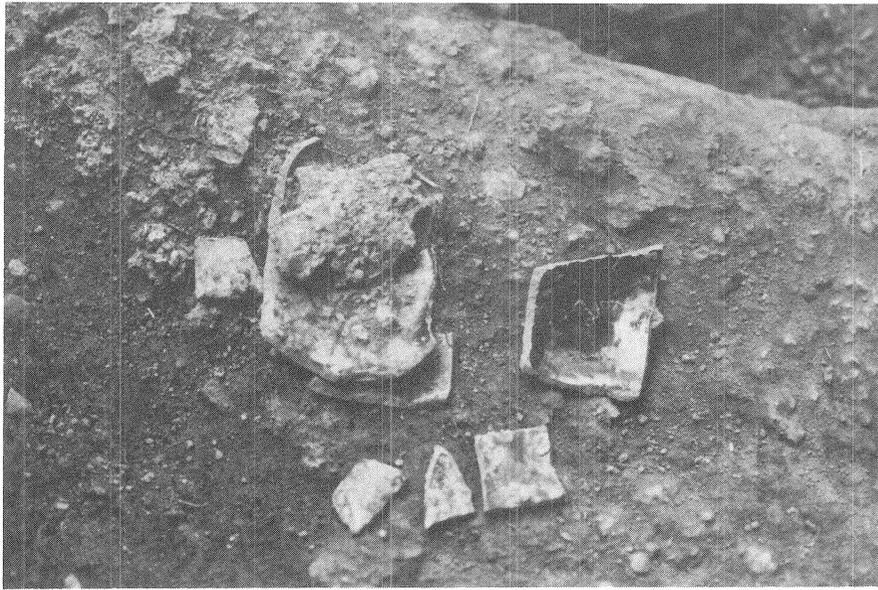
第3室火床状況



第4室・第5室全景



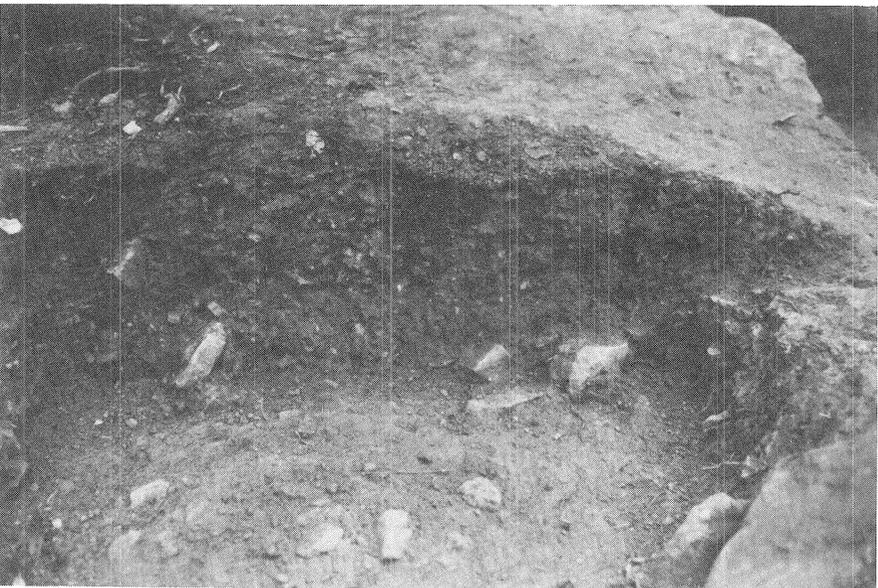
第4室焚口部及び第5室右側壁状況



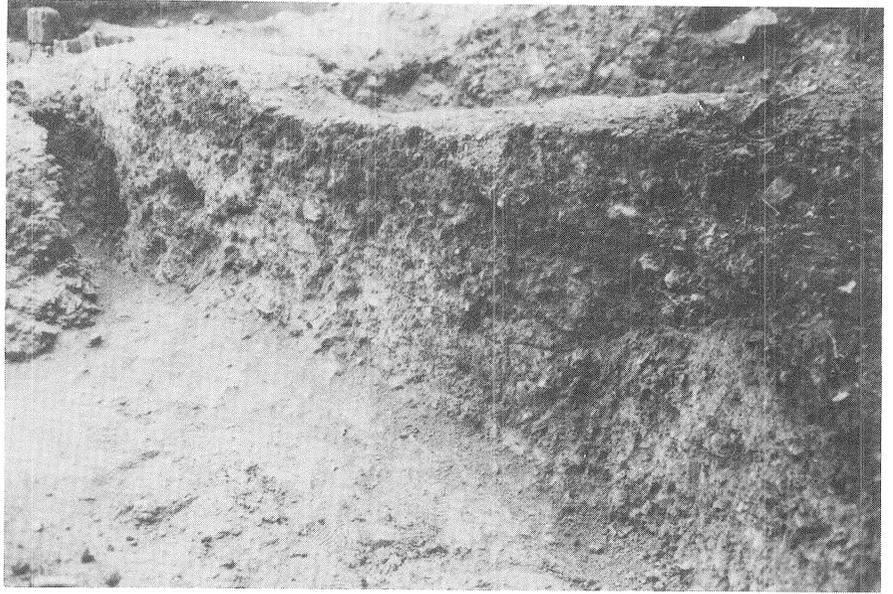
遺物出土状況（第3室）



遺物出土状況（物原）



土層断面（側溝）



土層断面（物原）



調査風景



残留磁気測定試料採取風景



1



5



6



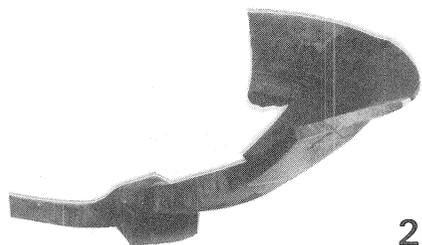
7



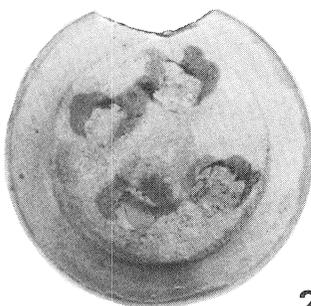
9



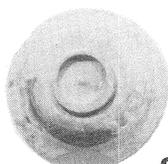
17



24



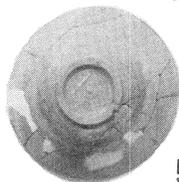
2



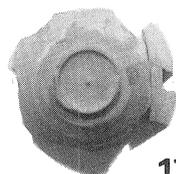
2



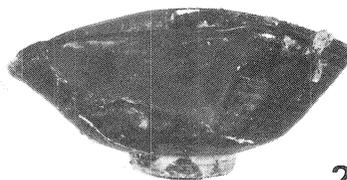
6



5



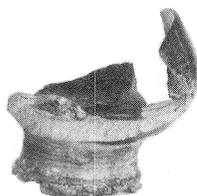
17



28



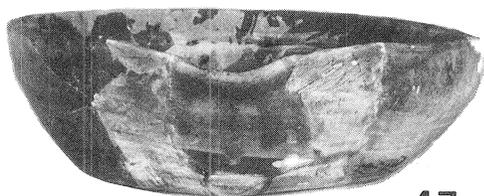
29



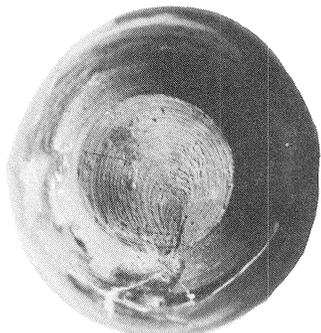
33



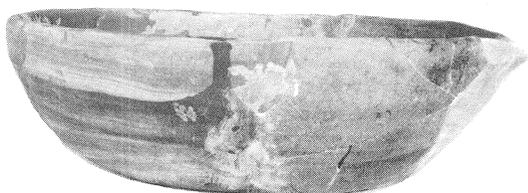
30-a



47-a



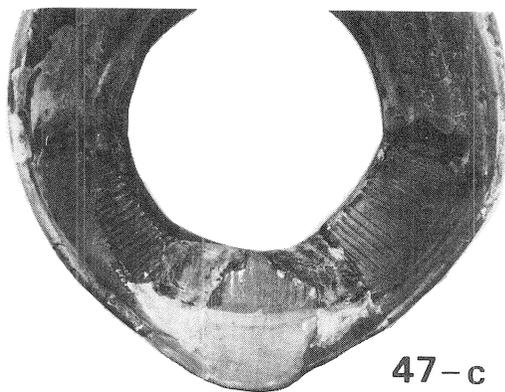
30-b



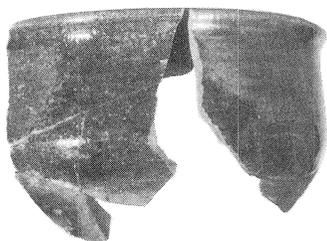
47-b



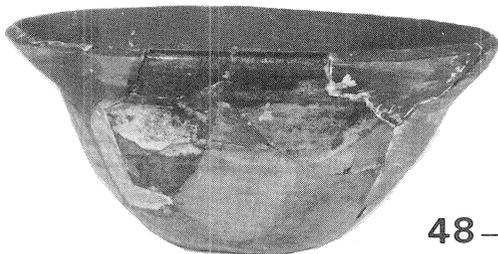
35



47-c



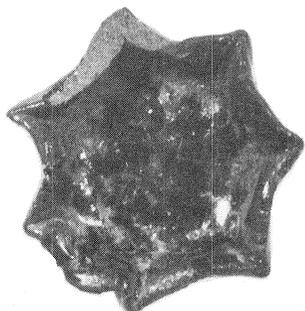
41



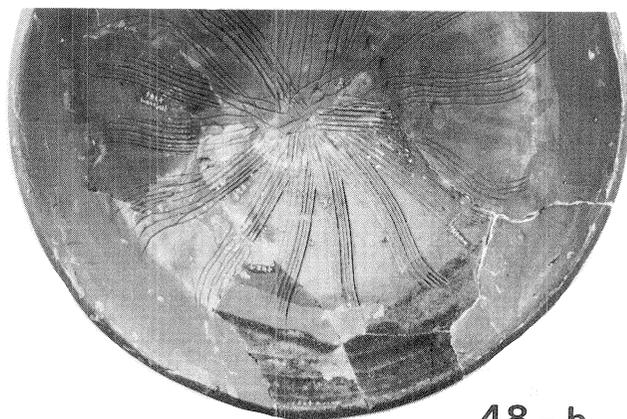
48-a



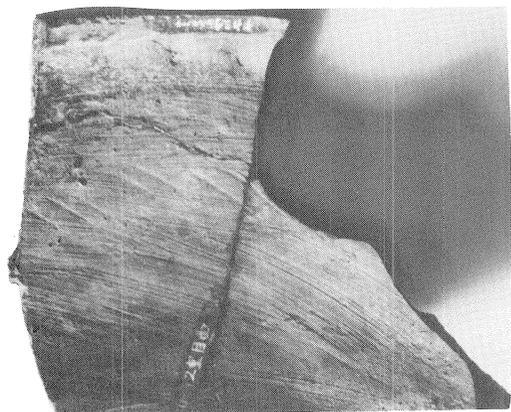
45-a



45-b



48-b



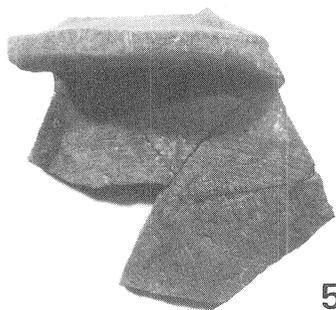
50



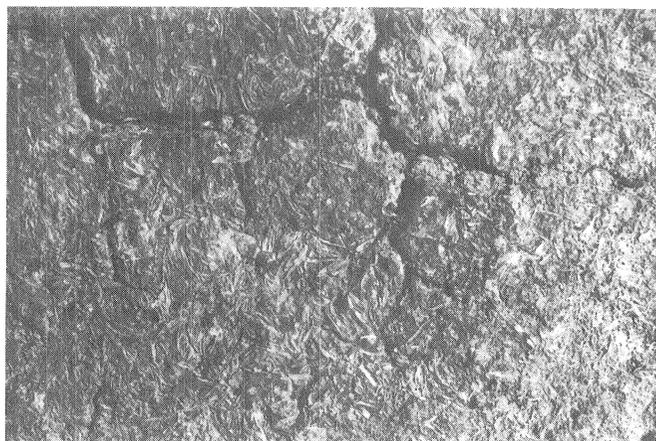
59



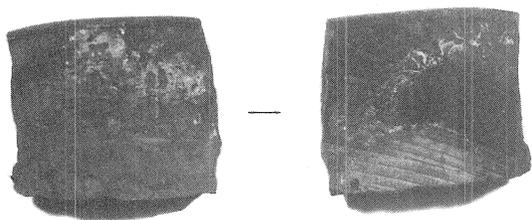
60-a



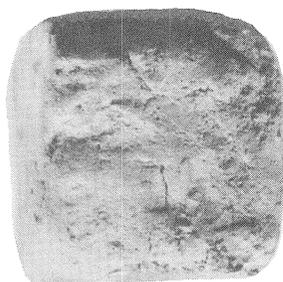
52



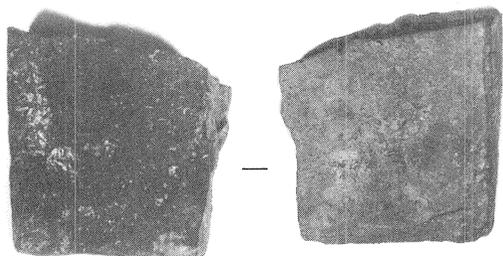
60-b



53



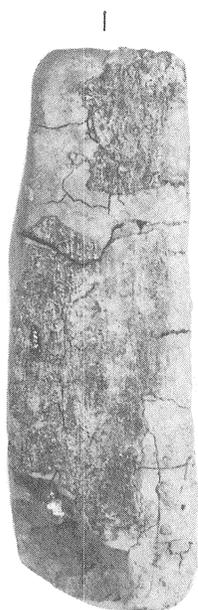
58-a



55



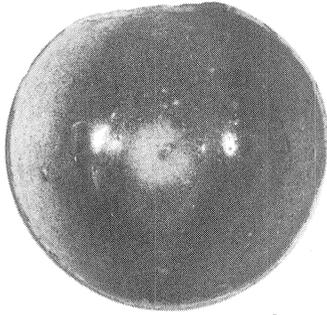
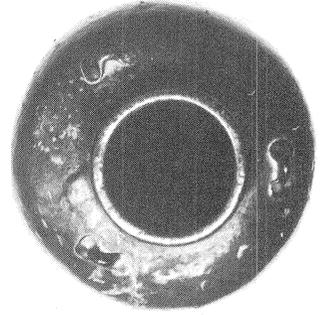
56



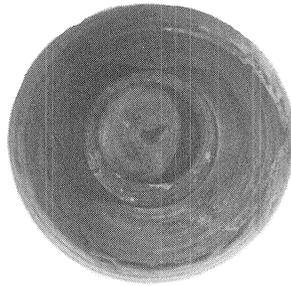
58-b



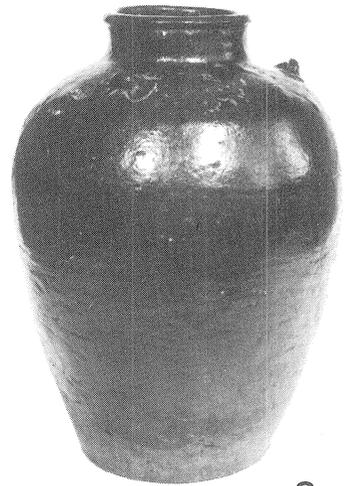
1-a



1-b



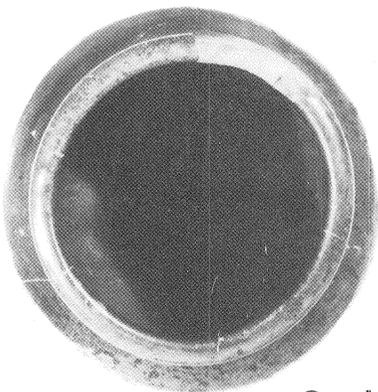
1-c



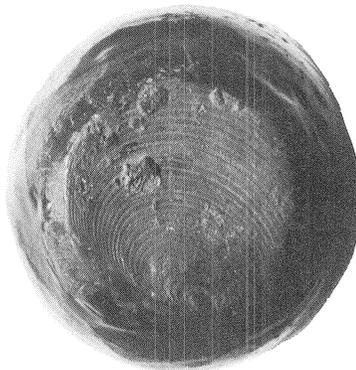
3



2-a



2-b



2-c



4

文化振興課

諫早市文化財調査報告書第6集

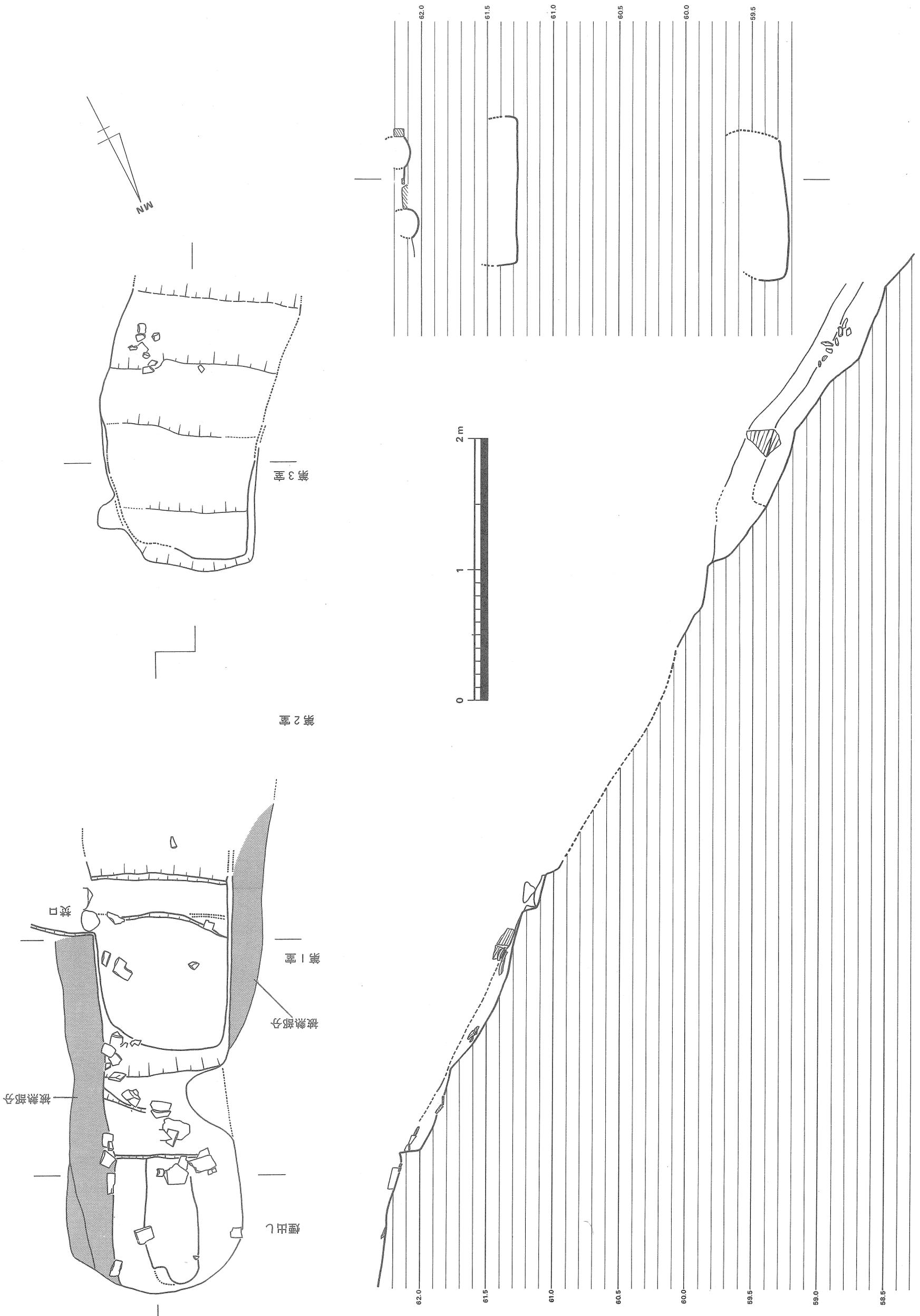
土師野尾古窯跡群

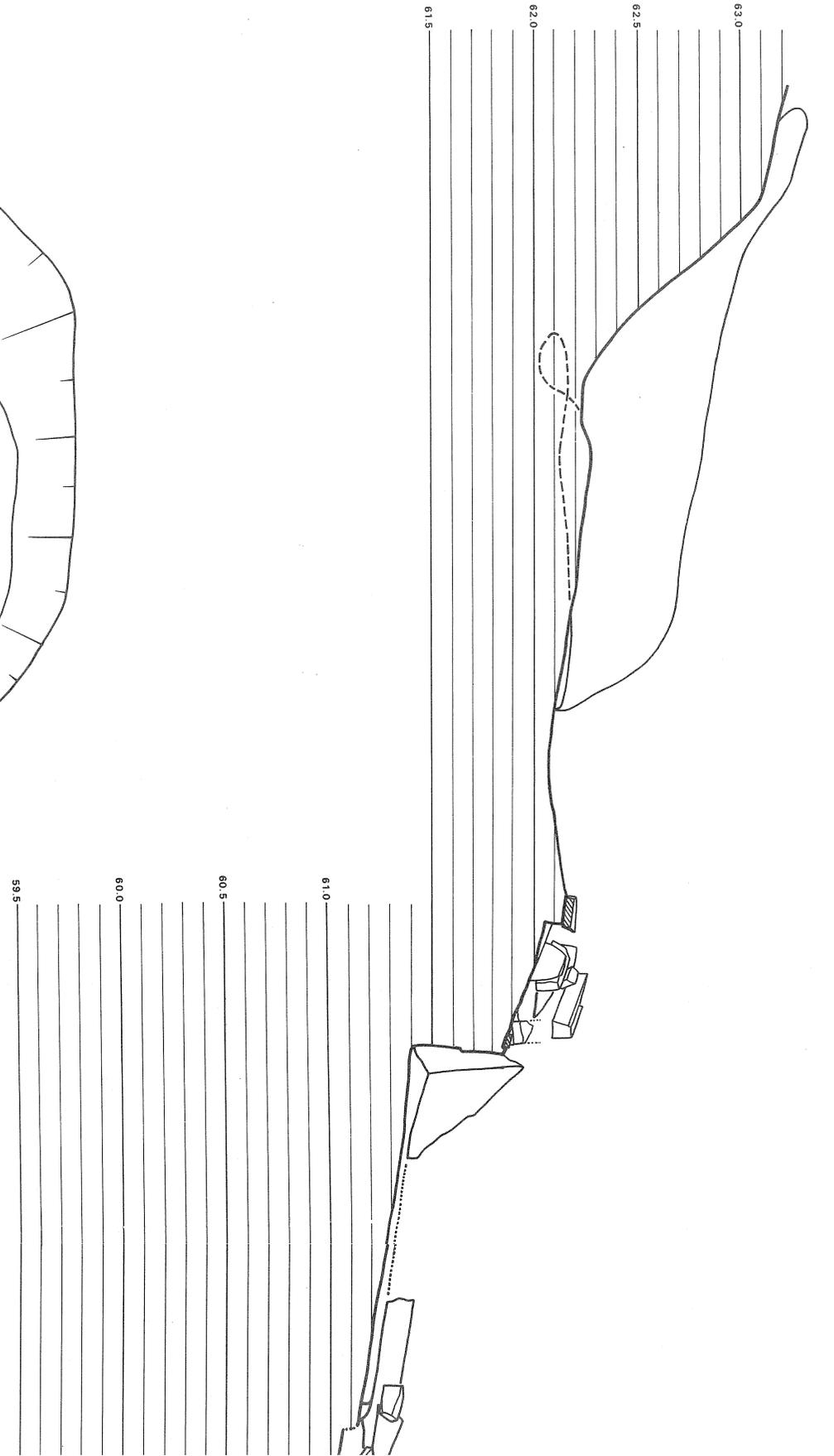
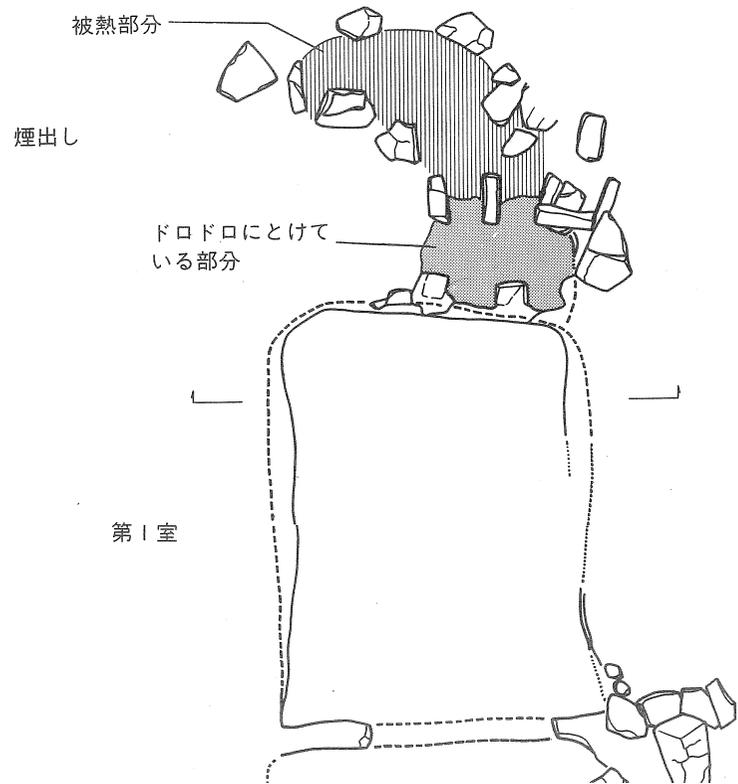
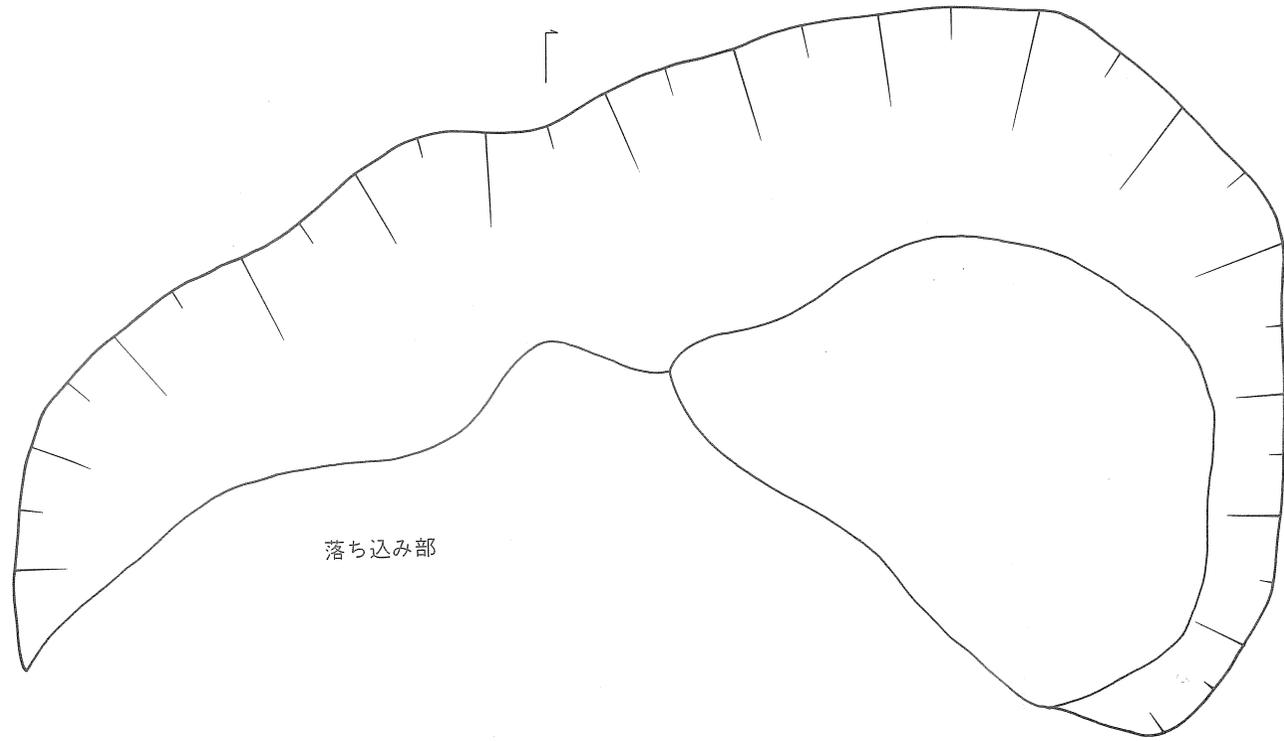
第1版 昭和60年3月31日

第2版 昭和61年7月10日

発行所 諫早市教育委員会
諫早市東小路町1番地

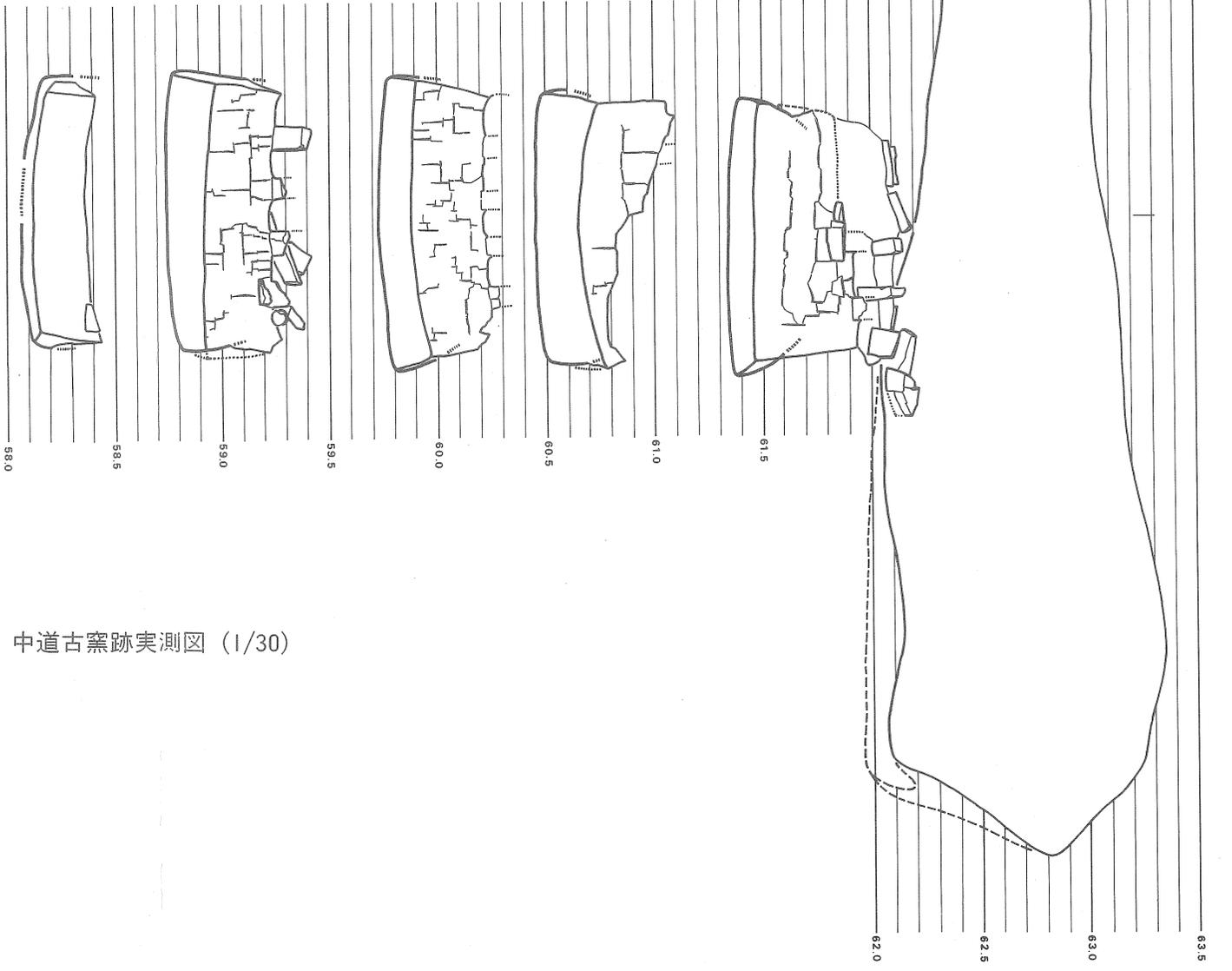
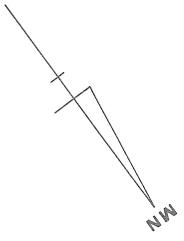
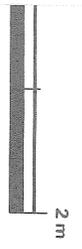
印刷所 昭和堂印刷
諫早市長野町1007



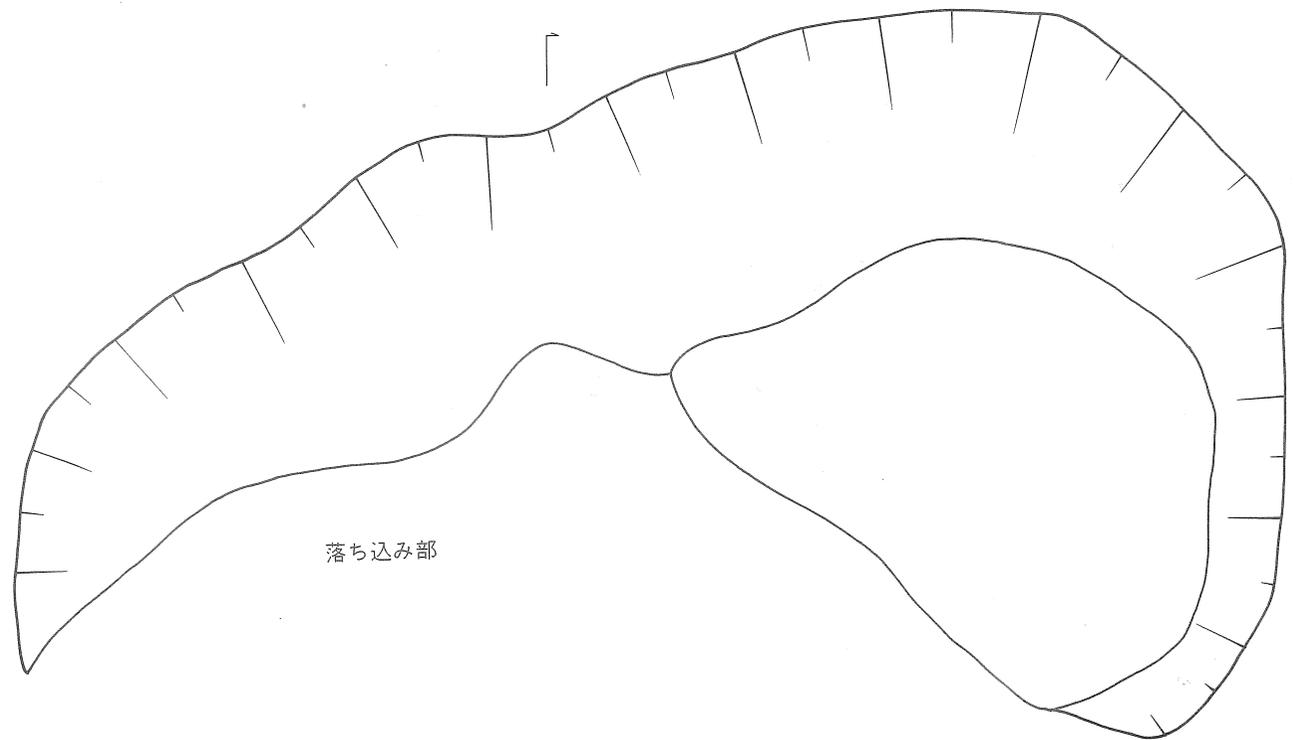


- 1. 表土
- 2. 淡茶色土
- 3. 焼土混りの淡茶色土
- 4. 細粒を含む黄茶色土 (地山)

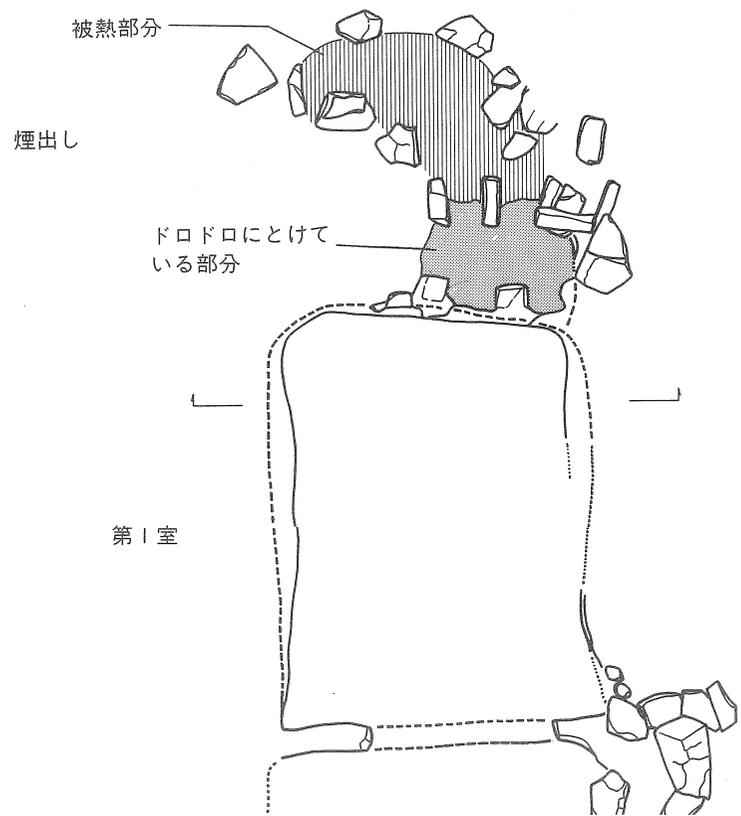




別図第2 中道古窯跡実測図 (1/30)



落ち込み部

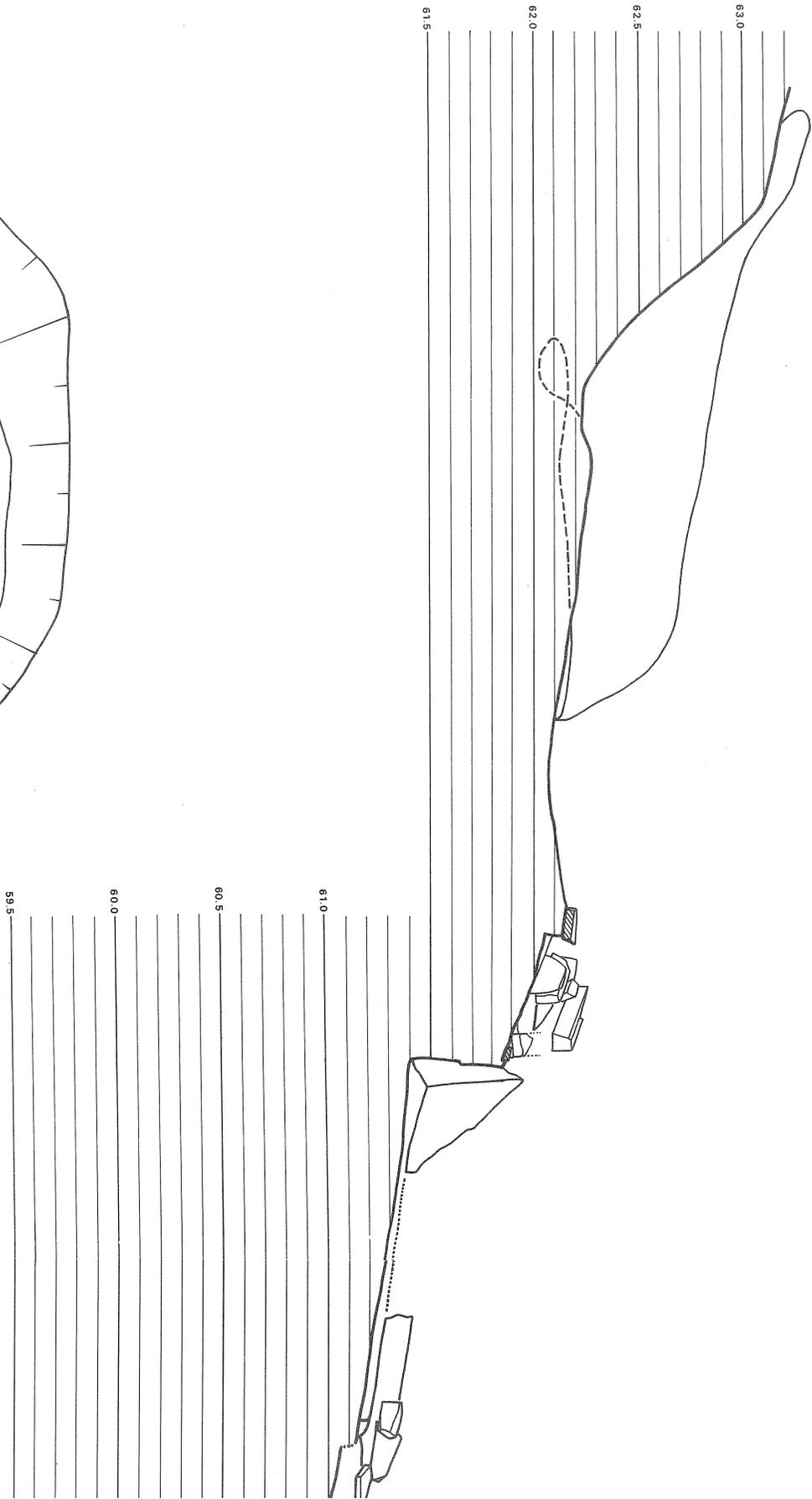


被熱部分

煙出し

ドロドロにとけている部分

第1室



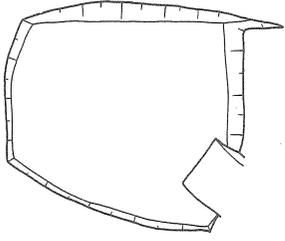
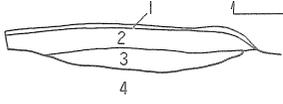
第2室

L-60.5

第3室

第4室

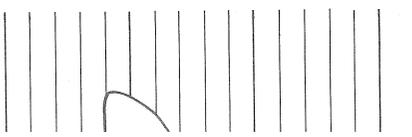
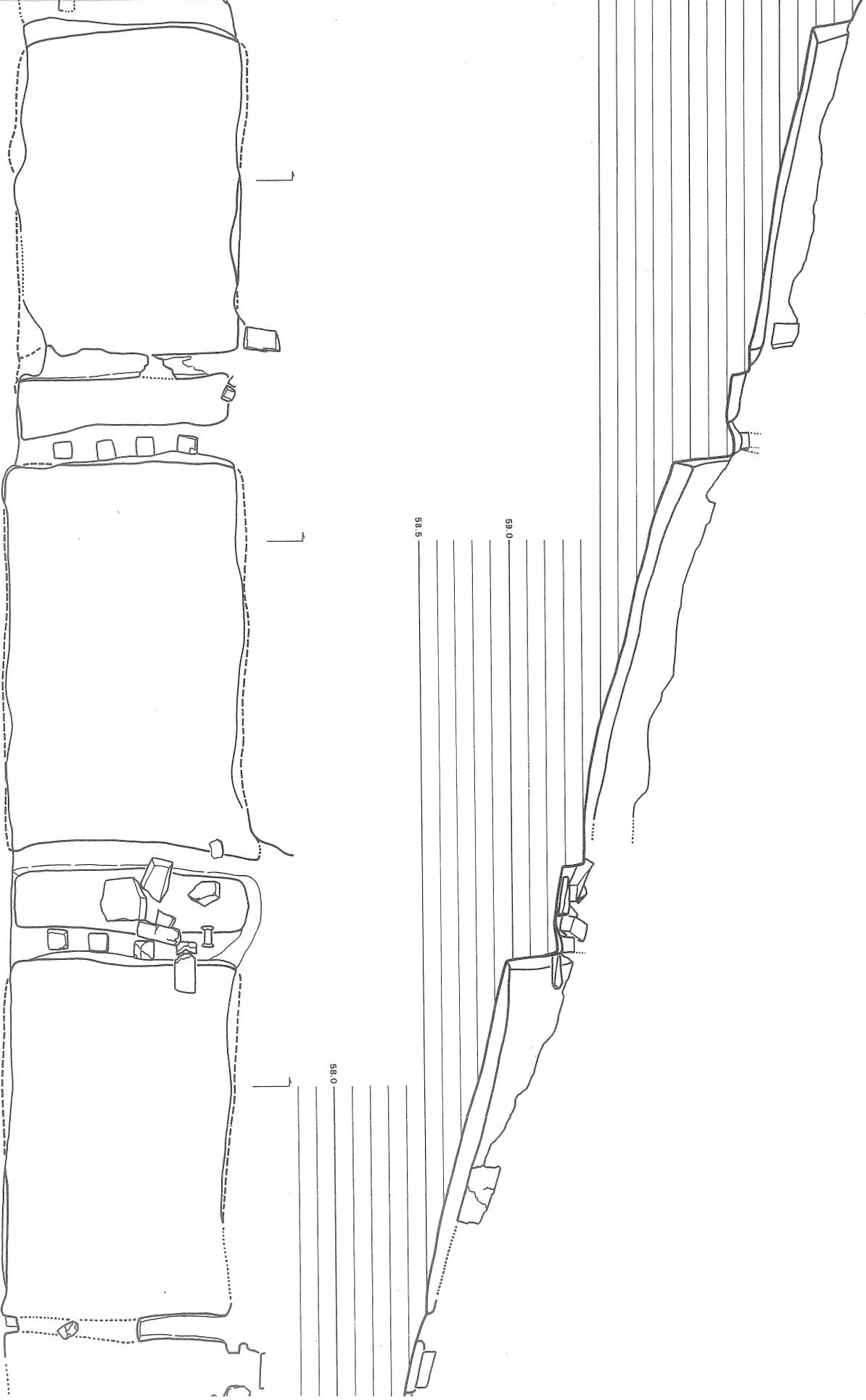
- 1. 表土
- 2. 淡茶色土
- 3. 焼土混りの淡茶色土
- 4. 細粒を含む黄茶色土 (地山)

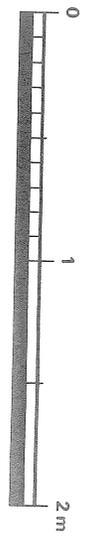


58.0

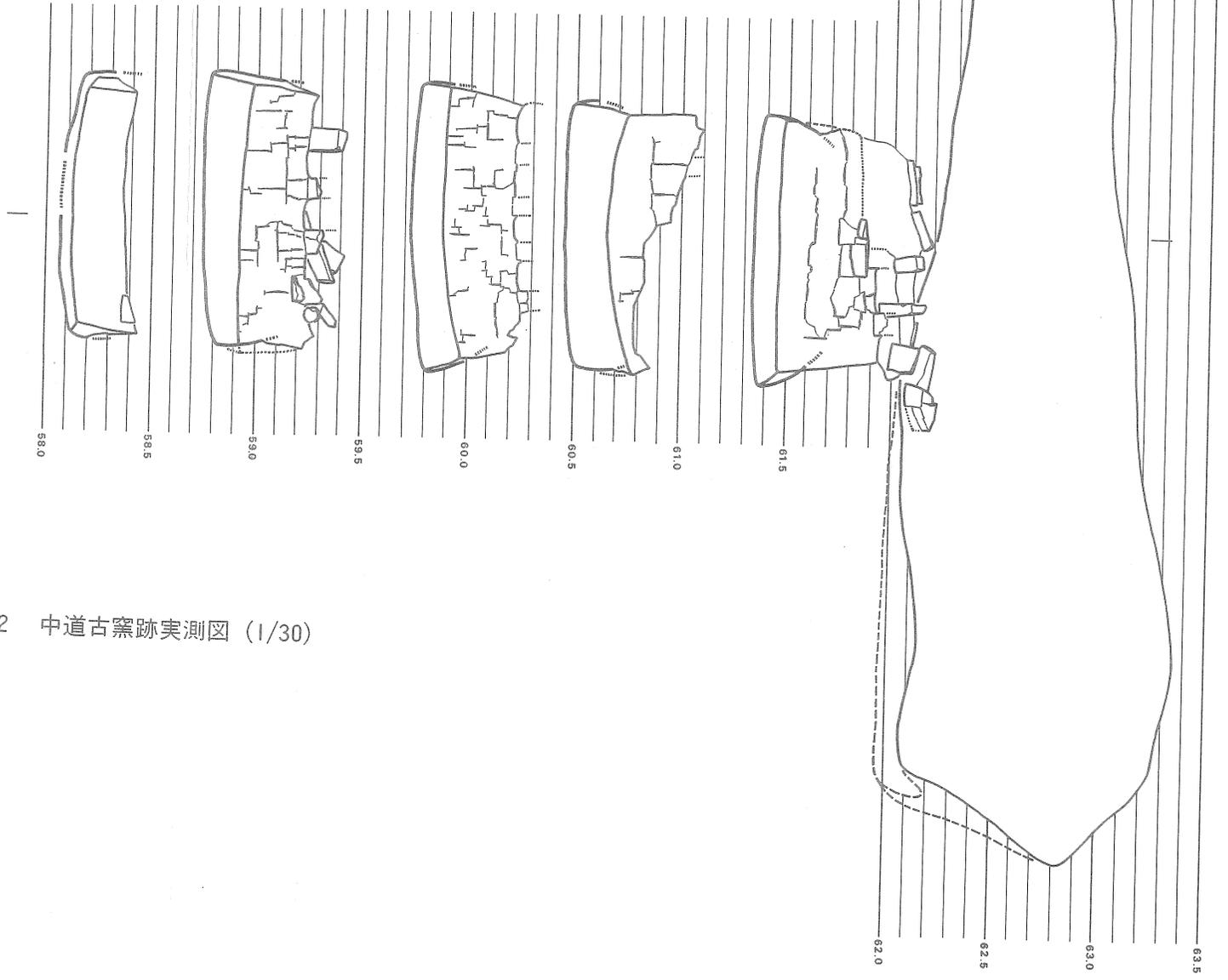
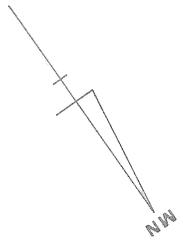
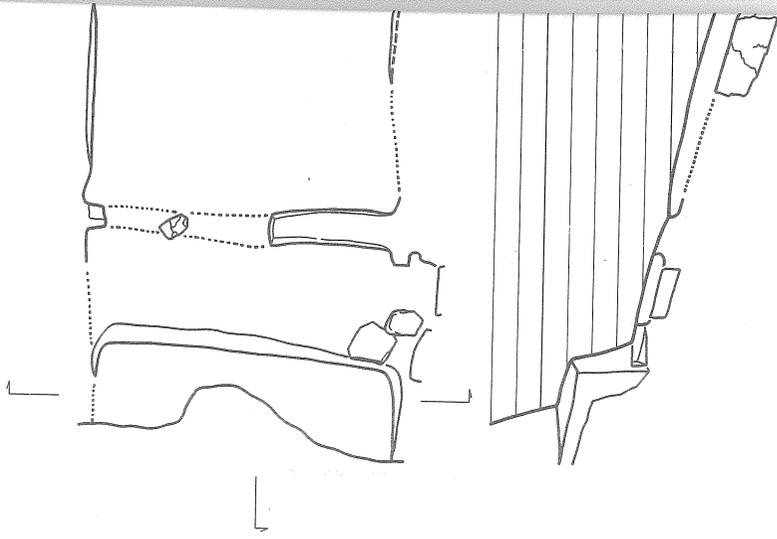
58.5

59.0





第5窟



別図第2 中道古窯跡実測図 (1/30)